
タランティルスの例外少年

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タランティルスの例外少年

【NZコード】

N7043X

【作者名】

アセツト

【あらすじ】

センター・ハート家の従者でありながら、学園に通うロイ。彼は、落ちこぼれ扱いを受けながらもセンター・ハート家の護衛権の従者として学園生活を送っていた。

そんな思いを抱く一人の少年の運命はとある悪魔と出会いことで動きだす。

これは、いつだって「例外」だった者の物語。少年は何者にも理不

勿に縛られない存在になるため歩み出す…

この作品は主人公最強などの要素があります。そういう表現を嫌う方はお気をつけて。

現在、王都脱出編。赤毛の少女と邂逅したロイは王都を離れる羽田になり——

PVが15万を突破！！！ひとえに皆様の応援おかげです。ありがとうございます。

プロローグ（前書き）

みなしへお願こじめす。

プロローグ

ある男がいた。それは捨て子で記憶喪失で不幸な少年だった。しかし、そんな少年にも僅かに幸せを見出せるものがあった。

それは強くなること。どんな不幸や理不尽をも弾きとばす圧倒的な力を手にすること。どんな蔑みや嘲笑をも吹きとばす絶対的強者になること。

これは不幸でも雖われても落ちこぼれでも決して諦めずに最強を求めた少年の物語。

舞台は魔法と剣術とが生きていく為のステータスになるファンタジーの世界タラントails。

彼はここで最強を目指す

プロローグ（後書き）

頑張ります。

第一話 学園へ（前書き）

プロローグが説明だった・・・

第一話 学園へ

「今日も学園か・・・」

そっぽやいでいるのは、ロイ・カーレス。

つまり俺である。俺の紹介をさせてもうひとつある貴族のウチのタダ飯喰らいという肩書きくらいしか無い。そこが世知辛いところではある。

しかしそんな俺にも生きる目的があるんだ。それは俺が捨てられた日の誓い。

それは強くなること。

何故強くなりたいのかって？

そんな疑問には簡単に答えられる。それは捨て子だった俺を拾ってくれた人達や大切な人に恩返しをするためだった。

「荷物持ち。なにぼやいでるのーーさつわと
学園いかないと遅刻するわよーー」

そう怒鳴ってきたのは俺が厄介になっている貴族の家のお嬢様だつ

た。名前はアメリカ・

アイラス・センター・ハート。容姿端麗で優等生。黒髪の美少女である。この家に拾われなかつたら、会つこともなかつたであろう人種だと思つ。

俺はお嬢様に

「学園の準備でおくれました。それでは学園へ向かいましょ。」

「ええ。じゃあこの荷物お願ひ。私じゃ重くて。まあ、落ちこぼれには荷物持ちがお似合いね」

アメリカお嬢様は優等生だが落ちこぼれの俺には割と冷たい。まあ、今まで学園に通つていなかつたからな。それに俺の立場が平民といふことも理由の一つだろう。

「はい。お持ちします。」

そういうてアメリカお嬢様から登校鞄を受けとる。お嬢様は守りたい人なので、苛立ちはしない。それに俺を拾つてくれた大恩人の娘様を無下にもできない。だから俺は学園でも家でもお嬢様の従者となつてゐる。といふか従者になれて嬉しい。

ついでに俺は記憶喪失でセンターハート現当主ラザイン様に拾われ

た以前の記憶がない。まあ・・・ほんの少しだけ、隣に記憶はあるんだが、ろくなもんじゃなかつた。だからこの立場も甘んじて受け入れている。

「じゃ、早く行くわよ落ちこぼれー！」

「はい、お嬢様」

そうお嬢様から声をかけられ俺はいつも通り学園に向かった。

第一話 学園へ（後書き）

唐突すぎたかな？拙作ですが、応援おねがいします。

主な登場人物（前書き）

登場人物紹介です。随時更新していくつもりです。ネタバレあるかな？注意。見ておいても問題は無いと思いますが。

主な登場人物

ロイ・カーレス

主人公。負けることを嫌う少年。寡黙で冷徹に思えるが心は暖かい人物。幼少期にセンターハート家現当主ラザインに拾われた黒髪の少年。15才の割には魔法や剣術を使いこなせていない落ちこぼれ。それは今まで学園に通えるような環境では無かつたからである。実際は才能に満ち溢れている。努力家である。顔は整っている。ロイという名前は便宜上必要だから、自分でつけた。階級は平民。使い魔はサタン。

アメリカ・アイラス・センターハート

容姿端麗で優等生の美しい黒髪の少女。ロイには厳しいが他の者は優しい。ロイに厳しいのはこの世界でのステータスである実力がないという理由だけ。平民だからといって差別する人格ではない。ロイの境遇は知っているので若干応援している？凜とした少女で基本的に優しい。15才。階級は上流貴族。使い魔は炎龍。最近はロイに心を開きつつある。

ラザイン・アイラス・センターハート

人格者。徳のある人物。妻が亡くなつて傷心中の時、心の傷を舐め合うようにロイを拾つ

た。現在のセンターハート家の当主。魔法や剣術をかなり使いこなせる。しかし魔法や剣術をあくまで交渉の手段としてしか極力使うとはしていない。ロイの修行をたまに手伝つている。平和主義者。

42才。階級は上流貴

族。男。王国軍の中核にいた経歴がある。

レーナ・サンホープ・センターハート

故人。ラザインの妻。アメリカと似て黒髪の美女である。ロイが貴族と認めた最初の人。多くは語られていない。

リーゼ先生

男の優秀な先生。本名は生徒達にも教えていない。リーゼは偽名ではないらしいが・・・ともかく自分をオープンにしない人。イケメン。かなりの実力者。ロイに興味がある。

ケイル・ギュンター・リバイル

男。15才。ロイを馬鹿にしている。正確には落ちこぼれ扱いをしている。実力はアメリカには及ばないが、中々の実力を持っている。中流貴族。使い魔は風龍。戦闘狂の気がある。

サタン・ホーリーナイト・イエスタディ

悪魔と聖なるものの名を持つロイの使い魔。使い魔の中ではトップクラスの実力。しかし、ロイの魔力量が少ないので、黒猫としての姿でしか顕現出来ない。本来は金髪の美しい美女。数千年の時を生きている。ロイを「主様」と呼び慕っている。ロイに仇なすものには基本的に容赦しない。

学園長

ロイの実力を不審に思う人物。学園に危険が及ぶならロイを排除しようとも思っていた。しかし、ロイの真っ直ぐな眼を見て考え直す。学園のためなら手段を選ばない狡猾な初老の女性。

トリフロス

王国軍の一個師団が苦戦する相手。白銀の龍。学園に侵入したらしが・・・全てが謎に

包まれている。

エニア・シャンドル・セントラル

セントラル王国の第一王女。絶世の美姫と言われるほどの美少女である。父親が力に執着しているため、今までろくな目にあつてこなかつた。エニア自身も学園に通っているが、休みがちである。おかげで、実力は低い。政治的価値の面からセントラル王には気にいられている様だ。孤独な少女である。

セントラル王

力を全ての基準と考えている苛烈な男。王としての器は完璧であり、頭も回る。力に執着し過ぎているのか、弱いものには容赦がない。平民などは死んでもいいと極端な思考をしている。しかし、強いものはどんな立場のものであつても、重用する。

ジュイス・レンティア・イサラーシャ

王国軍の騎士の序列八位。青髪の女性である。騎士道に厚い騎士である。主な得物は槍。魔武器はブリュセルス。王の直属部隊に所属している。

ティナやセリア

最近はロイに好感を持つている . . . ?

主な登場人物（後書き）

見ておいた方が物語がわかりやすいかもしません。 作者の文才が無い為に苦労をかけます。少し更新しました。

第一話 護衛権の従者（前書き）

第一話です。会話文少なめかもしれないです。

第一話 護衛権の従者

ここはセントラル魔法学園。毎年優秀な人材が輩出される進学校である。なぜ俺がこの学園に通えているのかといふと、お嬢様のおかげだ。詳しく述べてもうとアメリカお嬢様は貴族の中でも上流貴族である。上流貴族は一人だけ家から特別に従者を連れていくことができる。

これを「護衛権」という。

まあ、普通の護衛権で学園にきた従者たちは年配の人も多いし、実力が高い人も多い。つ

いでに説明させてもうと普通の従者は学園には通えない。護衛権で来た従者たちは基本的に学園の外で貴族たちの要請があるまで待機している。

俺が学園生活を送れるのは実質ラザイン様のおかげだ。従者で平民な俺でも学園に通えるのは幸運なのだろう。クラスメイトからの待遇は厳しいが。

そんな事を思いながら、お嬢様と共に教室に入る。クラスは1-Aである。

「おはよう。みんな。」

こいつたのはアメリカお嬢様。

「おはよつ。アメリカさん。」

クラスメイトから羨望の眼差しをつけながらあこやべつに返答されていく。

一方俺は・・・

「よつ。魔力の知識も低いし剣術の心得も全然ない落ちこぼれの平民従者君」

無論、落ちこぼれとは俺の事だろつ。またケイルか・・・

「はい。おはよつ」わこます。ケイル様」

まあ、護衛権の従者だから、当たり障りのない返答をしておく。どうせ平民だ・・・

「うわー。あのがアメリカさんの護衛権の従者だと思ひと可哀想だよね」

「実力もないし、学もあまりないからな。なぜあんなのをなぜ護衛権の従者にしたのか・・・センター・ハート家の七不思議の一つだな」
七不思議・・・?そこまで言われるのか?

我ながら酷い言われようだな・・・お嬢様もこちらを睨んでいるように見えるし。まあこの世界はほぼ実力が全て。今までろくな教育を受けていない俺の評価はそんなものか。

しかし、俺はいつの日か絶対に強くなつてみせる。

目標がある奴は強くなれるというのがおれの持論だ。おれが目指すのは圧倒的な力。やる

からには、最強を目指そうと思ひ。自分を磨くことが今の俺の唯一の娛樂だし。

そう思つてゐるなか、俺は一人静かに呟いた。

「絶対に強くなつて・・・人並みの幸せを手に入れてみせる。そして、センター・ハート家に恩返ししてみせる」

実力が上がれば平民でもこのタランティルスという世界ではのし上がるからな。恩返しも何か出来るだろ?。

俺は決意を新たにした。

まあ、気長に強くなつていこう。

そのすぐ後、1-Aの教師らしき人物が教室に入ってきた。

第一話 護衛権の従者（後書き）

ある程度状況説明が終わつたら、会話文を多めにしたいです。

第二話 滅めじ得ないこの世の残酷な口論（前編）

頑張っています。

第三話 落ち着いたての些細な口論

「これからSHIRをはじめた。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼」

学級代表のお嬢様が先生の呼び掛けに答え、皆も

「　　礼。」

と答える。生真面目なクラスだなと俺は思っていた。

いや、この位普通か？

まあ、そんなことはいいか。

しかし、今思つたがリーゼ先生ってすごい若いな。あ、リーゼ先生は担任のことだ。

あんな年で由緒正しいセントラル高等魔法学園の先生になれるなんて凄いと思つ。

俺が成長したら、手合わせして貰いたい。まあ、そんな積極性は俺にはないが。

「これで終わります。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

「　　「礼。」

あつと、一人思案にふけっていたら、何時の間にかSHRが終わつてたな。

一人、礼をする時起立しなかつた俺は不要な注目を浴びていた。

「落ちこぼれが態度まで悪かつたらお終いだな」

そつこぼすのは中流貴族のケイル。魔法の実力は学園の一年生ではトップクラスだつたな。

「すみませんでした。少し思案に耽つていて・・・」

まあ、俺は当たり障りのない返答をした。俺の階級は平民。貴族相手には敬語を使わなければならぬ。この敬語やらなんやらをマスターするのにかなり時間がかかつた。従者の立場も大変だ。

「ま、おまえの事なんてどうでもいいがな」

そういうて嫌な笑みを浮かべながら教室を立ち去るケイル。この貴族・・・弱い奴にはとことん意地が悪いんだよな・・・自分と同格の相手は認めているらしいが・・・

こんな相手に、本来敬語なぞ使いたくないが・・・まあ、無理を言

つて学園に居座っているんだ・・・文句はいえまい。

それに俺が真に貴族と認めたのは三人のみ。いや、今は一人か・・・まあ、とにかく。俺は自分が認めた貴族にだけは心から敬いの気持ちを込めて敬語を言つている。

あんな中流貴族に心から敬語なんて言えないな。だから、あまり悔しくはない。

ん? そういうばなんでケイルは教室から出つてたんだ?

「今日の日程はSHRだけよ。荷物持ち。といふことで、鞄をよろしく。」

とお嬢様から声が掛かる。

「わかりました。お供したほうがよろしいでしょうか?」

俺がいなくとも大丈夫だと思うが・・・心配だ。もしこの方に何かあつたら・・・

「あんたのお供? いらないわ。友達と帰るから。じゃあね、荷物持ち

そりですか・・・

そしてお嬢様はスタスタ教室を出ていった。なんか寂しい・・・

心に寒風が吹きすさぶ。

はあ・・・

入学間もないから授業らしい授業もないし俺も今日は帰るか。

セントラル魔法学園高等部で俺はやつていけるだろつかと俺はこの時不安に思つていた。

第三話 落ちついでたとしての些細な日常（後書き）

お気に入り百突破！！

第四話 天賦の才さらには努力（前書き）

小説更新もなかなか大変です。

第四話 天賦の才さらには努力

俺はセンター・ハート家の屋敷の中庭でいつものように俺の恩人ラザイン様に修行をつけてもらっていた。

「脇が甘いぞロイ君」

「くつ！」

そういうてラザイン様の剣術受けている俺。

ラザイン様は普段は人格者だが修行となると厳しく教えてくれる。本当にたまにしか修行してくれないからそこが残念だ。まあ多忙な方だし仕方ないな。

修行が厳しいのは俺にとっては嬉しいことだった。俺からラザイン様に頼んだことだし、何より俺が強くなりたかったからだ。

「しかし、ラザイン様の剣術は凄いです。剣筋が見えませんでした。

」

「まあ、手加減せずに打ち込んでいるから当然だよロイ君。」

「しかし、君は凄いね。剣術と魔法を全く知らない半年前から凄い勢いで成長しているよ。」

「何せ、私の全力の斬撃を感覚的にでも防げているのだから。魔法に関しても初級魔法ならかなり使えるし本当に凄いと思う。」

そう！ そうなんです！ 僕は半年前から魔法と剣術を学び始めたばかり。

つまり、学園に入る僅か前に修行をはじめたばかりなんだ。

まあ俺はセントラルの中等部ましてや他の学園にも入っていないことが知られているから落ちこぼれとして見られているが、

ラザイン様曰く、俺には・・・

「天賦の才があると思うよ。君には。もし君がアメリカや他の貴族の様に幼少期から英才教育をうけていたら、その実力は多分アメリカを抜いていたと思う。」

そんな事をいわれたら、やる気が出てこないわけがない。

「どうやら、俺は潜在能力とやらが人より高いらしい。素直に嬉しい。

「少しだけ希望も見えてきました。ラザイン様ありがとうございま

す。もう少し修行を続けてもらつても構いませんか？御多忙なのは承知しています。けれど、お願ひします！」

「私は構わないよ。ロイ君。」

「じゃあ次は魔法の修行だ。」

「はい！」

（・・・しかし、ロイ君は努力を惜しまない天才型か・・・これは教えている私も楽しみだ！それに時折感じる闇の波動・・・正直得体のしれない力だが興味もある。彼はクロフォードにどこまで近づけるかな？）

ラザインは一人そう思つていた。

第四話 天賦の才さらには努力（後書き）

ラザインが空気になりそうな予感・・・クロフォードという人物は後々登場。

世界観説明（前書き）

セントラル魔法学園高等部の在学期間は3年を想定しています。物語中に自然に入らないと思うので、書いておきます。作者の文才が無いばかりに迷惑をかけます。

世界観説明

この物語の舞台はファンタジーの世界タランティルス。ここは様々な魔法に満ち溢れている世界。魔法の凶悪さの度合いつまりランクを挙げていくと、

初級魔法

中級魔法

上級魔法

最上級魔法

未開拓魔法

となる。

最上級魔法があるのにその上のランクの魔法があんの？って感じではあるが、これはタランティルスの住人が未だにその魔法の領域に踏み込めていないことから、未開拓魔法と畏怖を込めて言われている。

魔法のランクの見分け方は純粋に流れている魔力量の多さで分かる。

この世界の魔法は詠唱を必要としていない。しかし、その代わり払わねばいけない対価がある。

それは気力。つまり精神力。魔力も対価に含まれている。もちろんランクが高いほどその対価は大きい。

この世界の戦闘は魔力も重要だが、気力といわれるものも重要なようだ。

これらの配分が戦闘では重要なのだろ。」

次にこの世界のステータスに大きく関わる概念、剣術についての説明をしようと思つ。

剣術は純粹に力と体力を消費するだけのものと思われがちだが、高度なものとなると魔法を発動する時にも使つた氣力を消費することになる。

武器は剣や杖を両方持つものが多い。

この世界には、魔武器というものが存在している。これもまた剣や杖といった形状が多い。この魔武器は中等部の頃に魔武器契約の魔法で取得するものだから、主人公のロイだけ現在魔武器を持つがないことになる。

次は使い魔についての説明をしたいと思つ。

使い魔は高等部で育つ、いや、育つところよつ契約するものだ。契

約の時出てくる使い魔の実力は契約者の潜在能力に比例しているといつ。

使い魔の詳しいランクは決まっていない。

人間に深い繋がりを持つ使い魔だが、詳しい事はよくわかつていなし。何れ使い魔と対話出来る人物が全てを解き明かしてくれるともしれない。

最後に軍とギルドについての説明。学園を卒業した後にはほとんどの人気がこの二つのところに「就職」という形で入ることになる。

軍は国の自衛や戦争の為に備えている組織。

ギルドは国中の依頼や戦争の予備戦力としての役割を果たしている組織である。

世界観説明（後書き）

大まかな世界観説明はこれで終了。大体タランティルスの構想はこんな感じです。

第五話　「Jの世界の魔法（前書き）

第五話です。どうぞ。

第五話 IJの世界の魔法

ラザイン様との修行の後の翌朝、アメリカお嬢様の荷物をお持ちしていつも通り学園へ向かつた。

今日から授業が本格的に始まる様だ。半年間の努力のおかげで魔法と剣術の基礎知識ぐらいは覚えている。まあ、授業面においては心配は余りなかつた。

ただ心配だったのは・・・

「そりいえばあんた魔武器持つてなかつたわよね？実技は大丈夫なの？」

そう。俺には自分の専用武器ともいえる魔武器がないのだ。普通は学園の中等部の頃に授業で手に入れるらしい。

「若干心配ではござります。お嬢様。しかし、リーゼ先生も私が魔武器を持つていな事を知つておられます。放課後にでもリーゼ先生に魔武器契約がしたいと言つて契約しますよ。心配ありがとござります」

「誰が荷物持ちの心配なんかしてるのよ。誰が。私はただセンター
ハートの関係者である
あなたの失態で家の家名に傷を付けられたくないだけよ。わかつた
？」

「お。冷たい・・・お嬢様と話せただけでも僕偉か。

「わかりました。お嬢様」

「わからばいいの」

と、いった会話をしながら学園向かう俺。しかし、今日はいい日だ。
ん？何故かつて？

お嬢様が俺と会話をしてくれてるからだよ！

お嬢様は普段は「ミリ」を見るような目つきで俺を見ている。

今日は扱いがましな方だ。機嫌がいいのかな？まあ、俺にはあまり
関係ないが。

そして授業1時間目。魔法理論の座学の時間。いきなり、俺はリー
ゼ先生に授業中質問された。

「ロイ君。魔法を使ふるときには杖と剣どちらかな？」

「このへりは解る。

「杖です。理由は剣でも魔法を使ふること

はできますが、杖と比べて、魔法の精度は落ちるからです」

ラザイン様との予習？いや復習？で学んだ知識だ。間違つてはいな
いはず。

「その通りです。だから、魔法主体で戦う事になるときは剣ではなく
く杖で戦うと良いでしょう。使い魔契約が終わったらすぐ模擬戦も
あるから、この事は覚えておいてくれ」

と、リーゼ先生。

「どうか、模擬戦あんの？成績に入るよなあきっと。魔武器をまだ
触つてすらない俺には不利な気がする。今日放課後、絶対に魔武
器と契約して修行しなくちゃいけないな。」

「では、次にアメリカ君。魔法を使用するときの対価と言われてい
るものは？」一つ挙げてくれ

おっとまだ授業中か。

「はい。魔法を使ふときに使う対価とは気力と言われているも
のと魔力です。魔法のランクが高いほどその対価は大きくなります。
気力とは精神力と言い換えるもいいと思います。」

と、完璧な答えを返すお嬢様。流石。従者としての心得ばかりを教
えられた俺とは違うな。少し嫉妬しちまつた。

「完璧、か流石はセンターハート家といったところだな」

と、リーゼ先生。

「さて、今日の新しい知識として魔法の詠唱について先生から説明したいと思つ」

「では、絵本の勇者の伝説とこうお話をどうぞ読んだ事はあるか？きっとあるだろ？。一人の勇者が国を救つ話だ」

俺は読んだ事ないな・・・まあ、小さい頃は慣れない従者としての知識を覚えるのに必死だったからな。

「この物語で登場する勇者は魔法を唱える時に詠唱と呼ばれるものをしている。しかし、我々の世界の魔法は詠唱を必要としていない。魔法と慣れ親しんだあなた達は当然知つていい筈だ」

俺も知つてゐるな。この世界の魔法は魔法名を唱えるだけで行使できる。

ただ・・・

「しかし、その代わり絵本とは違ひ魔力だけでは魔法を使使することは出来ない。前述の通り魔力と言われているものも消費しないといけない」

詠唱はないが、魔力は消費するってことだな。まあ、新しく習つた事といつても皆もこのくらいの知識は有るだろ？。

「リーゼからが注意して聞いて欲しい」とヒロです。」

リーゼ先生が声を潜めた。

「詠唱がないからといって魔法を使い過ぎると、気力が無くなり氣絶します。最悪、死に至ります。魔法名をいつだけで簡単に魔法を使えるので、注意してください。これが原因で学園で死者が出たこともあります。まあ、魔法名を覚えても顕現させるまでは修行が必要ですが。」

魔法の使い過ぎ＝死〇」「氣絶ってことか。

俺も注意が必要だな。

「これで授業を終わります。学級代表！」

「起立。気をつけ。礼。」

あ、お嬢様は学級代表だったな。
まあ、とりあえず関係ないか。

みんなも礼をして次の授業に備えている。

まあ、今日は座学だけみたいだから、とりあえず乗り切れるだろう。

ああ。そつそと放課後になつて魔武器と契約したいなあ。

第五話　この世界の魔法（後書き）

世界観説明を飛ばした人も理解できる様に頑張りました。気といわ
れるものはこの世界の戦闘では重要になってしまいます。

第六話 その名は氣仙花（前書き）

第六話、どうぞ。

第六話 その名は氣仙花

放課後一

「やつと授業がおわった・・・」

俺は一人そう呟いていた。

お嬢様には先に帰つて貰つた。といつより、気づいたらお嬢様はもう帰つていた。まあ、今日の朝、放課後に魔武器との契約を先生に手伝つてもらつと言つておいた筈だから、それで帰つたのだと思う。まあお嬢様からは俺は単なる荷物持ちの従者程度にしか認識されていないからな。

魔武器との契約が終わるまで待つてくれたりはしないか。なんか虚しい。

話が脱線していた。今はリーゼ先生に魔武器契約の仲立ちを頼んだ

閑話休題。

「うん？」リーゼ先生の反応は、

「うん？魔武器契約をしていないのかい？確か魔武器つて中等部の時に・・・ああ！君がセンター・ハートの護衛権の従者、噂のロイ君か！」

反応がつづっこ。リーゼ先生はもつと凜とした先生だと想っていたのに。

「わかった。君の事情は知っている。協力しよう。」

「ありがとうございます。」

いきなり先生の雰囲気が凜としたものに変わった。男の若いながらも威厳のある表情だ。

公私の使い方もわきまえている様だ。やはり素晴らしい先生だと思う。

特別準備室

「リーゼが特別準備室だよ。ロイ君。君にはここで魔武器と契約してもらつ。覚悟はいいかい？まあ、覚悟なんてものは実はそんなに必要ない。それに特別な儀式や魔法を使う訳ではないしね。」

「そりなんですか？」

「そりだよ。ロイ君。魔武器との契約はそんなものなんだ。だから
といって氣を抜いてはいけないよ。一生支え合つものだからね。魔
武器と人間は、使い魔並に重要なんだよ？わかつたかい？」

わかりやすい説明だつた。魔武器は重要。氣は抜くなつてことか。

「わかりました。では、先生、魔武器との契約方法を教えてくださいせんか？」

「わかつた。今、教える。実は魔武器との契約には特別な儀式、魔
法、道具は一切必要ないんだ。これはさつきも書つた筈。重要なのは
は意思の力。思いの力。精神力。いわば、氣力。つまり、魔武器契
約で使うのは氣力なんだ。」

氣力があ。あんまり意識したことはないな。

「まだ説明を続けると、魔武器と契約するには念じるんだ。」

魔武器に関して、素人な俺はよくわからなかつた。

「念じる？念じるとはどういふことですか？」

「わかりづらかつたかな？念じるとは、ただ自分の心に働きかけるんだよ。魔武器よ・・・来い！ってね。簡単だろ？」

「確かにそれだけなら、簡単です。早速自分の心に働きかけてみます。」

「私はあくまで、仲立ちしかできない。まあ、危険もないし、全力を出してこい。」

「はーーでは・・・こきますー。」

その瞬間凄まじい量の光の奔流が特別準備室を覆っていた。

「くつー・マジック・ガードー！」

リーゼは咄嗟に魔法を行使して自分の身を守っていた。

(なんだ・・・)の気力量は・・・氣力が具現化する程の気力量なんて・・・)

リーゼはそんなことを思い、光の奔流を見ていた。

光の奔流の中で一

「なんだ?」の白い部屋は?

いや、部屋とこよりは・・・

「暖かい光の中みたいだな。」

ん?俺の見つめる先に一つの剣が光に突き刺さっていた。

「なんか神秘的ですらあるな。リーゼ先生もいないし。」ただけ世

の中と離されたみたいだ。」「

まあ実際はそんなことなく、ただの比喩だけど。そう思いながら多分俺の魔武器であるその剣を握つてみた。

握つた瞬間ー

「うつー！何だこれー！頭がー！頭が焼ける様に熱いー！」

俺の脳にこの魔武器の情報が流れてきていた。

「はあ、はあ、終わつたか・・・」

間違いないこの剣は俺の魔武器だろう。全身全靈をかけてだしたこの剣が俺の生涯のパートナーとなるだろう。

この青白い光芒を放つ美しい刀身をもつ剣の名は氣仙花けせんか

能力は気力を纏うことができ気力を纏つたら斬撃の威力が増加するようだ。さらに魔力とも相性が良く魔力も纏える様だ。

試しに光の奔流の中で魔力を込めてみる。さつき魔力をかなり使つたから今度使うのは魔力だ。そうすると氣仙花けせんかの刀身が青く輝き出した。

「良く切れそうな剣だなあ・・・なんか感動」

自分が落ちこぼれじゃ無くなつたみたいだ。まあ世間からみたら、今まで学園に通つていない俺なんて落ちこぼれなんだから。

そして、俺はこの魔武器、氣仙花のとつておきの必殺技の能力を試そうと思ひ。

その能力の名は「不可視の斬撃」。

簡単に説明すると、遠隔攻撃能力ということになる。詳しく説明すると、氣力や魔力が纏つている斬撃を飛ばすことができる能力だ。しかも能力の名の通りその斬撃は見えることはない。つまり、見えない遠隔攻撃能力がこの氣仙花にはあるということだ。

てか、強くね？見えない衝撃波飛ばせるんだぜ？皆もこれと同じような魔武器もつてんのかな？

「学園が怖いと心の底から思つたよ・・・」

まあ、最強を目指している俺だ。怖いと思つが氣後れなんにしてられない。

とりあえず、この氣仙花の能力「不可視の斬撃」を試すことにした。

「オラア！」

と俺にあんまり似合わない気合いの声を出して回復してきた氣力を氣仙花に込めてその斬撃を横に薙いだ！

特別準備室――

(ロイ君遅いな・・・あの光の中で何が起こっているんだろうか?)

一人リーゼは思っていた。

ん?なんか光の奔流がモーゼの様に真ん中から裂けてくな。

その瞬間ブオオオンという音とともに特別準備室の壁が壊れた。

あれ?特別準備室の壁の一部が壊れたの・・・か?

光の先には剣を握っているロイが立っていた。マジック・ガードを解きロイに近づくコーヴ。

「その様子だと魔武器とは契約できたみたいだな。」

と、轟音に驚きながらも言つコーヴ。

「契約したのかはわかりませんが・・・魔武器を手にすることはできたと思います。」

「なら良かつた。」

しかし、ロイは思つ。光の奔流ごと特別準備室の壁を壊した「不可視の斬撃」。とても恐ろしい能力だなど。

(いつも平静なリーゼ先生も少なからず驚いているみたいだな。ていうか、壁の修理代とかヤバイ。俺じゃ払えない。もしかしたらまたセンターハート家に迷惑が・・・そしてお嬢様から突き放した様な目で見られるのか・・・最悪な負のループだな)

ロイは結構眞面目な事を考えていた。

一方、リーゼはこんなことを思つていた。

(やつぱりただの魔武器じゃないみたいだな。頑丈な特別準備室の壁を破壊する威力の攻撃を産む美しい刀身の剣か・・・ロイには落ちこぼれという認識しかなかつたが、ロイは一体何者だ?あの気力量は学生が出せるものじゃないぞ。調査が必要・・・か?)

「そういえば、先生。魔武器をしまつにせざれば這一のですか?」

「あ・・・ああ・・・魔武器をしまつには魔武器よ消えろーと念じるだけでいいぞ。」

「わかりました。」

魔武器よ消えろと念じて俺は氣仙花を消した。

「あと一つ聞きたいのですが、壁の修理代は・・・?」

不安そうな口イ。

「学園長に報告するが、センター・ハート家に迷惑がかかる事は無いと思つた。もちろんお前が修理代を払つ事も無い。この学園は授業中に起きた事故で学園の物品が壊された場合生徒に弁償はさせず、学園が負担することになつてゐるからな。」

「でも、先生今は授業中じゃな・・・」

「授業中ってことにしてくよ。」

と、俺の言葉を遮り一いつと笑いながら言つひこーゼ先生。本当に素晴らしい先生だ。

「ありがとうございます。俺はこれで帰らせていただきます。」

「わかった。明日は使い魔召喚つてことを忘れずにな。」

「はい。わかりました。」

リーゼ先生に背を向け屋敷に帰る俺。少し自分の力というより魔武器のおかげだが力が上がった気がして喜んだ口音だった。

第六話 その名は氣仙花（後書き）

魔武器契約の話でした。どうでした？リーゼ先生は様子見て感じ
です。

第七話 興味（前書き）

主人公は既に気力だけだったら、化け物レベルです。

第七話 興味

俺は学園から帰つてきていつもの様に従者としての業務を果たした後、夜の修行をしていた。ラザイン様がセントラルの街に出掛けていて、いないので必然的に俺一人で屋敷の中庭で修行をしている。

今日は魔武器に慣れるための修行しかしていない。そのおかげで気仙花を自分の手足のよつに振るえるよつになった。

魔力の青き光芒と氣力の白き光芒が中庭を走る。その風景は幻想的ですらあつただろ。

その修行を見ていたアメリアが思わず、従者の少年に声をかけてしまった。

多分、ラザインが街に出掛けていることもあったからだろ。アメリアはともかくロイに声をかけた。

「ずいぶん長続きしますわね。その修行

「…? お嬢様?」

「なんですねの荷物持ち? その驚き様は」

「いえ、少し驚いてしまつて。お嬢様が俺に声をかけてくれるなんて。何か従者としての不手際でもありましたか？」

「そんなものはないですわ。ですが、少しその武器に興味があつて。それはあんたの魔武器？」

「はい。そうです。俺の魔武器です。銘は氣仙花といいます」

「氣・・仙花・・・」

「良かつたら、触つてみます？」

その瞬間嬉しそうな顔をしたアメリアがいた。

「良いんですのー?」

「はい。お嬢様の頼みですから」

「別に頼んでなんていません。なんか荷物持ちの癖に生意氣ね」

「すみません。お気に障ったのなら謝罪します。それよりお嬢様。氣仙花をお渡します」

といつて氣仙花を渡す俺。

「美しい刀身の剣ですね。ですがさつきまで光つていませんでした？」

「それは、俺が魔力と氣力を込めて剣を振るつていたからです」

「お、落ちこぼれのあんたが・・・魔力と氣力付加の魔武器を！？」

「嘘ですわ・・・私でも魔力付加の剣しか出せないのに・・・」

「嘘はついていません。お嬢様」

お嬢様に嘘つきと思われたくないな。こんなところで、不信感を持たれたくない。実際に剣を振つて見せるか？

「ならもう一回その氣仙花とやらの剣舞を見せなさい」

いや、剣を振るのはいい。今、俺もそう切り出そうとしたからな。だが、お嬢様の言葉の剣舞をもう一回見せなさいって俺は一度でもお嬢様に剣舞を見せたことがあつたか？

「もう一回とはどうこう」とですか？お嬢様に剣を振る姿を見せるのは初めての筈ですが？」

少し失礼かもしないが聞いてしまった。

その瞬間アメリアの顔が林檎の様に赤く染まり

「別にあんたの修行姿が気になつて話しかけたわけじゃないんですからね！？」

と言われた。

「わ・・・わかりました」

妙な迫力に押されタジタジになるロイーと俺。

「じゃ早速剣舞を見せてもいいまじょつか

と、アメリア。

「わかりました」

まあ、断わる理由もないし、見せますか。大事なお嬢様の頼みだし。

「では振りますよ。お嬢様……いくぞ！ 気仙花！」

その呼びかけに応えるように氣仙花は青白い光芒を浮かべながら美しいその刀身を揺らした。

「綺麗。 . . .」

アメリカはロイが剣舞をやめるまでその幻想的な光景を見続けていた。

「ふう。これで信じていただけましたか？ お嬢様？」

「フン。落ちこぼれの荷物持ちのロイにしてはまあまあの魔武器ね。まあ頑張れば？」

そう言ってアメリカは中庭を立ち去った。

ロイは初めてアメリカに名前で呼ばれたことに歓喜に打ち震えていた。

俺は守りたい人と少し心の距離が近づいた気がして、中庭を立ち去つた。

一方、センター・ハート家アメリカの自室――

アメリカは自室のベットで横になっていた。

そして一人の荷物持ちの少年を思い浮かべていた。

(あの荷物持ち・・・私クラスの魔武器を使っていた?私は学年トップクラスの実力はあると自負している。でも何だかあの荷物持ちの魔武器と私の魔武器じゃ荷物持ちの魔武器の方が美しく強いと感じてしまった。)

「はあ。なんで私あんな奴と会話したんだろう?」

ここ数年間荷物持ちとは従者としての会話しかしてこなかった。いやあの荷物持ちが拾われてからまともに喋ったことはない。

(あの美しい刀身に惹かれたのかしら?あの荷物持ちは落ちこぼれだけど剣舞は美しかった。まるで幻想空間にいるみたいな美しさ。まあ魔武器が凄いだけね。きっと。)

アメリア自身は自覚していないが、アメリアはロイに少なからず興味を持ち始めていた。

第七話 興味（後書き）

氣仙花はかなり強い魔武器にしておきました。

第八話 使い魔か・・・（前書き）

使い魔との契約の説明回です。お気に召さなかつたら「めんない」。

第八話 使い魔か・・・

はあ朝か・・・

俺は昨日、お嬢様と初めてまともに喋れた気がして少しテンションが上がっている。

早起きしてしまった。

まあテンションが上がっているといつても、落ちこぼれ扱いを受けている学園に進んで行きたいとは思わないが。

学園の制服も着たし、こいつらの準備は終わった。後はお嬢様を待つばかり。

少し、待っているとお嬢様の部屋のドアが開くのが見えた。どうやら、お嬢様の準備も済んだ様だ。そう思っていたら早速お嬢様から声が掛かった。

「学園に行くわよ。荷物持ち。はい、鞄

「はい。受け取りました。行きましょうか

「ええ、そうね」

今日は俺に対するお嬢様の物腰が柔らかい気がしないでもない。従者時代の俺はお嬢様と会話する機会もなかつたから、お嬢様の事はあまり理解していないかもしない。しかしそれを考慮してもいつもよりかなり良い感じだ。

昨日の魔武器が原因か？あんなのだつたら、いくらでも見せてやりたいね。まあお嬢様には魔武器受けが良いらしい。嬉しい情報だ。折角、護衛権の従者になつたのだから公私共にお支えしたいからな。

「なに突つ立つてんのー早く学園に行くわよーあんたが来なきゃ私の荷物もないじゃない」

「すみません。少し荷物」として……

「そんなこといいから、早く学園に行くわよ。なんたつて今日は使いたい魔との契約の日だからね」

「はい。行きましょー」

今日は使い魔召喚の日か。一口掛けてグラウンドで行われるんだよな。魔武器と同様に一生を過ごす相棒だ。今日は使い魔召喚を全力で頑張るか。

俺たちは学園に着いた。すると教室の黒板に太字でグラウンドに来るよつこと書いてあつた。

まあ向かうとするか。

グラウンド

ここがセントラル魔法学園のグラウンドか。あまり見た事はなかつたが、広いな。まあこの広さなら一年全員の使い魔召喚なんて余裕で出来るな。

「——Aはここだー早く来い！」

と、リーゼ先生。

俺は急ぎ足で向かつ。何故か俺とほぼ同時に学園に来た筈のお嬢様が既にグラウンドにいることに疑問を覚えたが、まあ些細なことだ。

「では、出席番号一一番から使い魔との契約を始まる。使い魔との契約の魔法は先生達が行使するから安心してくれ」

どうやら、使い魔との契約が本格的に始まるな。使い魔は己の潜在能力に見合ったものが出でくるらしい。

もつといえど使い魔は自分の「将来」の可能性についても過言ではないのだ。

嫌でも気合いが入る。といつても、俺が使い魔との契約の魔法を使するわけではないので、なんか気合いが入りづらいが。

まあ全力で使い魔との契約に挑もう。それが、今、俺に出来る唯一のことだ。

第八話 使い魔か・・・（後書き）

ロイ（主人公であり従者）の使い魔はもう決まっています。潜在能
力の具現化とか書いてしまったのでかなり強くなるかもです・・・

第九話 禍々しい扉（前書き）

ロイの使い魔がまだでこない……だと……

第九話 禍々しい扉

まずは出席番号1一番つまりはアメリアお嬢様からの使い魔契約だ。何が出てくるか楽しみだ。

「アメリア君。使い魔契約を始めるがいいかい？」

リーゼ先生が問う。

「はい。始めてください」

お嬢様も心構えは出来ているようだ。

「ではいくぞ。サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を使ふと魔方陣が現れた。

「アメリア君。現れた魔方陣に手をかざしなさい」

「わかつています。魔方陣に手をかざせば自分に見合つた使い魔が顕現するんでしたよね？」

「流石だなアメリカ君。その通りだ。私が説明を言つ手間が省けた
な」

流石お嬢様。使い魔契約は高等部の知識なのに、予習されていらっしゃるようだ。

「では」さあすわ」

そういうて魔方陣に手をかざすお嬢様。魔方陣からでてきたのは・・

「グオオ」

炎龍だった。炎のドラゴン。かなり大きい。凄い強そうだ。

「「「「うおおー!凄いアメリカさん!」こんな大きい使い魔と契約で
きるなんて!」」

みんながお嬢様を褒め称える。

まあ、使い魔のランクは詳しく決まってはいないんだが、炎龍はと

ても凄い使い魔の部類に入るんだね。流石はお嬢様。

俺はお嬢様を盲信している。何か悪いか？

閑話休題させてもらおう。

午後になった。みんなが次々と使い魔との契約を終わらしている。ていうか、お嬢様の炎龍の時も思つたんだが、契約の時に我に力を示せ的なイベントはないんだな。つまり、使い魔に力を認めさせるイベント。そんなものが無いから意外と使い魔契約はスムーズに進む。

まあ午前中にケイルが風龍を出してどや顔でこっちを見下していたのはかなり印象的だつたな。まだ俺の使い魔も見ていないのに。

まあ、ケイルの使い魔がドラゴン関係なのも意外だったが。ということは、ケイルもかなり強い部類に入るのか。

意外や意外。俺は今まで、ケイルをただの糞貴族だと思つていた。実力はあつたみたいだ。

一時期はウザすぎて敬語をやめようかと思つていたくらいだつた。何故敬語を使うのかつて？おいおい、忘れたのか？俺はあくまでお

嬢様の従者なだけだから、貴族様達には敬語を使う必要があるんだ
ぜ？

俺は誰に説明しているんだろうか？最近自分がよくわからない。

そんなことを思つていたら、何時の間にか俺の使い魔契約の順番がきたらしい。俺は名前がロイだからかなり順番が遅い筈なんだけどな。

時が経つのは早い。

「おーい。出席番号34番。早く来い」

俺はリーゼ先生の元に向かつ。

「ではサモン・リンクを行つぞ？ロイ君？」

「はい。お願ひします」

「準備は出来ているようだな。では、サモン・リンクー！」

リーゼ先生が魔法を行使して魔方陣を顕現させる。俺は迷うこと無く、その魔方陣に手をかざす。

ロイが手をかざした瞬間一つの禍々しい扉が魔方陣からロイの前に姿を現した。

第九話 禍々しい扉（後書き）

使い魔契約を引っ張りました。すみません。ストックの通りに出して行くと、無理やりなタイミングで終わるんですね。本当に申し訳ないです。

第十話 悪魔でもあり聖女の様である（前書き）

使い魔登場です。しかし、私も心理描写がまだまだです。

第十話 悪魔でもあり聖女の様でもある

「何だこれは？」

俺は思わずそう呟いた。使い魔は確かに生き物の形を形じっている筈だ。先生の魔法が失敗したわけでもないだろ？一体目の前の現象は何なのだろう？

ただ、禍々しい扉が目の前に立っている。やっぱりよく分からぬ。でもなんだかあの扉の先から俺を呼んでいる声が聞こえる気がする。幻聴だろ？錯覚だろ？俺の心に直接語りかけてくるような感じ。まあよくわからぬが。

よく分からぬが、俺は決心した。俺は先生に声をかける。

「リーゼ先生。俺はあの扉の先へ行きます」

「ああ・・・わかった・・・」

どうやらリーゼ先生や他の生徒たちは呆然としてまともにリアクションが出来ないらしい
。お嬢様ですら田を丸くしている。まあ、使い魔契約で変な扉が出

てくるなんて今までの生徒たちには居なかつたしきつと珍しい事何だろう。いやリーゼ先生も驚いていたからもしかしたら俺が初めて扉を出したのかな？

前代未聞つてやつか？

落ちこぼれの特権みたいな感じだな。嫌な特権だが。

そして、俺は禍々しい扉を開けた。

扉の先ー

俺は扉の中に入った。一面真っ黒な空間。こんなところに俺の使い魔がいるのだろうか？

「こらが。儂はここにしゃ」

声の方を見ると、其処には金髪の美しい聖女とでも表現出来そうな女が立っていた。

「お前が俺の使い魔になつてくれるのか？」

「つむ。なつてやるぞ。だがその前に、お主と話す必要があったからお主を儂の精神世界に逆召喚させてもらつたのじゃ」

「話す必要があつた？なら直接こいつにきて話せばよかつたんじやないのか？」

「残念ながらお主の今の魔力では儂を顕現させることはもつて數十秒じや。なんせ儂は使い魔の中でも「例外」の存在じやからの」

「そうなのか？だから逆召喚？をしたのか。まあ、それには納得した。そういえば、お前の名前も聞いていなかつたな。ていうか、人型の使い魔なんて聞いたことないな」

「つむ。それでは、話したい事の前に儂の自己紹介からいこうかの？儂の名はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイじゃ。人型なのは儂が使い魔の中でも「例外」だからじやの」

「例外？人型ってことがか？まあ名前にも突っ込みたいがな」

「名前はしようがなかろつ。生まれ持つたものじやからの。まあお主の例外についての質問の答えは人型というのもそうじやし、魔力量というのもそうじやうつ」

「どうじうじとだ？」

「つまり、僕は他の使い魔と一線を画す使い魔といつことじや。まあかなり強い魔力と氣力と力がある使い魔と思つてもうりつて構わんぞ。えつへん」

えつへんって可愛いな。オイ。金髪の美しい美女に言われているから変な感じだ。まあ強い使い魔なのか？

「可愛いくて強いだなんて、褒めてくれるのか主様よ？嬉しい奴じん？口にしたつもりはなかつたんだが・・・

喋っていたのか？僕。

「お主も人を褒めるなら口で言えば、いいものを・・・。安心せい。お主は喋つてはおらんぞ。ただ僕と主様の精神が繋がつて主様の心が僕にだだ漏れなだけじゃ」

「マジでっ。」

「マジめで。大マジじやの」

「マジかよ・・・心読まれるとか拷問じゃね？」

しかも意思があり喋れる使い魔に。さっきまでの強い使い魔としてのオプションがどうで

もよく感じるほど的事に俺は愕然としていた。

「なんじゅ。どうでもいいとは。儂はかなり強いんじゅぞ。まあその儂を呼び出す事に成功したお前様もなかなかものだと思つづ」

「そりなのかな?よくわからないが、そうだといいな。俺は強くなりたいからな。サタンが強い使い魔なら嬉しいし、頼りになるよ」

「主様は嬉しいことをピンポイントに突いて
来るの。初めて名前呼びしてくれて嬉しいしの。儂は主がとても
気に入つたぞ」

女性?からの初めての好意だな。落ちこぼれだから学園では誰も話
しかけてくれなかつたし。

「ん?待て。主様は歴戦の英雄かなんかじゃないのかの?学園の落
ちこぼれ?主様が落ちこぼれだったら多分他の生徒達は「ゴミじゅの。
ゴミ」。儂が召喚されたのも久し振りだしそこまで力をもつ人間もお
らんはずじゅしの。」

「ん?その歴戦の英雄ってのはどういづ根拠からきたんだ?」

「つむ。」そこから先は儂の話したいことと内容が被るじゃん。先に話したいことの本題から話してもよいのかの？」

「全然構わないぞ」

「もう。主様つたら本当に優しいのう」

「なんだか俺、この使い魔にえらく気に入られてないか？」

「さつきも言つたじやろ。主様を気に入つたと。久し振りにしゃべれた相手じやしの。儂が召喚されるなんて中々ないしの。久し振りに孤独とおさらばできるのだから、呼び出してくれた人を気に入るに決まつておる」

「ついでにサタンは何年間孤独だつたんだ？」

「ずっと千年位だと思つぞ? 主様よ」

お前は千年もの間使い魔として誰の事を待つていたのか・・・

「お前は寂しくなかつたのか? この暗闇の中にただ千年もいて

「寂しいにきまつて……寂しいに決まつておひづ。誰もいない空間に一人でいるのはとても辛かつた。主様がこなかつたら、狂っていたかもしけんの。もし主様が来んかつたら儂は……儂は……」

数千年の孤独を思い出していたのかサタンは泣いていた。俺は思わずサタンを抱きしめていた。

「サタン。大丈夫だ。俺はここにいる。これからは俺がお前の主だから。もう泣く必要は無いんだよサタン。俺はお前を孤独からも守れるようになるから。だから……だから……大丈夫だか

ら

「儂はもう孤独……じゃない？」

「ああ。孤独じゃない。これからは俺と共にいてくれ。お前が俺の使い魔だ」

「うん……うん。ありがとの。主様よ。思わず感極まつて泣いてしまつた……の。主様が良かつたらもう少しこのまま抱きしめていてはくれんかの？主様の温もりは何だか安心するからの」

「サタンが嫌じや無ければいくらでも抱きしめていてくれてもかま

わない」

そうして落ちいじょれの生徒と孤独だった使い魔は互いの傷を舐め合う様にしてじょく抱き合っていた。

「うむ。あ、ありがとうございます。主様よ。慰めてくれて。とっても嬉しい
かっただぞ」

「ああ。あなた円並みな言葉でもサタンの心に届いたなら嬉しいよ

「ぬ、主はあれじやな。本当に儂がヒットポイントでパンポンポイントで欲
しい言葉をかけてくれるの？」

「や、そつか。まあ仲良くなれそう出来たよ。サタンとはこれから心まで見透かされてしまつ仲だしな。これからもよろしくな。
サタン」

「うむ。いらっしゃいませ。私の主様よ

俺たちはお互に少し照れながらも絆を深めた。

「で、主様には話したいことがあるのじや。儂が主様のことじでじ
も気になつたことをな

「ああ、やっぱ俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「ああ、やっぱ俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「ああ、やっぱ俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「ああ、やっぱ俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「わかった。質問してくれ

俺はサタンの質問に身構えた。

第十話 悪魔でもあり聖女の様である（後書き）

使い魔は戦闘でも重要になってしまいます。使い魔が気に入らなかつたら申し訳ないです。この使い魔ですが、かなり重要なポジションです。

第十一話 僕の資質（前書き）

メインキャラクターですか？サタンは。いいですよね？

第十一話 僕の資質

「では主様よ・・・主様は15才くらいの少年に見えるのじゃが・・・
・実は何百年かの歳を経ているのかの?」

これがサタンからの質問だつた。

「俺は見た目通り15才の少年、ロイだ。だいたい人間はサタンみたいにそんなに永くは生きられないだろう」

「いや、人間でも寿命を延ばす例外はあるの
じやが・・・」

「まあ、そんな寿命関係の事はいまは別にいい。何故俺が何百年の歳を経てていると思った
のかを聞きたい」

「それは主様の気力が人間ではあり得ない量をもつてゐるからぢや
よ。気に乱れもなかつ
たし・・・学生つて事も真実なのじやうづ。
しかし、本当に驚いたわい。学生で儂以上の気力をもつてゐる人間
がいるなんて。やはり

「主様も儂と同じいや、それ以上に例外的な存在なのかもしけないの」

「今更ながら思つたんだがサタンって何者だ？最初はちよつと大きい妖精かなんかかと思つていたんだが・・・気力を計れるましてや喋る使い魔なんて聞いたこともない。本当に何者なんだ？」

「僕はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイ。悪魔と聖なるものの名を持つ例外な使い魔じや。そのくらいしか自分を語る言葉がないのう」

「そうか・・・よくわからないが心強そうな使い魔で良かったよ。サタンが何者でも関係ない。俺の使い魔つてことで十分だしな」

「ありがとう、主様よ」

そういってサタンは俺に微笑んだ。

「で、質問は終わつたんだよな？サタン？確か質問の他に伝えたいことがあつたんだつたよな？」

「うむ。主様よ。伝えたいことは僕の現実世界での顕現についてじや」

「つまり、お前の召喚についてだな。何か条件でもあるのか?」

「条件とは少し違つのじやが・・・実は僕は使い魔の中でも召喚するのに、莫大な魔力が必要なんじや。つまり、僕が主様に言いたいことは、僕が現実世界にいる時はこの姿ではなく、力を抑えた姿ではないと、今の主様の魔力量じゃ難しいんじやよ」

「つまり、力を抑えた姿じゃないと俺はサタンを召喚出来ない訳か。具体的にはどんな姿になるんだ?」

「ういえば使い魔召喚中は魔力と気力を消費し続けるんだよな。まあ、お嬢様の炎龍みたいな使い魔が常に側にいたら俺だって嫌だしな。あれ大きいし。

「黒猫じや」

「え? 猫ですか? サタン様? 大きいのは嫌とは思つたが、小さすぎなのではないですか?」

「すまんのう。魔法を極めた僕でも変化出来るのは、黒猫だけなのじやよ。まあ主様に魔

力を渡したり、魔法を教えたり、念話でいつでも会話出来るから使い魔としては十分じゃ

ろ？何か猫としての姿に不満があるのかの？
そうか！分かったぞ！儂のこの美しい女性としての本体の姿が名残惜しいんじゃなー！

ちげえよ。サタン。違うんだよ。

「違うのかのう・・・」

口には出していいが心が繋がっているから
俺のソウルボイスがサタンに聞こえてしまっていた。

「じや、何が不満なのじや？」

いや、人型の使い魔なら前代未聞だろ？し、なんか扉がでたことも
なんとか收拾出来るかなって思っていたんだよ。しかし、蓋を開けてみて実際に出てきた俺の使い魔が猫だつたら・・・

「うむ・・・主様は学園では落ちこぼれ扱いだったかの？だとすればじや・・・」

落ちこぼれの名前に拍車がかかるつてことせー。

「う・・・うむ。」めんなさいのじゃ

「まあ、仕方ない事か・・・」

小さくともサタンには妖精にでも変化して欲しかった。俺の魔力が少ないせいとはいえ・・・後の事を考えると辛い。泣きそうだ。お嬢様から呆れられるかも。

タランティルスっていう世界は完全に実力主義だからなあ。猫つて使い魔としての成績はどうなるのかな?気になるところだ。逆に前代未聞だろうしな。

笑い噺にもならない・・・

「まあ元気を出すのじゃ主様!本当の儂は最強の使い魔じゃぞ!」

「わかったよ。サタン。気遣いありがとな

サタンが使い魔で良かつた。心を見られるなんて最初はどんな拷問かとも思っていたが・

・・案外気楽にやれるかもしない。敬語を使う必要もない初めての相手だしな。本当にお前と巡り会えて良かったよ。サタン。

「儂もじやぞ。主様」

「んじゃお別れムードにもなつてきましたし現実世界にもどるか

「わうじやの。儂も猫になるとあるか。後
、言つておぐが猫となつた儂は念話でしか喋れんぞ」

「わかつた」

「しづまへひへ。」の姿ではお別れじやな。主様
。また余おつり

「ああ。またな」

俺たちは離れ離れになるわけでもないのに、お別れをいっていた。
次にあの金髪の美しい女に会えるのはいつになることやら・・・

そうしてサタンが光に包まれ、その後には一
匹の美しい毛並みの黒猫がいた。

(「の姿では初めてじゃの主様。改めてよう
しへの）

これが念話か・・・どう返事すればいいんだ?

(心のなかで儂に話したいことを思つて浮かべ
れば良いんじやよ。今みたいにの)

なるほどな。わかつた。

じゃあいいもつ用はないな。

(うむ。 もうじやの）

そうして俺たちはサタンがだした禍々しい扉から現実世界に戻ることになった。

第十一話 僕の資質（後書き）

サタンは強すぎるので条件を作りました。ダメですか？

第十一話 心構え（前書き）

模擬戦、ケイルフラグ回。

第十一話 心構え

学園一

俺はサタンに逆召喚なるものをされた世界から元の学園へとさびつっていた。

美しい黒猫となつたサタンを連れて。

扉の外を見るとクラスメイト達の使い魔召喚はもう全員終わつているよつだつた。

俺の名前はロイだから、出席番号は後の方だし、サタンの精神世界？に數十分くらい居た

から当然みんなの使い魔契約は終わつてるか。

だからこそ、扉から出てきた俺たちは注目されていた。

まあ、実質最後になつちゃつたしな。使い魔契約。

クラスメイトのみんなが、じぢりを信じられないものを見るような
目つきで見ているのが
とても印象的だ。

きつと俺の使い魔が猫だからだよなあ・・・

そう思つてゐなか一人の貴族の少年が俺たちに向かつて口火をきつた。ケイルだ。

「あの落ちこぼれの使い魔見てみろよ。みんな。猫だぜ? しかもその辺に居る様な猫だ。使い魔にしては、心もとないとは思わないか?」

その声でクラスメイトのみんなにビックリ笑いが起る。

「やつぱりロイの奴つて落ちこぼれだな

「使い魔と契約出来ないからつて野良猫でも拾つてきたんじゃねえの?」

ケイルを始まりとして、そんな声がチラホラと聞こえてくる。とても屈辱的だ。お嬢様と数人のクラスメイトが笑つていなければましか。

(ムカつぐのう。) いつ等。焼き殺してしまおつかの(お)

サタンも切れかけていた。

そんな中リーゼ先生の声が掛かる。

「ほら、お前たち！ 静かにしろ！ 今から伝達事項がある！ 予定表を見ていいやつは知っているかもしねーが、明日は模擬戦だ。ルールは今のお前たちの全力で闘うことだ。ダメージが規定量を越えると、即闘技場から離脱させる魔法をかけてやるから全力で闘つてくれ。もちろん、模擬戦は実技点に入るぞ。もし、負けても成績は入るからそこは安心してくれ。あと、正面玄関に対戦表を貼つておいた。見ておいてくれ。では、今日は解散とする！ 各々体を休めておく様に！ まあ、使い魔との戦闘訓練ぐらいはしておいた方がいいかもな」

リーゼ先生がそういうと、みんなは俺の事など忘れた様に神妙な顔になつた。そして、みんな使い魔を消し、教室に戻り帰り支度を始めた。

無論、俺もだ。サタンを中心にしてこみ我先へと正面玄関に向かう。早く明日の対戦相手が誰か知りたいしな。お嬢様も向かつた様だしな。

(主様はお嬢様とやらを随分と気にするのう)

そつサタンから心の中でツッコミが入る。

まあ、シカトだ。今は対戦相手が誰か知りたい。そつして正面玄関に着き俺は対戦表を見る。俺の対戦相手はー

何かと俺を馬鹿にするケイルだった。

俺はその時心から喜んだ。

(何故喜ぶのじゃ？あやつは学園でも中々の実力なんじゃろ？そつき儂もあやつの風龍を見たが、中々じゅつたしの)

ん？何故かつて？サタン？それはな・・・

(うむ・・・)

お嬢様が相手じゃないからだよ！ふう良かつた。例え模擬戦でも俺はお嬢様に指一本傷つけられないだろう。そしたら完封負けだしな。

(お嬢様とやらが随分と大切なようじゅうじやの。主様は)

まあな。それにしてもサタンの念話から不機嫌オーラが漂っているのは、何故だ？

(自分で考えてみたりどうじゅうじや。主様よ)

教えてくれる気は無いみたいだ。まあ、いいか。それより明日の模擬戦か。ケイルは学園の一年ではトップクラスだし、俺の力が及ぶかは分からぬ。でも、足搔いてはみるか。今まで学園に通つていい俺ではどの程度太刀打ちできるかは不安ではあるが。

(主様なら大丈夫だと思つぞ。なんせ儂を呼び出したお人だからの)

その自信は何処から来るんだよ・・・

(さあ。知らん)

そりですか・・・

まあ、いい。もう今日は屋敷に帰るか。お嬢様も一人で帰つてしまつた様だし。

そうして、俺は明日の模擬戦に備えるために屋敷へ帰る事にした。

第十一話 心構え（後書き）

模擬戦はロイがやらかします。

第十三話 サタンの魔力（前書き）

サタンのポテンシャルがやばいです。

第十二話 サタンの魔力

俺はセンター・ハート家の中庭で明日の模擬戦の為に修行していた。

今はもう薄暗い夜。少し寒い気もするが、修行をしていると、体を動かして暖をとれるので、あまり気にならない。

明日の模擬戦は使い魔アリ、魔武器アリ、魔法アリ、剣術アリ、その他戦闘に関することならなんでもアリの勝負だ。

俺は魔力量の関係でサタンを呼び出すことはできないが（黒猫のサタンなら出せるがあまり役には立たないらしい）ケイルは使い魔の風龍を出せるので、明日の模擬戦はかなりヤバイかもしれない。だが、対策はある。

サタンはというより使い魔の全ては主人が呼び出していない時は主人の心の中で主人が使役してくれるのを待っているらしい。

サタン（黒猫サタン）は俺の心の中にいる時に真価を發揮する。

その真価が俺の切り札だ。対策もある。その真価とは・・・サタンに膨大な魔力を貸して貰うことだ。サタンと俺は心と心が繋がっている。まあ、他の主人と使い魔もそうなんだが。

その心の繋がりを利用して、そこから魔力を貸して貰う事ができる。

膨大な魔力量を持つサタンの主人となれた俺にしか出来ない荒技だ。

サタンを召喚する事は出来ないが、この方法なら風龍にも立ち向かえると思う。

ついでにこの魔力の貸し借りを思いついたのはサタンだ。戦闘では役には立たないからこの方法を提案したらしい。

だから、俺は魔力の受け渡しの練習をしていた。

「サタン頼む！」

(うむ。では主様に魔力の一部を)

その瞬間俺に青い魔力のオーラが纏わりつく。

凄まじい力を感じる。これでサタンの魔力の一部なのだから、サタンは凄い使い魔だと思います。体が軽いし、今この溢れる魔力なら俺が修行して覚えた、初級魔法なんて無限に唱えられる気がする。

凄い切り札を考えてくれたよ。サタン。

(うむ セウジヤル セウジヤル)

ああ、ただな・・・

これめちゃくちゃ疲れる・・・サタンとの心の繋がりを利用した荒技だしな。他人の魔力が無理やり流れてきてる気もするし、何よりこの膨大な魔力を受け止めて自分の力に変換しなければならないのが一番大変だ。

これは、本当に切り札の様だ。もうスタミナが切れる。これでは、今日はもう修行は無理か・・・

まだまだ修行が足りないな・・・

(うむ。まあ荒技だし仕方ないじやろ。今日はもうゆっくり休むとよい)

そういうって俺に魔力の供給を辞めるサタン。

その瞬間俺に纏わっていた青い魔力のオーラが消える。

サタンの言つとおり今日は休むか。まだ修行が足りない氣もするが。
・

(明日は模擬戦なのじやろ?なら、体を休めるのも修行の内じやよ。
主様よ)

ああ。 そうだな。

それにして俺の力でケイルに勝てるのか分からない。まあ、俺には切り札が二つある。

「不可視の斬撃」と魔力の貸し借りだ。それに俺の気力はサタン曰く、規格外らしいし、こざとなつたらその気力を氣仙花に載せて斬撃を放つ方法もある。

まあ、負けるにしても少なくとも足搔けるだろ?。

本音を言えば、センターハート家の従者として負けたくないが。

そんな事を思いロイは自室に戻り、睡眠をとった。

一方アメリカは一

アメリカはただ自室で心の中にある炎龍と心を通わせていた。

まあ、アメリカの実力は学園の1年ではトップクラスなので、ロイみたいに修行する必要はないが。

「まあ、炎龍は喋れませんし、『んなと』ですわね」

そう言い炎龍との心のリンクを切るアメリカ。

リンクを切った瞬間凄まじい力を中庭から感じた。

何ですの・・・この力は・・・

まるで金縛りにあつたみたいに動けませんわ。中庭を確認したいが、出来そうもありませんね。中庭といえば、あの荷物持ちも修行しているし、どうなっていますの?

まさか侵入者ー父様も仕事でいないし、このタイミングを狙われたのかしらー

そんな思考がアメリカの脳裏をかすめる。しかし、それは杞憂に終わる。

直ぐに凄まじい力が消え失せたからだ。急いで自室の窓からアメリカは中庭を確認する。

そこにはただ疲れ果てたロイが居るだけだった。

(あの荷物持ちだけしか居ない？まさかあの荷物持ちがさつきの力を？そんな事はありませんわ・・・しかし、あの魔武器のポテンシャルは侮れなかつたし・・・いやでも、使い魔は猫だつたし・・・しかし、侵入者でも無さそうだし・・・ああもう分かりませんわ！)

様々な思考が浮かぶアメリカ。

(考えてみればあの荷物持ちはよく分かりませんわ・・・魔武器は一級品ですが、使い魔は多分最底辺。リーゼ先生もあの荷物持ちの

事を疑わしそうな瞳で見ていらっしゃいましたし……結局、あの
荷物持ちはよく分かりません）

（だけど……あの力は一体……）

ロイや謎の力を気にしながらも、眠りに耽るアメリカだった。

第十三話 サタンの魔力（後書き）

模擬戦でストックが切れます・・・不安です。

第十四話 透き通る心（繪書き）

短めです。

第十四話 透き通る心

今日は模擬戦か・・・学校へ向かうとするか。

今日は闘技場で模擬戦なので、何時もより早く登校しなければならない。

屋敷の玄関を見てみると、もう学園へ向かう準備が出来ているお嬢様が立っていた。

「荷物持ち早く登校しますわよ

「遅れてすみません。行きましょ

いつもの様にお嬢様の鞄を持つ。今日は授業がないから鞄が軽い。この鞄の軽さが俺に模擬戦を意識させる。

少し緊張しているな・・・俺。

登校途中、後ろからお嬢様の姿を見る。まるで太陽の様に美しいと俺は思う。

お嬢様のよつたな実力者は緊張も無いのだらうか? なら羨ましいかも
な。

(主様よ。一つ進言してもいいのじや)

なんだサタン?

(緊張とは大事なものじや。緊張していないものは少しの油断で死ぬ事もあるじやる。儂の持論じやが、常に緊張している者が真的強者としての形だと思つのじや。だから主様。その緊張は忘れない方が良ことおもうの)

ありがとウサタン。要は油断した者が負けるってことか。とても参考になつたよ。

(つむ。儂は長く時を生きてきたから。無駄なうそべくなど数千はあるから、礼など構わんぞ主様よ)

それでもありがとウ。サタン。お前のおかげで、緊張がなくなつて
きたよ。

(それは、良かったのじや)

念話でそんな事を話しつつ、俺は学園に向かった。そして、学園に着いた。

荷物をお嬢様に預けて、俺は学園の闘技場へ向かう。お嬢様も御友達と合流して闘技場へ行く様だ。

俺は闘技場の扉前に立つ。とても重々しい扉に手をかけて、いよいよ闘技場の中へと入る。

もう緊張はあまりない。しかし、ある程度緊張感を残しておく。

戦闘前の心境には良い感じだと思つ。

俺は妙に落ち着いた心境でケイルとの模擬戦を待っていた。

第十四話 透き通る心（後書き）

もうすぐケイルとの模擬戦です。

第十五話 弱点（前書き）

ケイル戦です。

第十五話 弱点

お嬢様の模擬戦は語るまでも無く、お嬢様の勝利だった。対戦相手も不憫だ。

なんせ、中級魔法を連発されたのだから。高等部レベルだと中級魔法はまだ、数回くらいしか打てないはずなんだけど・・・

マジでお嬢様凄い！

と思ひ。巣戸無しに。

あれだけのレベルになるまで相当苦労なさった筈だ。もしかしたら、もう上級魔法すら行使できてしまつかもな。お嬢様なら。

そんな事を思わせる試合内容だった。

闘技場の中から規定量のダメージを超えて、医務室へ転移される奴や降参する奴や勝つて素直に喜ぶ奴。

多種多様だ。

だいたいの模擬戦は魔武器での初級魔法の撃ち合いや使い魔召喚での使い魔の使役が戦闘の中身の様だ。

こつ他人の模擬戦を見てみると、今の俺でも初級魔法くらいは十全に行使できているから俺って落ちこぼれじゃなくね？

今まで学園へ行ってなかったからといって、落ちこぼれ扱いというのは早計だと思う。

初級魔法でも行使して取り敢えずは普通にみんなに認めてもらいたい。

まあ、ケイルとの模擬戦は全力を出す。

落ちこぼれの名譽挽回のためにもな。

もうすぐ、俺の模擬戦の番か。

とつとめの無いことを考えて時間を無駄にした・・・

さて、スタジアムに上がるかね。

(共に行ひづれ。主様よ)

おつーサタン！

闘技場のスタジアム

どひやら審判や審査員がスタジアムの周りを囲んでいる。

審判は担任のリーゼ先生だった。

リーゼ先生に規定量のダメージを越えたら医務室へ転移される魔法をかけられる。

横にいるケイルにもだ。

いよいよ、試合開始つてやつか。争い」とはあまり好きじゃないが。
・

本氣でいく！

「では両者所定の位置へ」

リーゼ先生から声がかかる。

俺はスタジアムの所定の位置へ立ち、向かいのケイルへ目線を向ける。

「落ちこぼれが相手のようだなあ。ワンサイドゲームにはしないでくれよ？」

「ケイル様。こちらも今は学生です。だから、貴族の貴方でも本氣で行かせていただきます！」

「ほお。重ひじゅねえか。なら落ちこぼれの本氣とやら貰おうか！」

「ではロイ対ケイル。模擬戦を行う。始め！」

リーゼ先生の始まりの合図で俺とケイルの模擬戦が始まった。

「じゃあセントーハートの従者さんよお。こいつから行かせて貰う
ぜ」

そういうってケイルは魔法の行使に入る。しかし、俺もケイルに魔法を行使させまいと距離を詰める。

ケイルの魔力の感じからして、放たれるのは初級魔法だ。しかし、直撃はヤバい。急いで間合いに入る。だが・・・

「少し遅かったなあ。落ちこぼれ。魔力の充填が終わつちました。
これで試合終了かもな? いくぜウインド・カッター!」

ほほほ、ゼロ距離でのこの風の小刃は避けられないか・・・

なら、こちらのカードを一つ切らせてもらひー。

その瞬間ケイルの疾風でスタジアムに砂煙が舞つ。

「もう終わりかあ？落ちこぼれ。まあ、俺の得意な風の魔法をくらつたんだ。落ちこぼれには耐えられないよなあ」

ケイルは笑う。

「何をおっしゃっているのですか？ケイル様？俺は無傷ですよ？」

「何！」

ケイルは魔力の残滓がまだ残っている俺の方を見る。

「そうか・・・分かつたぜえ。少し驚いたが、その魔武器だな？」

「そうですよ

そういうって俺はケイルに魔武器を見せる。美しき剣、氣仙花だ。俺が無傷だつたのも氣仙花をだして氣力を込めた斬撃でケイルの疾風から逃れたからだ。

「俺の風を凌いだんだ。それなりの魔武器のようだなあ。落ちこぼれにしてはよくやったと思つぜえ。」いつも魔武器を見せてもうよ

そつひつてケイルが見せたのは銀の杖。

「！」の杖の名は風翔ふうしよう。こいつで魔法行使すると風の魔法の力が上がるんだ

「俺に魔武器の能力を教えるなんて余裕ですね？ケイル様？」

「フン。落ちこぼれの癖に俺の魔法に耐えた褒美とでも思つておけよ？話しあいはここまでだ。第一ラウンドと行くぜえ！」

そつひつてケイルは魔法を行使する。

「ウインド・カッター！」

くわづ…さつきよつも風が速いし、威力も高い。

(落ち着くのじや。主様よ。儂がある。魔法に対しては千人力じや
ぞ)

そうか。サタンがいたな。助かるよ。

(今から主様にあの魔法の弱点の場所を教える。そこにむかって主様も初級魔法を使してくれんかの?)

わかった!

俺はウインド・カッターに向けて初級魔法を使用する。

「ファイヤ・アロー」

よし出来た! ラザイン様との修行の賜物だ!

俺はサタンに言われた通りにウインド・カッターに向けてファイヤ・アローを放つ。

「おいおい。落ちこぼれ君。そんなチャチな魔法で魔武器で強化された俺の魔法を貫けると思つてんのか?」

「あと少しで分かりますよ」

ファイヤ・アローとウインド・カッターが風と火花を散らしてぶつかり合う。だが、僅かにロイのファイヤ・アローがケイルの魔法を押し始める。

「はあ？ なんでだ？ 僕の魔法がただの初級魔法に負けているだと！ どうこいつ半端を使つた？」

「別に俺の魔武器の能力ではないですよ？ ただ俺は魔法を放つ時に工夫したんですよ」

「工夫だと？」

「貴方の魔法の弱点部位を狙つたんですよ」

「あの短時間でそんな事できる訳がねえだろー！」

「出来たから」「立つていろんですよ」

「ああ・・・分かった。まあ、俺の攻撃を貫抜いたのは事実だしな。少しは認めてやるぜ。お前は中々倒しがいがありそうだ！」

そういうて、風の魔法を連発いや、乱発し始めるケイル。初級魔法のようだ。

「これならどうだ？落ちこぼれ？この早さの魔法はさすがにさばききれねえだろ？」

確かに今からじや魔法行使しても間に合わない。かなり早い速度でケイルの魔法が向かって来る。

この状況を打破するには・・・今の俺ではあれしか思いつかない。

(ほう。出すのかの？切り札の一つを)

ああ・・・それしかないだろ！

俺は氣仙花に氣力と魔力を込める。そして放つのは・・・

「不可視の斬撃！」

俺は切り札の遠隔攻撃を出した。特別準備室の壁を簡単に突き破つたこれなら・・・

ケイルの魔法も一掃出来る筈だ！

見えない斬撃と風がぶつかり合つ。

「おい。落ちこぼれ。何しやがつた？ 視えねえ何かに俺の魔法が・・・
・ぐつ・・・」

「馬鹿な・・・俺の風の魔法を全て一掃しただけで無く、俺にまで頬にかすり傷を与えるとはな・・・本当に何しやがつた！・・・

「俺は貴方みたいに余裕じや無いんでね。種明かしする氣は無いですよー！」

そういうて、すぐケイルの間合いに入る。

「敬語を使ってもばれてんだよ。おめえのその負けず嫌いなオーラ

はよお。良に加減その口調、辞めたひびつだ？虫睡が走るんだよー。」

「そういう訳にはいきませんよ。ケイル様。センター・ハート家としてもダメです」

そんな事を言いながら、激しく剣舞をぶつけ合つ俺たち。剣術は互角だが、ケイルの剣は咄嗟に出した練習用の剣。氣仙花が相手では分が悪いようだ。

「剣術も中々やるじやねえか？落ちこぼれ？」

「俺は武器に恵まれたようですねー。」

そついつて俺はケイルの剣を弾き飛ばす。

「いいぜえ。認めてやる。お前は中々強い。学園の一年上位には入る強さだ。だから、少し手の内を出させてもうつせー。」

今はケイルに認めてもらつた嬉しさよりも、ケイルから溢れる魔力の方が気になつていた。

サタン・・・何がきそーだ？

（この魔力量では恐らく上級魔法は出せん筈じや。恐らく中級魔法を放つ氣じやる。しかし、あの銀の杖が魔法の威力を引き上げるから威力は上級クラスの魔法かもしれんのう）

上級魔法並の中級魔法が飛んでくるって訳か・・・

俺は中級魔法使えないし・・・いや、使えないといつよつ、中級魔法を試したことがない。

（なら試してみるかの？中級魔法の名を儂が教えるから行使してみるかの？）

いや、魔法つて練習しないと使えませんつて・・・慣れた魔法じやないと使えないからそれじゃ賭けだろ？

（また、不可視の斬撃を使うのかの？確かにあれなら打ち勝つことは出来るじやろうが・・・魔力、気力ともに消費が激しいから得策ではないのう）

そうだよなあ・・・まだケイルは風龍も召喚していないからなあ。不

可視の斬撃は温存しておきたい。

なら…

中級魔法とやらに手を出してみるか！

初見だが。

（主様の才能を信じるのぢやー！）

俺はそう決意し田の前の魔力に立ち向かう。

第十五話 弱点（後書き）

戦闘描写が難しいです。

第十六話 僕が望むのは夜

俺が今から試そうとしているのは、中級魔法のぶつけ合いだ。真っ向勝負だ。

これは賭けに近い。俺は中級魔法なんて唱えたこともないからな。まあ、初級魔法なら魔法名をいつだけで唱えられたが。

サタン頼む。俺に中級魔法の名を教えてくれ。俺はその魔法に賭ける。

(大丈夫じゃ。主様ならこの魔法を行使できる。いまから儂が主様に託す魔法は中級魔法と言われているなかでも儂が一番信頼していた魔法。それに、儂も主様の中から魔法のコントロールを手伝つてみるからのう。賭けになんてさせん。今から託す魔法の名は・・・

(ダーク・ナイト)

ダーク・ナイト・・・

わかった。俺もこの魔法を実現させてみせる。

協力頼むな。サタン。

(「つむ。では、少しだけ儂から魔力を主様に渡すぞ）

「ぐつー。」

少し体が熱い。しかも焼けるよ！」。

（これで魔法の成功率も上がるはずじゃ。体
が少しきつい筈じゃが中庭の時ほどじやなかろう？）

ああ・・・確かにあの時ほどの疲労感はない。

（うむ。疲労感はあるじやろうが我慢してくれの。ダーク・ナイト
は中級魔法の中でもかなり魔力の消費量が多いからのう・・・）

ああ。わかってる。俺の為だ。我慢しよう。お前には本当に苦労を
かけるなサタン。

（お安い御用じゃ。儂は主様を全力で守るときめたからのう）

ありがとう。サタン・・・

じゃ行くぞ！

(うむー)

「行くぜえー落ちこぼれー俺の中級魔法をくらえーウインド・ストーム！」

ケイルが魔法を使使した瞬間凄まじい暴風がロイに襲いかかる。

「これはヤバいな・・・人生で最大クラスの危機かもしけん。ダーク・ナイトとやらが成功しないと本当に不味いな。

俺はそう思いながら魔力を慎重に練る。

「どうしたあ？ビビったか？流石に中級魔法にまでは対応できないようだな？」

ケイルが何か言つてるが、無視だ。ただ魔力を慎重に練る。

そして、俺は唱える。俺の誇り高き使い魔が信頼していた魔法を。

成功するかはわからない。

暴発するかもしない。

これは、賭けだ。

それでも、負けたくないから。強くなりたいから。こんな風くらい跳ね除けるようになりたいから。

だから・・・

俺は唱える。闇の夜を名に持つ魔法を。

「ダーク・ナイト」

ロイがそう唱えた瞬間、圧倒的な暗闇が闘技場を支配した。

「なんだ？なんなんだあ？」この魔法は？こんな広範囲に及ぶ魔法…・初級魔法には無い筈…・まさか中級魔法を使用したのか？お前が？」

「ああ？どうでしょ？うか？」

「フン。いけすかない野郎だな。まあいい、俺の魔法は負けないからな。お前のよく分からん魔法など吹き飛ばしてやるよ」

そう…・よくわからない。魔法は発動している筈なのに、明確な効果が出でていない。

まあ、暗くなつたが。攻撃ではない。

その間にもケイルの暴風が近づいてくる。しかし、俺の魔法は何もしてくれそうにない。

まさか失敗した？俺！」ときが中級魔法なんて

無理だったのか？

「……で負けるのか？俺は……」

（安心せい。魔法は発動しておる。取り敢えずあの暴風は余裕で防げるのう。流石主様じや。中級魔法を一発で成功させるなんて本当に例外じゃ）

成功している……？

サタンこの魔法の効果は……何だ？

（直にわかるぞ。主様）

サタンと念話している間にモケイルの暴風が
もうもう田の前に一

その瞬間、闇が揺れた。

「なんだあ？空間が揺れている？何をした……！」

ケイルは信じられないものを見たよ! 俺を見る。

暴風が俺のほぼゼロ距離で闇に飲まれ消えかかっているからだ。

サタン・・・もういつかい聞く。この魔法はなんだ?

(この魔法は魔法を拒絶する魔法。行使者に魔法が当たった場合それを自動的に消す魔法。しかも、この魔法は特別での。行使した後もしばらくはそこに留まり続ける。しかも、

魔力を込めた分だけ防御できる値も変わる。最上級魔法すら防げる可能性をもつた魔法じゃ。ま、持続性がある絶対魔法防御というところか。力を全力で使える時の儂だったらほとんどの魔法をこの魔法で潰せるの)

すげえ。そんな魔法を俺は唱えたのか。感慨深い。

「俺の魔法が消えた・・・何故だ! くそ! だが、お前は隙だらけだ! 落ちこぼれ! いくぞウインド・カッター!」

初級魔法。そんな魔法は今の俺には効かない。

予想通りケイルの風は闇の前に消え失せる。

「なぜだ？まだ効果が終わっていねえのか？何なんだ？くそー。」

そういうて魔法を連発するケイル。

しかし、その全てが闇に消えてゆく。

本当に頼もしいなこの魔法は。

「はあはあ・・・わかった。今のお前には俺の魔法は通用しねえみたいだ。おめえの魔法は確かにすげえ。だがな・・・

「うむ・・・俺が勝つぜ！」

そつ言つてケイルは風龍を召喚する。

「これが、俺の奥の手・・・風龍召喚だ」

「確かに凄い風ですね・・・」

「まさかお前に風龍を召喚するとは思わないかつたぜ。褒めてやる。
だがこれが出了以上お前の負けだ」

「なら足搔かせて貰います。ケイル様」

「ぬかせ！」

俺とケイルの模擬戦が新たな展開を迎えた。

一方観客席ではー

ケイルとロイの高レベルな模擬戦にアメリアは驚いていた。中でも一番驚いたのは・・・

このスタジアム一帯を暗黒に染めた魔法だ。

(あんな魔法・・・見たことも聞いたことも
ないですわ・・・やはり、あの荷物持ち。何か特別なのかしり・・・
?)

ロイの闘いに困惑しているのは、観客席にいる全員だ。

先生達ですから、驚いていた。

なかでもロイが中級魔法を唱えた時にそれが一番強まった。

魔法はこの世界でのステータス。それも当然だ。

ロイは自分の評価が観客席でよくわからなくなっていることをまだ知らない。

第十七話 負けはいらない（前書き）

模擬戦終了。ストックも終了かな？

第十七話 負けはいらない

俺は風龍に向かい合っている。

なんて威圧感だ・・・

これが、ケイルの切り札か・・・

お互い使い魔には恵まれたな。

「ギャオーーー！」

「なつー！」

風龍が吠えただけで凄まじい暴風が発生した。危うく、吹き飛ばされるところだったが、ダーク・ナイトの防御のお陰で何事もなかつた様に俺は立っている事が出来る。

どうやら、風龍の風も魔法に分類される様だ。今の風が魔法じゃ無かつたら終わってたな。俺。

流石風龍つて事か。

(臆するな。主様よ。主様はまだ氣力も魔力も十一分に残つてある
筈じや。主様ならあの風龍を超えられる筈じや。儂は信じておる)

お前にほこつも励まされたるな。

(お互に様じやろ?)

ああ・・・そうだな。俺等は一蓮托生だ。

(つむ。わの通つじや。共にみの龍を越えよ
つむ)

おひー。

「風龍! お前のブレスをあこつてへらわせり! 」

「ギャー! 」

ケイルの命令で風龍がブレスの準備に入る。

使い魔契約から間もないのに、もう使い魔に命令出来るなんて、ケ

イルは凄いと思つ。

俺なんて魔武器と使い魔が居なければタダの落ちこぼれだ。

素直に感心するよ。ケイルには。

あつと貴族として様々な努力をしてきたのだろう。

だが、俺も修行をしてきた。ケイルに負ける理由はない。努力の年月の違いはあるだろう。だが、負ける理由になつてはいないんだ！

俺は氣仙花に氣力と魔力を込める。多分、風龍のブレスを防げるのは不可視の斬撃だけだ。

俺の全てを賭けるつもりでこの技を放とつ。
それが俺に出来る最善。

「いぐぞー！風龍！ブレスだ！」

「ギヤー——！」

ケイルの命令と共に、放たれるブレス。ケイルのさつきの暴風よりも激しい風。きっとダーク・ナイトの防御では防げない。

俺もそれに対抗すべく、見えない斬撃を放つ。

「風龍のブレスが何かとぶつかり合っている？俺の初級魔法を全て打ち消した技か！」

その通りだ。ケイル。

後は、どちらの攻撃が打ち勝つか・・・

それに全てがかかつている。頼む・・・打ち勝ってくれ・・・

だが、俺の思いは虚しく風龍のブレスが見えない斬撃を通過し俺に迫る。

「ぐあああ！」

俺はみつともなく叫ぶ。ブレスが直撃してしまったからだ。不可視の斬撃でブレスの威力を弱くして、ダーク・ナイトの防御まで発動

していのにこの威力か・・・

凄まじい痛みだ。ダーク・ナイトの防御が無ければ一瞬で医務室送りだったな。

俺はここで負けてしまうのか？

そんな思いが俺の胸をまたよぎる。

俺は負けないとあの日誓った筈なのに・・・

負けたくないんじやないんだ・・・負けられないんだ・・・

俺は捨て子だ。きっと弱かつたから捨てられたのだろう。推測にすぎないが。

俺は弱いという理由だけで人並みの幸せを失ってきた気がする。唯一の幸せはセンターへ
一ト家に拾われたことだった。

俺はいつも弱い。弱いから全てが俺の手から滑り落ちる。今の居場所だけはなんとしても守りたいというのに・・・

弱かつたらまた・・・捨てられる・・・

また一人になる・・・それだけは嫌だ。嫌なんだ・・・

センター・ハート家の人は優しい。捨てられる
ことは無いと思う。

だけど俺のせいでも少しでもセンター・ハートの名に傷が付いたら・・・

この世界は弱いものにはどこまでも非情だ。弱いものは全て切り捨てられる。タランテイルスはそういう風に出来ている。

だから、辛すぎる生活のせいで記憶を失った俺は誓った。

俺は強くなる・・・最強になる。もう、悲しむことがないよつた。
弱い俺を支えてくれた人を守る為に・・・そして、一人にならない
為に・・・

だから！

だから！

負けられないのに！俺はまだ立ち上がるの！

風龍には勝てないのか？俺は弱いままなのか？ずっと無力なままの子供なのか？

もう、嫌なんだ・・・

負けるのは・・・

落ちこぼれと言われ蔑まれるのはいい。だが・・・誰かに負けることだけは・・・

俺の魂が俺を許せない！

「サタン！――俺に・・・魔力を貸せえええ！」

(主様の思いは伝わった。儂が主様の全ての望みを叶えよう。荒技じやが耐えてくれの・・・)

そして、俺に莫大な魔力が纏わり付く。

「なんだ・・・なんだよこの魔力は・・・俺の体が金縛りにあつたみてえに動かねえ。何なんだよこの魔力は!」

ケイルは怯えている。風龍もその場から動けない。

「ぐそー！風龍！あいつにもう一度ブレスだ！」

「ギヤオーー！」

風龍がブレスを出す。

俺は莫大な魔力と度重なる疲労のせいで既に意識朦朧だ。

そんな俺が咄嗟に風龍のブレスに対抗しようとして出したのは・・・

「俺は負けられないから……だから……ファイヤ・アロー」

初級魔法だ。だが……サタンから借りた魔力の全てを込めた。

そのお陰で、火の矢は火のフェニックスに姿を変える。

フェニックスとブレスがぶつかり合う。数秒
拮抗したが、フェニックスがブレスを軽々突き破る。

火のフェニックスがケイルと風龍を包む。

「ぐわわ！」

「ギヤオーーー！」

二つの叫び声が聞こえる。俺は勝ったのか？目の前にケイルはいいな
い。医務室に送られたのか……？

ダメだ。意識が朦朧とする。俺が勝ったのかはよく分からない。

だが……もう限界だ。

くそ・・・くそ!

勝つたのか分からぬ内に氣絶かよ・・・

ああもうダメだ。

最後にサタンが何か言つてゐる氣がしたが、俺は氣絶した。

第十七話 負けはいらない（後書き）

ロイの強くなりたい理由は単純に一人になりたくないという気持ちが強いです。幼い頃の大きな悲しみが孤独感を生んでいます。

第十八話 力への疑惑（前書き）

学園が動く・・・

第十八話 力への疑惑

ああ・・・よく寝た気がする。

俺は確かケイルと闘つて・・・

どうなった?

(氣絶したんじやよ。主様よ)

ああ・・・そうだったな。

俺は負けたのか・・・

(いや、主様は勝つたぞ。先生とやうやく審査員やらが主様の勝利と
いう形で模擬戦を終了させた様じや。まあ、当然じや。儂の魔力で
丸焼きにしてやつたからの)

俺が勝つた・・・? 丸焼き・・・?

やばいな。最後の方の試合内容が完全に頭から飛んでいる。

(それくらい疲労が溜まつておったのじゃ。あの荒技も使つたしの。それに従者として・・・だったかの? そのストレスとかもあつたじやうし。それにしてもあの時の主様は凄い気迫じやつたのう。先生とやらや生徒とやらが主様の魔力と氣力に気圧されておつたぞ。いや、愉快じやつた)

そうなのか・・・? 思い出せない・・・

まあ、勝つたのならいい。どんなに不恰好な勝利でも俺は受け入れよう。

でも、少し安心したよ。模擬戦という問題も終わつたしな。

「ゴタゴタはあんまり好きじゃないしな。

「ふわあ~。やばいな。また、眠くなってきた。どうせやう、医務室に居るようだしあくてもいいのかな?」

疑問形だが、俺は既に寝る態勢に入っている。

「あら。起きてたの? 全身切り傷だらけだったのに、回復が早いわね

・・・医務室の先生か？

「ああ、先生ですか。俺はもう帰れるんですか？」

寝たいとは思うが、もう日も暮れている。先生に許可を取るのが面倒だから、寝ようとしたが、先生がここにいるんだ。さっさと帰る許可を貰つて屋敷に帰りたい。お嬢様も、もう帰つてしまつただろう。

荷物もてなかつたな・・・

荷物持ち失格だ・・・

センターハート家には迷惑ばかりかけているのに・・・

お嬢様の役にちつとも立ててない。

はあ・・・

とりあえず帰りたい。早く帰る許可をくれよ。名も知らない医務室

の女医よ。

「実はあなたの事を学園長が呼んでいるのよねえ。怪我人には安静にして、欲しいのだけど・・・学園長があなたが起き次第学園長室に連れてくるようにですって。だから、ごめんなさい。学園長室に行つて頂戴」

学園長？俺が何かしたか？

（わからんのう。何で呼ばれたんじやろ？）

サタンにも見当が付かないか。

学園長室か・・・何か面倒だ。

まあ行くか。今日の模擬戦の話かな？

分からんが。

入った。学園長に入った。大理石の豪華そうなつくりだ。装飾もたくさんされている。

学園長は確かに……初老の女性だったかな？

「貴方がロイ・カーレス君ですね？模擬戦は拝見させていただきました」

「ありがとうございます。で、話の内容とは何ですか？」

「この人、俺が相手でも敬語なんだな……学園長なのに。まあリーゼ先生もそんなもんか。」

「話の内容はですね……模擬戦のことですよ」

「ああ、やつぱりか。でも、何故だ？」

「何かしてしまったのでしょうか？すいません。貴族の規則には疎いもので」

「いえいえ。そういう事ではないんですよ。貴方の模擬戦で無作法はなかつたですよ。ただ・・・あの闇の魔法はなんですか？」

学園長から凄まじい量の魔力が俺に迫る。

「うう！」

俺は吹き飛ばされた。

「私は永い時を生きてきました。魔法も最上級やあらゆるとこりまで知っています。ですが、あの魔法は何なのですか？あれは私も知らない未知の魔法ですよ？ただの学生には行使できません。正直怪しそぎる。貴方の経歴もよく分かりませんし。場合によつては私が貴方を・・・それがギルドや軍に追放しないといけません。一体貴方は何者なのですか？」

おいおい。サタン。なんて魔法を教えるんだ。学園長も知らない魔法なんて・・・

(それはのう・・・ダーク・ナイトは僕のオリジナルだから。そのババアが知らないのも当然じゃ。それにしてもこのババアむかつくの。主様に魔力を向けるなど・・・
この恥知らずが！)

その瞬間。俺から凄まじい量の魔力が纏わり付いた。

おいおい。サタン。なにしてんの？勝手に魔力を渡さないでくれるか？

「な・・・やはじこの魔力の量・・・学生の範疇を超えていり・・・もしかして総量はこの私以上か・・・？」

学園長が結構苦しそうだ。サタン、魔力の放出を辞めてくれ。

（何を言つておる。このババアに主様は殺されかけたのじや。これくじこは当然じや）

それは、俺という不特定不安分子から学園を守るためにだろ。仕方ないと思つた。とこつか、このままじゃ話しあいにならないしな。眞面目に魔力を止めてくれ。

（そこ今までいうなら・・・仕方ないの。ただ、主様に危機が再び迫つたら、儂も考えがあるぞ）

わかったよ。サタン。

そして俺から青いオーラが消える。

「学園長。俺は学園に危害を及ぼすつもりはありません。どうか信じてください」

（主様よ。頭を下げる必要はなかつへ~）

「うるさい。サタン。この場面に俺の学園生活がかかっているんだ。センター・ハート家にも迷惑かけられないし。

「じつせり、攻撃の意思はないようですね。分かりました。私も魔力を解きましょう」

「ありがとうございます」

「では、再度問います。貴方は何者ですか？明確な答えをお願いします。ついでに、学生やセンター・ハート家の従者という答えは受け付けません。ただの学生や従者があんな魔力をもっている訳がないのですから」

俺が何者か？そんなの・・・俺が知りたいな。

俺は何者なんだ？

センター・ハート家の従者？

ロイ・カーレス？

いや、これらの要素は俺が俺である証明にはなっていない……

名前にいたつては、自分で付けたしな。

振り返つてみると笑えるな。15年も無駄に生きてきたのに俺という存在を証明するものがなに一つ無いなんて。

本当に笑える。

本当に・・・笑える・・・

俺は・・・

まあ、俺は自分が何者かも分からぬ。なら解答は一つしかないな。

「俺が何者か？ですよね？残念ですが、分からぬのです。記憶が無いもので」

「その解答では私は貴方をー」

「話しが続きをさせてください。俺は一つだけ。本当に一つだけ。俺は信じているものがあつます」

「信じてこるもの？ですか？」

「はい。それはセンターハート家です。俺はあの家だけは絶対に裏切らない。俺はあの家に救われましたから。この学園にはセンター ハート家のお嬢様がおられます。私はセンター ハート家の縁者が学園にいる限り学園に危害は及ぼしませんよ。だから・・・どうか・・・俺を信じてください」

彼は悲しそうにだけ強く私のことを見る。懇願するように。

・・・そんな目をされたら、信じるしかないじゃないですか。

「分かりました。貴方の事を信じましょ。先ほどまでの無礼を許

してやる。

「ありがとうございます。」

「今日は長々とすみませんでしたね。ロイ君。今日はもう帰ったほうがよろしくです。」

「はい。分かりました。では。」

俺は学園長から出る。

良かつたよ。学園長と敵対しなくて。本当に良かった……。

(つむ。やじりやの)

ああ・・・

疲れた。

サタンの力の扱い方も考えないといけないのか?

ややこしいな。

とりあえずは帰るか。

そうして、俺は屋敷に向かう。

一方学園長は一

ロイ・カーレス君。深い悲しみをもつている少年。

「彼が学園に危害を加えないなら、私は彼を精一杯サポートしますか。
ました」

彼が学園に危害を加えないなら、私は彼を精一杯サポートしますか。

彼は平民ですし、いろいろ苦労もあるでしょ？。

誰かが、守なれば。それが教育者としての務めだ。

(いろいろ苦労が待つてあるかもしれません、頑張ってください
ね。ロイ君。)

一人そんな事を思つ学園長であった。

第十八話 力への疑惑（後書き）

学園長がやられました。

第十九話 未だ未知数（前書き）

学園長に殺されかけるとは・・・ロイに同情。彼って不幸ですね。

第十九話 未だ未知数

俺は今屋敷にいる。従者としての雑務を終えいつも通り修行。

最強に近づけるのはとても嬉しい。そんな充実感があるから修行はやめられないな。

(その志しがあれば主様なら人類最強などすぐじやうつな)

そんなことはないと思うんだが。サタンは人類舐めすぎだ。まあ、悪い気はしないがな。

(儂は人間を舐めてなどおらぬよ。ただの主様のよつな人を見てい
るとい違和感を感じてしまうのじゃよ)

違和感？

(人間はここまで存在だったのかと。主様を見ていると主様以外の人間はゴミにしか見えんの。正直主様と他の人間ではそのくらいの差があるの。まあ、儂は人間じゃないから人間の価値観とは違うかもしれないがの)

俺を褒めているよつだが、俺はそこまで素晴らしい人間じゃないぞ？

俺より性格がいいやつなんてたくさんいるし、強いやつもたくさんいる。

俺なんかまだまだ。

（我が主様よ。やつこいつじではないのじゃよ。強さとか明るさとかそんなものでは僕は人を褒めん。評価にすら入れん）

じゃお前の人間の価値観はなんだ？ 気仙花で素振りをしながら尋ねる。

（意思の強さじやよ。どんな困難でも立ち向かう勇気。それが僕の
人間評価の価値観じや）

俺は意思の強さが多いってことか？

（あこどひじやなこのう。僕よいつも上じや。おそらく世界最高の
意思の強さじやよ）

どう反応すればいいかわかんなないな。まあ、俺の気力が多いのもそ

「」に関係するのかな？

（恐らくやうじゅう。最初は本当に驚いたの。こんな気力をもつて人が少年とは・・・みたいな感じで驚いたの）

サタン。褒めてくれるのは嬉しい嬉しいんだが、修行に集中するからしばらくは話しかけないでくれるか？

（うむ。分かったの）

俺はその日剣術を修行していた。様々な剣術がセンター・ハート家の指南書には書いてあつたが、俺にはどうもしっくりこない。

自分で剣術を創ることも検討中だ。まだ型がない無骨な剣術だが何が掴めた気がする。

それだけでも収穫だな。

まあ、剣術に関してはおおい考えるか。

（修行もひと段落ついたようじゃの。主様。唐突で悪いが、恐らく主様の方に向かってくる足音がする）

おお。サタンか。

足音？誰だ？使用人仲間か？いや、こんな時間に中庭に用はないはず・・・

じゃあ誰？

そうして俺は足音の主へと顔を向ける。

お嬢様だった。

俺に用でもあるのかな？あんまり家事を申し付けられないから嫌われているかと思ったが。

何かして欲しいことでもあるのかな？良かつた。お嬢様に従者として見られてて。荷物しか持たせてくれなかつたから、正直、落ち込んでた。

一応、従者としてはかなり完璧に育てあげられたからな。

ラザイン様に。

だから、お嬢様。

俺に向なつといひ要望をお申し付けください。

(従者根性が染み付いてあるの。やつもまでの美しい剣術が嘘みた
いな心の変貌じや。流石主様じや)

褒めてるのか?けなしてるのか?

(褒めておるぞ!主様)

そうか・・・ありがと・・・?

まあ、今はサタンの事はいい。お嬢様の、要望を聞かなければ。

いや、話しかけてくれるのを待つべきか。

何十年も待つてたんだ。待つことには慣れてる。

「あなたの今日の模擬戦について話しがあるの」

従者スキルがいらなそうな内容だ・・・

意気込んでいた自分が悲しい・・・

「模擬戦の事ですか?」

「ええ。 そう。 荷物持ち。 あなたは本当に今まで学園に通つてなかつたの?」

「はい。 その通りです」

「なのにあんな空間を支配下に置く、ましてや火のフニッシュクスなんかなぜ出せるの・・・?」

「学園には通つて居ませんでしたが、今まで必死に修行して足搔いてましたから。 そのおかげです」

本当はサタンのおかげなのだが、使い魔のおかげといつても、説得力がない。

なんたつて俺の使い魔は黒猫なのだから。

本当は金髪の美しい悪魔のような聖女のような女なのが。

「努力でのケイルを倒したというのかしら？」

「はい」

すまん。サタン。大嘘だ。

そしてお嬢様あなたに嘘をつくるとをお許しください。

「なるほどね。私はあなたの「努力」を知ってるから、まだいいけど学園のみんなはあなたの模擬戦の結果を見て困惑してたわね」

「困惑ですか？」

「そり。困惑。落ちこぼれの貴方がケイルに勝利したから当然ね。まあ、悪い方向ではないけどいい方向でもないわね」

「なぜ俺にそんなことを？」

「ケイルを倒した」¹褒美かしら……？それにあんた面白いしね

「気にかけてくれてあいがとうござります」

「つーー！ 気にかけてはないわ。あんまり勘違いしないようだね。荷物持ち」

「はいー。」

「なんで笑顔なのよ……」

「お嬢様と会話出来て嬉しいからですよ」

「そりそり……変な従者ね……」

「顔が赤いけど大丈夫ですか？お嬢様？」

「うぬせこー大丈夫よー。」

「すいません。気に障つてしまつたようで」

「はあ。別にもうこいわよ。まあ、あたしからは以上よ」

「はい。分かりました」

「じゃあ、おやすみ。荷物持ち」

「いい夢を。お嬢様」

お嬢様は中庭を立ち去る。

それにしても模擬戦の反応が困惑か・・・学園長の例もあるしなん
かこわいな・・・

(主様なら大丈夫じやろ。なんだかんだいってあの少女も主様を嫌
つていないうつじやしの)

そう信じたいな・・・

なんか今日は疲れた。

模擬戦に学園長にお嬢様。

もう限界だ。

疲労が。

修行も切り上げて今日は寝よう。

(うむ。 それがよい)

一方アメリカは・・・

「あの荷物持ちの実力が未知数だわ・・・」

本当によく分からぬ従者だ。

「まあ、今日の模擬戦で結構役に立つのはわかつたし、いい事よね」

いい事？なんで従者が強いのがいい事なの？

自分で自分が分からなくなる。

「あの荷物持ちは私に新しい景色をみせてくれるのかしら？」

少し荷物持ちに期待してしまつ。

あのミステリアスな雰囲気に。

「実力はみどめるわ。荷物持ち。まだ面とむかっては言わないけど。
・・応援してる。あんたを」

努力で強くなつた荷物持ち。もしかしたら彼と私は似てるのかもしない。

第十九話 未だ未知数（後書き）

努力がアメリカに届く瞬間？でした

第一十話 僕は意外と運命に好かれているのかもな

模擬戦を終え、学園長との対談？を終えた翌日一つまり今日。

俺は今、お嬢様の鞄を持ちながら通学途中様々な奴に奇異の視線を向けられていた。

昨日の模擬戦でケイルに勝つたからだろうか？俺はケイルに勝てた気はしてないが。

勝てたのは運が良かつただけだ。

なのに、この視線の数・・・

俺という人間を推し量ろうともしているのか？

好奇心溢れた貴族達だ。とても迷惑している。

それにこの視線は必然的に俺の近くを歩くお嬢様にも向かう。

お嬢様は何処吹く風というよろにスルーしている。

お嬢様本当にすみません。

俺は昨日のお嬢様の忠告通りなにか複雑な立場にいるようだ。

この俺への注目度からも分かる。

俺が目線を向けるといつから視線を逸らす奴や逆に見返してくれる奴。

反応は様々だ。

俺は学園長から殺されかけたことを思い出す。

きっとヒーダーク・ナイトを使ったのもこの注目度の原因なんだろうなあ。

学園長も知らない魔法を落すじぼれと言っていた俺が使ったから当然か。

きっと学園での俺への評価は、ケイルに勝ったよく分からぬ奴という所だろう。

いや、怪しい奴か？

今までろくに学園に通つていなかつたのに、魔法を使えるなんておかしいらしいからな。

しかもケイルに勝つために凄い魔力をサタンから貸して貰つたことは学園のみんなに見られたしな。

うーむ、この視線の意図がやつぱり分からぬ。

ただ的好奇心か？迷惑だ・・・

お嬢様の忠告？の通り学園生活を送るにあたつて注意が必要かもな。

あーあ、めんどくさい立場になつた。学園長みたいな反応をしてくる奴がでこないといいが・・・

祈るしかないな。

俺とお嬢様は教室に着いた。そしていつも通り授業を受ける。

授業の内容は簡単だ。初級魔法の理解を深めるだけだからな。

実技も剣術の研鑽のみ。まだ魔法についての実技はしていない。

実技中は目立たないようになつそり剣を振っていた。

俺個人で剣術練習した方が上達するからな。

しばらくの間、慎重に学園生活を送った結果、ある事がわかつた。

俺を落ちこぼれ扱いする奴が減ったこと。これは嬉しい。とてもな。

だが・・・クラスメイトのみんなが俺と一定の距離を保つようになった。

ある意味孤独だ・・・

たまにお嬢様が話しかけてくれるのがとても嬉しい。

どうやら俺は根暗な性格のくせに孤独が嫌いなどいつもないが
キラシー。

こんな距離を作られるなら、まだ落ちこぼれと言われ蔑まれていた
方が良かつたかもな。

どうやら、とりあえず俺の事はクラスのみんなとしては様子見、保
留するから。

模擬戦で負けたケイルも同じような感じでクラスメイトに扱われて
いる。

多分、貴族同士何か気まずいのだろう。

まあ、少し寂しい気もするが、俺の目的はあくまで強くなつてセン
ターハートをあらゆるものから守ること。

その目的を邪魔されないのならこの立ち位置もいいのかもしない。

俺の近況報告はこな所だ。サタンどり思つ。

(うーむ。なんか悲しいのう。主様はあんなに頑張つたといつのこと。
・・儂も孤独は死ぬほど嫌いじゃからの・・・これも強者としての定めかのう。運命は儂らを孤独にさせたいのかの?)

案外俺らは、運命とやらに嫌われてるのかもな。

なんか不幸だし。

(儂らは似たもの同士といひことじやの・・・強いが故に迫害を受ける・・・)

迫害? そんなに酷くはないわ。

(儂は孤独が何より嫌いじゃからの。儂ことつては孤独は迫害なのじゅよ)

そうか・・・お前は・・・何千年も・・・あの暗い場所に・・・

(主様には、儂の様になつて欲しくはないのう・・・)

サタンのように孤独にならないで欲しいってことか?

(うひ。そうじゅや・・・)

残念だったな。サタン。

(何がじゃ?)

俺はサタンに心配される程孤独じゃないんだよ。

ラザイン様やお嬢様。様々な人が俺を支えてくれているからな。

それに何よりお前がいる。

俺の心にお前がいる。

サタンやセンターハート家がいれば俺は孤独じゃないんだ。

だから、残念だったな。サタン。俺はもうすでに孤独じゃないんだ。

お前さえ居てくれれば・・・

大事な人達が居てくれれば・・・

俺はそれでいい。

だから、あんまり俺の心配はしなくても良かつたりするんだぜ。サタン。

サタン？

(主様は儂をもう一人にしないか?)

契約したときのことづくに誓つたよ。お前を孤独から守ると。

(主様だけは儂のそばにいつも一緒に居てくれるか?)

ああ。当たり前だ。

(ありがとう・・・主様・・・儂が・・・儂が・・・主様を励まそうとしたのに、これじゃ逆になってしまったの・・・)

ああ、サタンだからお前は俺を孤独から守つてくれよ？

(もうひきこじやー)

俺はびひひやー、意外と運命に好かれていたのかも知れない。

第二十一話 サバイバル（前書き）

物語の構想は私の頭の中で出来上がりしました。あとは書くだけです。私の書く作品は暗くなりがちなので、直したいのですが・・・難しいです。

第一十一話 サバイバル

俺はいつも通り学園に向かう。お嬢様の荷物を持って。

「ほり、荷物持ちいきますわよ」

「分かりました」

最近はお嬢様は俺と簡単な会話くらいならしてくれるようになった。

同情だらうか？それでも嬉しい。

お嬢様と話す為の繋がりである荷物持ちといつも役職だけは手放さないと思つ俺だった。

いつも通りの朝。いつも通りの授業。

そんないつも通りの時間が割と平和に過ぎていった。

ただ今日の「H.Rに爆弾は投下された。

リーゼ先生の口から。

「来週はチーム対抗のサバイバル演習がある。みんな気を引き締めるように」

は？

サバイバル演習？

聞いてないですよ？

「サバイバル演習については、以前配ったプリントに明記してある。みんなサバイバル演習があつたことまさか忘れてないよな？」

「「はい。大丈夫です」」

プリント・・・

知らないな・・・

それにチーム対抗・・・

サバイバル・・・

闘いになるのか？

むう。プリントがないから分からん。

それにチームはどうやって組むんだ？好きな奴と組めなんて言われたら困るな・・・

「チームはこの時間に発表する。なおチームの人数は5人。ひとクラス40人いるから8チーム出来る。サバイバル演習は一年全体で行うから他のクラスのチームと闘うかもしれない。チームの結束力は高めておいた方がいいかもしけないぞ」

「つまりチームが重要ということだ。ついでに、それぞれのクラスでサバイバル演習の成績がトップだったチームは学園対抗トーナメントにも出でもらつ。一年生は5クラスあるから、5つのチームがトーナメントに出れるわけだ。成績にも関わるからしつかりな」

サバイバル演習、つまりは1年5クラスでのチーム単位の闘いって事か。詳しいルールはまだよくわからない。

でも、味方はチームだけの戦いになるのか・・・先生の言つとおりチームの結束が重要か・・・とこどん俺に不向きだな。

模擬戦の数週間後にサバイバル演習とか闘いが好きな学園だなあ。

迷惑だ。

まあ、強くなれるきっかけになるかもしね。

頑張るか。それ位しか俺にはできないから・・・

「ではチームを発表する・・・まずはキリュー君・・・」

リーゼ先生のよく通る声がチームの編成を発表する。

先生曰く模擬戦や普段の成績などで実力が均等になる様にチーム分けされているらしい。

5チーム程が発表された頃、どうつか。

リーゼ先生から俺の名前が発表された。

「次のチームはまずロイ君!」

その瞬間教室の空気が微妙になる。

微妙としか表現できない。

俺と一緒にチームになるのは嫌なんだろうな。

距離を置かれたことだし、背中を任せた仲間が俺じゃ組んだりつら
も微妙になるしかないだろうな。

さて、次の名前は誰かな・・・

「次はケイル君!」

よつによつて・・・ケイル・・・

どうなることや。まあ、あいつもみんなから距離を置かれている
よつだし、境遇は似ているかもな。

逆恨みされませんよ。

次は？

「次はアメリカ君！」

よし！お嬢様が味方なら、思う存分やれる！
まあ、お嬢様は俺と組みたくないかもしけないが・・・

次は？誰だ？

「次はティナ君！」

ティナ・・・？ああ・・・あの女の子か。確か成績は中の中くらい
か・・・うまくやれるか？仲間として。

ケイルとお嬢様はかなり強いがバランス取れでんのかな？このチー
ム。

1年トップクラスだぞ。

まあ、俺が気にすることはないか。

さて最後のチームメイトは誰かな？

「次はセリア君！これがお前らのチームだ。覚えておくよ。ついでに次の時間はチーム同士の結束を高めるための交流の時間となつていて。来週のサバイバル演習のためにも交流はしっかりさせておくよ。ルールの確認なんかもいいかもかもしれないな。自己紹介とかも済ませておけよ？」

セリア・・・名前からして女子のようだ。無口な人だった気がする。クラスの中心のお嬢様ともあんまり喋ってないし・・・成績はよくわからない。

でもこれでチームは決まったな。俺達のチームは

俺

お嬢様

ケイル

ティナ

セリア

上から根暗、守るべき人、似た境遇の人、成績が普通の引っ込み思案の女、よくわからない無口の女ってとこか。

引っ込み思案と無口か・・・

このチーム割と平和になるかも・・・?

ケイルはどうなんだ・・・?

お嬢様は・・・?

次の時間のチームとの交流の時間で全てが決まるな。

チーム戦とはいえ、負けるわけにはいかない。

守りたい人のためにもな。

どんなチームになるかはわからないが、最善は努力すべし。

そう思いながらローベルトエクの終わつを告げるチャイムの音を聞いた。

第二十一話 サバイバル（後書き）

ご都合主義御免！

第一十一話 チームの不仲（前書き）

主人公の敬語が難しい。間違いあつたら作者の力量不足です。このチームのまとまりのなさを書ければ後の展開に役立つのですが・・・上手く書けたかな？

第一十一話 チームの不仲

そして時はチーム交流の時間。

チームごとに分かれ席に座る。

俺たちのチームは教室の窓側に陣取っていた。

気まずいオーラを撒き散らしながら。

サバイバル演習ではパートナーになるのにこんな雰囲氣でいいのか？

きっとそう思っているのは、俺だけじゃない筈。

しかし中々口火を切れない。

会話スキルに乏しい自分が嫌いになる。

従者としての言葉遣いにボロが出ても駄目だしな。

ここは会話スキルの高い人に期待かー

「では、まずは自己紹介からこなしますわよ。」

お嬢様！流石！」の雰囲気の中、口火を切るなんて。

尊敬します。

(軽い尊敬じやの)

「ひるさい。サタン。

「私の名はアメリカ。センター・ハート家の者です。みなさんとは背中を支えあうチームになるのですからよろしくお願ひします。特にケイルさん。貴方には期待しています。学園では1年トップクラスに入る実力を持っているのですから」

「俺に対する嫌味か？センター・ハートさん？」

そう言ってケイルはお嬢様を睨む。

「やめて下さい。ケイル様。お嬢様はただ貴方に期待しているだけ

です。他意はありません

俺は立ち上がりケイルからお嬢様を守るような態勢を取る。

「チツ。お前は・・・俺に勝った奴なのに、なぜそんなに人に隸属する態度を取る?俺はお前に負けてから、お前を意外とかつてるんだぜ?貴族としてのプライドは崩れたが広い視野で物を見るようになったからな。そういう意味ではお前に感謝さえしている。最初、チームとやらには興味がなかつたんだがお前がいるなら話は別だ。お前の力みせてもううぜ?」

ケイル・・・お前・・・

俺に期待・・・?

サタンがいなければ何もできない俺を?

お前の方がよっぽど強いところの元・・・

お嬢様を舐めてるのは、マイナスだが、そう思われるのほとも光榮だ。

「ありがとうございます。ケイル様」

「ああ・・・楽しみにしてるぜロイ君よお？俺は強い奴にしか興味がねえからな。そういう意味ではセンター・ハート。お前にも期待してるんだぜ？」

「ええ・・・ありがとうございます。では自己紹介を続けましょうか。荷物持ち。頼むわよ！」

ケイルの言葉を受け流すお嬢様。ケイルが嫌いなのだろうか？

サバイバル演習でチームとなるには嫌な傾向だ。

おっと、俺の自己紹介か。

「ロイです。センター・ハート家の護衛権の従者です」

「それだけですか？荷物持つ？」

「すみません・・・」

会話スキルが無い物で・・・

（儂にはかなり主様の言葉が届いたがのう。主様は会話スキルがないのではない。口下手なだけじゃ）

一緒に意味じゃないのか？サタン。

（儂も会話スキルがないかもしれんの・・・）

そうか・・・悲しいな・・・

（うむ・・・）

「わかつたわ。では其処のお一人にも自己紹介をお願いします」

お嬢様がなんとかチームの会話が途切れないと云々に言葉を繋げる。

本当にすみません・・・

「ティナです。アメリカさんやケイル君と組めるなんて嬉しいです。
よろしくお願ひします」

「其処の従者に負けた俺への嫌味か？名前も覚える価値のない女？」

「貴方・・・！そんな言い方・・・！」

お嬢様がケイルを睨みつけるが、ティナは真逆の反応をした。

「すみません・・・」

ティナは謝る。ケイルより実力が下なので、同じ貴族といってもやはりケイルには強く言えないのだろう。

この世界の縮図をみているようだ・・・

醜い世界制度だ・・・

「フン。言い返すことも出来ないのか？其処の女。ロイやセンター ハートはやはり例外ってことか。残念だ。俺はお前に価値を見いだすことは出来なさそうだ」

「あんた・・・いい加減に・・・！」

お嬢様が威圧感を出す。

俺もケイルの言い方にはかなりイラつときていた。

それに・・・ティナって女の子を見ると昔の自分を彷彿とさせるからな。

弱いから黙るしかない・・・俺に・・・

今も弱いままだがな。

だが・・・

立ち向かう勇氣くらいはある・・・！

「ケイル様。同じチームとしてそれはないのでは？」

「ハハツ。やっぱロイとセンター・ハートはおもしれえ。一年で俺に口答えできるのはお前たちくらいだ。お前達は本当におもしれえよ。また闘りたいなあ？ そうだろ？ センター・ハートとロイ？」

さつきから気づいて無かつたがケイルからの俺への呼び方が落ちこぼれから口音に変わっていた。実力が認められたからか？

だが、今はケイルから放たれた殺気に注意だ。

俺とお嬢様も殺氣をケイルにぶつける。

教室中がその殺気に注目していた。先生ですらだ。

そんな中。

「すみません！私の変な発売のせいでチームの輪を乱してしまって。自己紹介を続けませんか？お願いします」

懇願するように囁くティナ。

やはり俺に似ている・・・

ティナには頑張つて強くなつてもらいたい。

「チツ。興が削がれた。お前らとまた鬭えるとおもつたのになあ。
残念だあ。つまんねえから寝るか」

ケイルは寝てしました・・・

チームの雰囲気を壊すだけ壊して・・・

ただでさえ氣まずいのに・・・

「私。ケイル君だけは好きになれないわ

「同感です。お嬢様。彼は戦闘狂の氣がありますね」

「ええ。そうね。私も彼に変な期待されてるのよ・・・迷惑だわ・・・

・

「そうですね・・・

本当に迷惑だ。

「じゃあ最後の貴方。自己紹介お願いします」

「・・・セリア・・・よろしく」

「それだけ・・・? ですの・・・?」

お嬢様が聞く。

無視されていた。

このチーム。

一瞬でも平和かなと期待した俺が馬鹿だった。

全員危うい爆弾を持つてそうだ・・・（俺含むお嬢様含まない）

はあ。先が思いやられる。

第一十一話 チームの不仲（後書き）

サバイバル演習までが遠い・・・このチームでサバイバル演習を乗り切れるのかという所ですね。ケイルのティナの扱いが酷過ぎてテンションショーンが下がってしまった。だがpvが何時の間にかかなり多くなっていたので全体的にはティナのことを差し引いてもテンションは上がります。読んでくれたみなさん。ありがとうございます。

第一二三話 サタンとの修行は変わつてゐる（前書き）

500000PV突破したのでしょうか？見方がよくわからないのですが超えていたとしたら嬉しいです。

第一二三話 サタンとの修行は変わつてゐる

危うげなチーム交流も終わり、お嬢様と俺は学園から帰る。

「荷物持ち。あんたとは同じチームですかね」

「ああ、そうですね。本当に良かった。」

「はー。ナウでいざやこます」

「あんたに聞きたいんだけどあのチームビッグ思つ?」

俺らのチーム・・・

背中を押つ命のチーム・・・

それにしては・・・

(全然だめじやの。だめだめじや)

「ううだな。サタン。俺も同感だ。まあ、それをわかつてていたといひでどうにもならないが。

「お嬢様やケイル様がいるので、並の相手には負けないチームですが・・・団結力が皆無ですね。弱点を狙われたら案外あっけなく全滅してしまうかもしません。そんな評価ですかね」

俺の意見はこんな感じだ。

「私も同感よ。はあ・・・なんであんなチームに・・・」

「お嬢様。私はいつでもお嬢様の味方でい続けますから、安心してくださいね」

「あんたもあんたよ。正直、あんたも不安要素なのよ。力が未知数だし。まあ、いいわ。期待しておく。あんたは普通のやつとは違うみたいだし」

「普通とは違つ・・・?とは?」

「貴族の子供をやつてると、人の本質を見る力があがるのよ。あ

んたの本質を言葉で表すと・・・

得体がしれないといつ感じじね。それに、あんたの中に何かもつと別のそう、何か白くて黒い者がいるといつ感じ。言葉に上手く出来ないけどね」

「やうですか・・・」

お嬢様はまつりサタンに気付いているのか？貴族の本質を見る田・

す”）にな。お嬢様が特別なのか？

（いや、儂が例外なだけじゃ。やはり常人でも儂のことをつけつけを感じているのじゃう。儂は例外すぎるから有り余る存在感だけは消しきれんくての）

例外？

（前にも言つたじやうう、儂は例外じゃと。儂は時代が時代なら神と呼ばれたり、聖女と呼ばれたり、悪魔と呼ばれたりしたのじゃ）

神！？

凄いな・・・

（まあ、本物の神ではないが・・・扱う力が大き過ぎたからそう呼ばれる様になったの）

つまり、お前は俺の中にいてもうすす黒い気配を周りに放つているのか。

（まあ・・・そつなる・・・のう）

まあ、いいけどな。

（ほつ。怒られなくて良かつたぞ）

なんか言つたか？サタン？

（いやいや、ただ主様が寛大だと思つていただけじゃ）

変な奴だな・・・

俺はそんな事を思いながら帰路に着く。

センター・ハート家屋敷中庭

俺はいつものように修行していた。ラザイン様がいらしたが、一緒に修行してもらうのはやめてもらつた。サタンに指南してもらつたほうが早いからな。

強くなるのが。

凡人な俺でも分かる。サタンが俺に教えている事は特別なものばかり。

一般的の戦士じゃ使えないものばかりだ・・・

例えば・・・

これはサタンの技。相手の魔法の魔力と自分の魔力を同程度ぶつけ
て相殺させる技。発生が早く扱いやすいらしい。

と、こんな風に変わった技ばかり覚えさせられる。

まあ、便利なんだが。

サタンがパートナーになつてから大分助かっている。目に見えて強
くなつているのを感じるのは嬉しいしな。

それに、サタン曰く、

（主様は覚えが良いのう。天才じゃ。いや、天才どころではないの
う。ここまで来るともう、例外的な才能じゃ。）

俺がサタンに教えて貰つてている技を成功する度に言われる。

どうやら、反射の反射をはじめサタンの技は習得難易度が高いらし
い。

しかし、その技達を成功させるのを見てつい、漏らした言葉だそうだ。

俺はサタンに修行を手伝つて貰つてはいるが、強くなつてはいるのだろうか？

そんなことを修行中に考えるたび剣の素振りの速度が上がる。

どうじょりもなく不安だ。

俺自身の強さのこと、サバイバル演習のこと、チームのこと。
お嬢様に聞いた話ではサバイバル演習が行われる場所では魔物も放
たれるらしい。

サバイバル演習では相手チームのメンバーを一人倒す度にポイント
がもらえるようになつてはいるらしい。

ポイントはチーム共有。

魔物を倒してもポイントが手に入る。

ついでに、チームのメンバーが全滅するか最終日の終わりまでサバイバルは続くらしい。

つまり、チームにメンバーが一人でも残っていれば、サバイバルは続行される。

全滅かサバイバルの終了時のポイントがチームの点数。

成績とトーナメントに参加できるチームが分かるわけだ。

ついでに、サバイバル中は一定量のダメージを超えた後医務室に送られる魔法が生徒達にかけてあるので、死人はでない。

模擬戦の時と一緒にだ。

まあ、ルールはこんな所か。

不安は残るが・・・今の俺が出来る事といったら・・・

修行とサタンに助言をもらつ程度。

まあ、負けるわけにはいかない・・・

それよりもお嬢様には傷一つつけさせない事が重要か。

解決策は無いのに問題は山積みか。

来週。

サバイバル演習の二日間。

まあ、頑張るか。

どうやら俺だけはこの慌ただしい日常の中でたいして変わってないらしい。

第一十四話 誘い（前書き）

読んでくれた方々に私からの精一杯の感謝を。本当にありがとうございます！

第一十四話 誘い

結局、何も出来ずにサバイバル演習の日になってしまった・・・

今日から二日間、ポイントを稼ぐために魔物を倒したり、敵チームと戦わなくてはいけない。

ついでに、サバイバル演習にいく学生には事前に時計が支給されており、その時計が戦いを記録しているので、ポイントに虚偽の報告は出来ない。

つまり、戦いの記録が残るのでポイント制のサバイバル演習のルールにイカサマはないということだ。

よかつた・・・

そして、俺はその時計を身につけ学園の敷地内にある森？の前に来ていた。

「ここが、サバイバル演習が行われる大樹の森だ！別名は始まりの森。みんなしつかり全力を尽くせ！魔物もそんなに強くないから大丈夫な筈だ。お前らならやれる。頑張ってこいよ。じゃ各チーム五分ごとに森に入れ」

リーゼ先生が俺等を激励してくれる。

不安感は拭えないが。

そして、俺たちのチームはついに森へと入る。

大樹の森

「まずは一体何をしたら良いんでしょうかね？」

ティナがみんなに聞く。

「さあ、分からないわ。サバイバルなんて始めてだし・・・」

お嬢様が言つ。

「俺も知らねえなあ。まあ、とりあえずは魔物と他チームを倒せば良いんだろうが。余裕だろうが」

ケイルは樂觀視しているな。

「とりあえずは自分達の野営の場所と食料と水の確保ではないでしょつか？」

俺はそう進言する。

「はあ？ 野営だあ？ めんどくせえ。一田田で相手チームを全て全滅させりゃいいだろつが。やつせと殺りにいくぞ」

ケイル・・・お前はサバイバル舐めてるよな？

「そんな・・・無理です。今は様子を見るべきでは？」

「様子見だあ？ 俺はそんな事知ったこっちゃねえな。それに雑魚女に意見される筋合いもねえ」

そつぬわれティナも無言になる。

はあ・・・

重！霧囲氣重！普段暗い俺でさえこの霧囲氣は辛い。お嬢様もかなり困っている。

セリ亞は一言も喋らない。

「なんで結構どうさんだあ？ロイとセンターへーとがどうかぬつもつだ？」

あ、一応俺たちはチームのつもりなんだな。ケイルは、良かつた。足並みを合わせる氣はあるようだ。

「俺は準備は周到にしておいた方がいいと思います。即ち野喰と食料の確保をすべきだと思いますよ」

「私も同感ね。サバイバルなんてした事ないし、慎重に行きたいわ。荷物持ちと同じ意見なのは少し癪だけどね」

「オイオイ。センターへーと、ロイ。そんな事してたら口がくれちまうやで？」

「なら野喰する場所で籠城するのはどうじょうケイル様？」

「籠城だあ？」

「はい。野営する場所と食料とある程度の水を確保したら、野営地でずっと敵を待つという作戦です」

「敵が来なかつたらどうすんだ? ロイよお」

「そのためにあえて目立つように焚き火をします」

「焚き火だと?」

「そう焚き火です。キャンプファイアー並の焚き火。そんな事をしたら凄く目立ちます。

つまり、私たちはここにいるんだアピール出来る訳です。つまり敵から俺たちの所へよつてくる」

「カウンター狙いかあ?まあ良いんじゃねえか?」

「荷物持ちにしてはいい意見ね。少し危険な気もするけど・・・これなら私たちから動く必要もないし敵チームからの罠にかかる心配もない。私も賛成でいいわ」

「私もそれで良い」と思つます。何より危険が無せやつだし・・・」

ティナがつぶやく。

「ヤコアさんねどりっ..」

口クロ。

彼女は喋らないが頷いた。

とりあえずのチーム全員の意見の一一致。

こんな事を決めるだけなのになんでこんな殺伐としてるんだ?

はあ・・・

野営地ー

とつあえずチームの籠城の準備は出来たとこつておひや。

途中、ティナが川に流されたり、お嬢様とケイルで敵チームをいくつか壊滅させたりと色々あつたが、まあ些細な問題だ。

(些細な問題かの? それは?)

まあ、ポイントはチーム共有だから、戦闘に参加してなくてもポイントが入ってくるのは不思議な気分だったがな。

右手の時計にしつかりとポイントが記録されていた。

(やうこひ)とではないのじゃが・・・)

まあ、後は焚き火をして敵を待つだけ。燃やす木材も集めた。準備は万全だ。

「準備はよろしいですか? みなさん」

「私は大丈夫よ。荷物持ち」

「俺もだ」

「わ・・・私も大丈夫です」

セリアも頷いたか・・・?

まあ、多分頷いたのだろう。

「では始めますよ?この焚き火をしてからはおそらく敵が奇襲をしかけてくるでしょう。常に注意を頼みます」

「「分かりました(ああ)」」

俺が焚き火を始める。キャンプファイアー並の焚き火。

目立つ目立つ。

音もパチパチと薄暗い森で響く。

さて、籠城の始まりだ。籠城という表現は比喩だがな。

ガサガサ。

隠密行動とはほど遠い足音が俺らの方へ向かってくる。

敵チームか？

魔物か？

どちらにしても戦闘が始まると後僅かの様だ。

第一一十五話 甘や

俺たちは近づいてくる気配に息を殺す・・・

ガサガサ

森の木々を何かが横切りこちり側へくる。

「みんな！ 戦闘準備！」

お嬢様の言葉で俺は警戒を敵への強める。

「何は出よーが余裕だな」

ケイルが言つ。

そして、出てきたのは・・・

「おいつみんな！ 敵チームだ！」

敵チームのフルメンバーだった。

「あれはケイルにアメリアさん…」

「やべえ！ 一年トップクラスじゃねえか！」

「ケイル君とアメリアさんかあ… 分が悪いね…」

「！」は逃げたほうが良くなのか？』

「「「「（はい）」」」」

敵チームは一年トップクラスの一人を見て退却を選んだ様だ。

だが…

「そんな事誰が許すと思つてんだあ？ ああ？」

ケイル… 貴族なのにお前はチンピラか？

「何！早い！」

「敵に背を向けるなんてなあ。甘いぜー・ウインド・カッター！」

ケイルの拳から無数の風の刃が形成される。

「ぐう！痛えつ！」

「避けれなー」

今ので二人が強制医務室送りに。

ケイルの魔法が直撃したもんな。当然か。

「みんな！くそ！残つた俺たちだけでも逃げるぞ！」

「わかつた！」

「うん！」

残る敵チームの三人も急いで逃げようとしたが・・・

お嬢様の使い魔炎龍に行く手を阻まれる。

「アメリカさんの使い魔！」

「まぢーーー！」

「いっちも使い魔をー！」

そうして敵チームも妖精、獣の類のものを召喚する。だが・・・

「すまないわね。皆様方。だけど負けたくないのですやらせていた
だきます。炎龍！ブレス！」

「ギャオーーーーーーー！」

炎龍の口からブレスが放たれようとしている。

ケイルとの戦闘を思い出しても俺もビビる。

そして、炎龍のブレスが敵チームへ

当たる。

直撃だ。

使い魔」と。

あれはー

(強制医務室送りじやの)

ああ。 そうだなつ。

敵チーム悲鳴をあげてなかつたが、大丈夫だろつか？

戦闘はあつさり終わつたな。

ティナは一人をすこし怯え？ながら見ていた。

「ああ。くそつまんねえ戦いだ」

「確かに敵としては物足りなかつたですわね」

この二人が同じチームって・・・

パワーバランスおかしくね?

セリアもティナもそこまで弱くは無いし・・・

ああ。 どうか。だから俺がいるのか。

はあ・・・

ケイルに一応勝つただけどなあ・・・

弱く見られてんのかなあ。

なんかショック。

まあ、いいが。

とりあえずこの籠城作戦でわかつた事はケイルとお嬢様がいれば大抵のチームには勝てるということか。

俺としてはお嬢様には鬪つてほしくはないんだが・・・その辺をうるさく言つとお嬢様に嫌われそつだから、言わないでおくれ。

敵もお嬢様より弱い様だし。

焚き火のための木々を集める時に出会つた魔物も俺一人で倒せたし。

とりあえずは安心か？

「お疲れ様です。お嬢様。ケイル様」

「労いなんていらねえよ。敵も近くにいねえ様だし。俺は寝る。敵が来たら起こせ」

そう言つてケイルは簡易テントに・・・

まあ、いいか。

「私もとりあえずは休むわ」

「分かりました」

お嬢様ももう一つ設置してある簡易テントに。

セリアとティナもそのテントに入つていく。

みんな休む感じか?

簡易テントは二つしかない・・・

はあ・・・

夜はケイルと寝るのか・・・

嫌だ・・・

そうして、俺たちは順調に魔物、敵チームを倒しポイント稼いでいた。

ついでにケイルは寝相が悪かった。

おかげで寝不足だ。

まあ、サバイバルは順調に終わりそうだ。

最終日までそんな安心感の中で過ごした。

だが三日目。そう。サバイバル演習最終日のことである。

俺たちは遭遇してしまった。

惚けた心の中で。

どこか舐めていたサバイバルで。

白銀の美しい龍に。

とても美しい敵だった。

そして、殺し合いになつた。

これは、俺たちのサバイバル最終日のことである。

第一十六話 すぐ迎えにいくから（前書き）

お気に入りが九十件突破！嬉しい限りです。あと私の小説は前置きが長いかもせんが許して欲しいです。

第一十六話 すぐ迎えにいくか

サバイバル演習最終日。

この「籠城作戦」で寄つて来た敵チームや魔物はほぼお嬢様とケイルが撃退してくれていた。

ときたま、見逃した敵などは俺たちが倒している。

順調過ぎるほど俺たちのサバイバルは上手くいっていた。

誰も医務室送りにならず、ポイントもかなり貯まった。

もし、ここでチームが全滅したとしてもトーナメント入りは確実だ
る。

本当に全てが順調だった。

不自然過ぎるほどに。

そして、その不自然さを正す為にとつとつけて現れたような白銀の龍と俺たちは出会ってしまった。

安心感はあった。

だが油断はなかつた。

俺たちの警戒をかいくぐり現れた巨大な龍。

野営地にいた俺たちは咄嗟に戦闘態勢に入る。

「なんだあ？この『テカブツ』は？ずいぶんでけえ魔物だなあ？まあ、倒せばいいか」

ケイルが言つ。

「ええ、そうね……」

お嬢様も同意していいる様だ。

今思えば、俺たちはここからすぐに逃げるべきだったのかもしれない。

油断はしていなかつた。

だが驕っていた。慢心していた。

だから、正常な判断が出来ていなかつた。

だから、俺たちは選んでしまつた。

その白銀の龍と戦うことを。

ティナは白銀の龍の正体を知つていたといふのに・・・

「あれは・・・トリフロスです!なんでサバイバル演習を行つてゐる場所にこの魔物が・

・・・トリフロスは王国軍一個師団くらい引っ張り出してこなければ勝てないのに・・・危険です!皆さへん避難しまじょう!」

ティナが叫ぶ。

「つるせえぞ!雑魚女!戦闘に集中してんだ!」

ケイルも叫ぶ。

「先手はこいつらから打ちましょつ！ いけ！ ファイア・ブласт！」

お嬢様が白銀の龍トリフロスに向かい中級魔法を放つのが・・・

「効いていない・・・・の・・・・ですか？」

トリフロスに当たった中級魔法だがトリフロスの硬い龍の鱗の前には無効化されてしまっていた。

「センターハートー何してやがる！ 本気でやうねえといこつには負けぬぞ！」

「ひるせいですわね！ ケイルさん！ こちらも本気で魔法を行使しました！」

「チツ。まあいい。今度は俺の魔法をくらうともうせえ？ デカブツー！ くらえー！ ウイング・ストーム！」

だが・・・

トリフロスは無傷だった。

まるで美しいままだつた。

「オイオイ。中級魔法を無傷だあ？ とんだ化け物だー！ ははっ！ 楽しきなつてきやがつたあ！」

ケイルが戦闘狂になつつある。

「皆せん退避しましょー！ フロスは学生レベルじや勝てないんです！」

「こりこりひるせえなあ。雑魚女。やつと楽しめそつな敵と出合つたんだ。殺りなきゃ損だろー！」

「すみません。ティナさん。私も貴族としてのプライドがあるので。こんな龍に負ける訳にはいかないのですー！」

そうして、お嬢様とケイルは同時に使い魔を召喚する。

「お前あなたと協力するのは癪うきだが（です

が）ここは共闘きょうとうしてもうづぜ（もりこますわ）ー！」

二人の前に巨大な龍が現れた。一匹。トリフロスには劣る大きさだつたが、十分大きい。

俺とティナとセリアはただその莊厳な様子を見ている」としか出来なかつた。

そして、俺は思つていた。風龍と炎龍がでた以上トリフロスは負けるだろ?と。

「行きますわよ!炎龍!ブレスを!」

「ギャオ—————」

「こつちも全力のブレスをくらわせてやれ。いけ!風龍!」

「ギャオ—————」

一つの龍がブレスの準備を始める。

そんな中始めてトリフロスが攻撃動作に入った。

「ギャオ————！」

トリフロスもブレスの準備を始めている様だ。

まあ、多勢に無勢だ。トリフロスが勝てる訳もない。

戦闘は終わつたも同然――

（主様。悪いことは言わん。早くこの場から逃げるのじゃ）

どうしたんだ？ サタン？

（凄まじい衝撃がくる筈じや。あの龍達、特に白銀の方。あの魔力の量からしてあやつのブレスはやばい）

白銀の龍のブレスがやばい・・・？

お嬢様がブレスの直撃コースに・・・

お嬢様！！

（待て我が主様よー！待つのじゃー！）ぐら主様でもそいつに挑むのはまだ早いー）

お嬢様が！お嬢様が危険なんだろ？気にしてられない！

だが無情にも三体の龍のブレスの準備は終わってしまっていた。

「　「　「ギヤオ————！」

そうして風と火のブレスと白銀のブレスがぶつかりあう。

数秒ブレスは拮抗していたが、徐々に白銀のブレスが一つの龍のブレスをおし始めた。

「何ー！風龍のブレスが・・・押されて・・・

「炎龍も・・・ですわ・・・」

そうして一年トップクラスの一人の前に白銀のブレスが襲いかかる。

「お嬢様だけは…守つてみせる…」

俺はそのブレスに割つてはいる。

「氣仙花！」「い！」

青い刀身の剣を俺は出す。

「どこまで威力を軽減できるかわからないが
、不可視の斬撃！」

俺は白銀のブレスに向かい見えない斬撃を放
つ。

だが・・・

「くそつー…これでも…お嬢様！」

俺はお嬢様を押し倒してブレスから守ろうとする。

「ちょ、ちゅうとーに、荷物持ちー。」

「すいません。お嬢様。でもお嬢様だけは・・・」

不可視の斬撃でも相殺し切れなかつた白銀のブレスが俺たちを包みこんだ。

その瞬間激しい爆音がした。

「うわあ！ー！」

（主様。今から魔力のオーラを主様に纏わせダメージを軽減させる！待つておれ）

俺に魔力のオーラが纏わりつく。

なんとか・・・持ちこたえることが出来た。

「はあはあ・・・お嬢様・・・お嬢様！」

「うつ・・・」

「お嬢様！お嬢様！俺のせいで！」

「あんたのせいじゃないわ。私たちが戦う相手を見誤つただけ。それに、あんたは身を挺して私を守つてくれた。感謝してるわ。でもだからこそ・・・いつておくわ・・・逃げなさい。今の私たちじゃあの魔物には勝てないわ・・・」

お嬢様はそれだけ言って気絶してしまった。医務室に送られてないからまだ大丈夫な筈だ。

「お嬢様・・・くそ！」

お嬢様を安全と思われる場所まで運ぶ。

安全かは保証されてないが、サバイバルなのだ。確実に安全な場所などないだろう。

そういうえば、ケイルがいない・・・

医務室送りになつたのか！

まづいな・・・

それにお嬢様を守りきれなかつた・・・これが実戦なら・・・お嬢様は・・・お嬢様は！死んで・・・いたかもしれない・・・

ちくしょうー

ちくしょうー

油断はしていなかつた。ただ驕っていた。

今の自分達ならこの龍を倒せると。

(模擬戦の前にも言つたじやうひに。緊張感を忘れてはならぬと)

ああ・・・そうだったな・・・サタン・・・

今回の事は俺の慢心、チームの不仲が原因だ。

ティナの声に耳を傾けていれば・・・

後悔は勿きなー・・・

!

トリフロスが野営地の前に移動した！

まずい！

あそこにはセロニアとティナが！

行かなきゃー行かなければ！

（本当にここのかの？たいして仲は良くなーのじやうつ…ここにいる
ればどうあえずは全だと想つのじやが・・・）

ああ、そりかもな。

でも・・・でもー

「守りたいんだ・・・同じチームのメンバー
だから・・・それにお嬢様を傷つけた龍を俺は・・・俺は許せそう
にない！」

ここで立ち止まる訳にはいかない！

行くんだ！

プレスを受けて傷だらけの俺でも何か出来る筈だ！

（やれやれ主様も難儀な性格じゃの。まあそこが良いのじやが 儂
もあの龍を倒すため協力しよう）

ああ・・・頼む・・・

お前の助力なしじゃあの龍を倒せそうにない。

さて、行くか・・・

お嬢様・・・少しだけ待つていて下さい・・・

そうして俺は全てをかけてトロフロスと殺し合ひをすることになる。

第一十六話 すぐ迎えにいくから（後書き）

なぜ学生レベルじゃ太刀打ちできないトリフロスがサバイバル演習の森にいたかは近々明かしたいと思います。

第一十七話 共闘（前書き）

急なティナ視点からのスタート。

第一一十七話 共闘

トリフロスが一歩あたりへ向かってく。

私は怯えていた。

学年一年トッピクラスの一人でも勝てなかつた龍に。

「セニアさんー早く逃げましょ'つー。」

「無理・・・あの龍は動きが早い・・・逃げられない」

いつになくしゃべるセニア。

「でもー。」

「私達はどうせ死なないし、・・・それにロイ君の安否が分からない以上ここに残るのが得策・・・」

「それでも・・・トリフロスは怖いです・・・」

「それは・・・確かに・・・」

セリアとティナもやはり怯えている。だが一人とトリフロスの距離は近い。

そして、トリフロスが二人の目前に迫る。

「仕方ないです！もう闘うしかないですね！」

ティナは覚悟をきめた。

「私も闘う・・・」

セリアも闘う様だ。

「サバイバル初の実戦です・・・アメリカさんとケイル君に戦闘を任せていたのが仇になりました・・・」

「私も初戦闘・・・」

トリフロスが一人を認識した。トリフロスが一人に向かい腕を振り下ろす。

「格闘も出来るのー? まざいです・・・ ファイア・アロー!」

ティナがトリフロスの腕に初級魔法を放つが腕の勢いは止まらず、ティナの方へ振り下ろされた。

「わあ! 危なかつた・・・ もうすぐで当たるとこだった・・・」

だが、トリフロスはティナへの攻撃を躊躇した様だ。

「幸運・・・」

「確かに・・・」

ティナも頷く。

「今度は私の魔法・・・ アイス・シャワー!」

セリアが魔法行使するがトリフロスの鱗に弾かれた。

「私の・・・初級魔法も・・・駄目・・・」

セリアが落胆する。

「アメリカさんの中級魔法も使い魔も通用してなかつたよね・・・？トリフロスには。ということは私たちにトリフロスにダメージを与える手段がない！」

「・・・まずい」

そして二人は一つの結論を出す。

この龍には「勝てない」と。

そして二人に向かってトリフロスがブレスの準備を始める。

「あれをくらつても死なないと思つセリアさん？」

「多分・・・医務室行きになる筈」

そんな事を話している一人の前に・・・白銀のブレスが襲いかかろうとしていた。

ティナとセリアは衝撃に備え目をつむる。その瞬間――

「ティナ様！セリア様！サタン！魔力を俺の限界手前まで貸してくれ！」

走ってきた男が――

「くそっ！間に合え！ダーク・ナイト」

夜の名を冠する魔法を使した――

ティナとセリアは目をつむって衝撃に備えていたがいつこいつにちらへブレスが飛んでこない。

不思議に思い目を開けると・・・

幻想的な夜の闇が白銀のブレスを打ち消していた。

「辺りが暗い？これは魔法？さつきロイ君の声が聞こえてきた気がしたけど・・・」「

ティナが困惑する。

「これは何？・・・まさか空間支配魔法？・・・いつたい誰が？」

セリアも戸惑っている。

「間に合つて良かつたです・・・ティナ様・・・セリア様・・・」

「「ロイ君！」」

ティナとセリアが見た先にボロボロのロイが立っていた。

「はあはあ・・・俺の防御魔法を張らせていただきました。これであの龍のブレスは封じじることが出来ました・・・少しはこれでまともな戦闘に・・・」

ロイがボロボロになりながらも、言葉を紡ぐ。

「ロイ君……そんな傷で……ありがとう……」

ティナが感謝する。

「いえ、当たり前です」

「私からも……ありがとうございます」

セリアもお礼を言った。

「いえ、当たり前のことです。仲間を助けようとするのに理由はない
りません」

「私……あなたがケイル君を倒した時の模擬戦を見ていなかつた
んだけど……トリフロスのブレスも防ぐような魔法を見せられて
それが本当のことだつたんだあつてはじめて感じました。

ともかくです！ロイ君！この龍を倒すのに協力してください！あなたの力が必要なんです」

「これからそのつもりできました。俺からもティナ様にお願いします。セリア様にもお願いします。俺と共にあの龍を倒してくれませんか？」

「 もちろんです（・・・もちろん）」

やつして三対一の死闘が始まる。

第一十七話 共闘（後書き）

始めての主人公以外のキャラの視点。誤字脱字があつたら報告よろしくお願いします。といつかトリフロス戦引っ張りすぎですよね・。

第一十八話 無理やり借りるそその魔力（前書き）

主人公はボロボロです。

第一十八話 無理やり借りたその魔力

俺は巨大な龍と向かい合っていた。

「まずは、ティナ様。あの龍の情報を少しでも教えてくれませんか？」

ティナはケイルがあの龍と戦う前あの龍について何か言っていた。
何か有用な情報が聞けるかも……？

「分かりました！あの龍の名はトリフロス。セントラル王国軍の一個師団でも苦戦する
レベルの魔物です。正直な話、私たちには荷が重い相手です」

軍の部隊が相手で苦戦……？

そんな魔物が学生のサバイバル演習に？

わざわざ生徒たちに格安医務室送りツアーを開くつもりなのか？この学園は。

いくら死なないよつに安全装置の魔法があるとはいえ……

生徒たちに圧倒的な絶望でも与えたいのか？

しかし、どうにも引っかかるな。

あの学園を守るために俺を殺そつとした学園長が軍が相手でも苦戦するような魔物を不用意に使うだらうか？

それに学園長の性格からして、あんな龍を演習に使つとは思えない。

ならば、なぜあの龍が？

元々、この森に生息していたのか？いや、違つた。学園の敷地内のこの森にあんな魔物がいる訳がない・・・と思つ。

森の生態系が崩れるからな。

ではなぜ？

学園の警備を突破してあの龍がこの森に入れるか？

なぜ、軍が苦戦するレベルの魔物がここにいるかがやつぱり分から
ない。

まさか・・・誰かが人為的に？

考えすぎか？

冷静に考えてみるとあの龍についてはおかしいところだらけだ。

学園の警備はやつぱりあんな巨体では潜り抜けられないだろうし、
いつの間にか俺たちの前に現れたのも不自然といえば不自然だ。

(主様の思考を一つにまとめるとなれば「怪しい」という感じ
やな？)

ああ・・・怪しさだらけだ。

まあ、ティナの情報から読み取れることはこのくらいか・・・

戦闘の役にはたたないな・・・

今の俺の田畠は一つ。

まずは、あの龍・・・トロフロスだったか？そいつを倒すこと。

お嬢様のところまで行かれたら氣絶してこるお嬢様ではひとたまりもないからな。

お嬢様のためにもこいつは倒すべきだろ？

もう一つの田畠は、お嬢様の保護。

氣絶しているお嬢様を放置というのはヤバイ。他のチームや魔物に氣絶しているところをやられてしまうかもしれない。

この問題も重要だ。

つまり俺の今やらなければならぬことは・・・

(あの龍を・・・)

「倒す」とだー！」

そうして俺はトリフロスまで走る。

「私たちも援護しますー。」

「私も・・・」

ティナとセリアも援護してくれている。だが・・・

(トリフロスとやらにまつたく効いてなさ
そじゅのい)

ああ、そうだな。

初級魔法はビクともしないってことだな。

ならば・・・

「氣仙花! 来てくれー!」

俺は魔武器を呼ぶ。そして、魔力と氣力を同時に混ぜる。

「綺麗です・・・」

「美麗・・・」

ティナ達が何か言っているが、構つていてる暇はない。

俺はトリフロスの足元まで走り、トリフロスに切り込む。

「はあ！」

氣力と魔力を練りこんだ一撃だ。効いた・・・か？

「ギャオ――――！」

僅かだが傷を『えられた様だ。

(どうやら氣仙花の一撃は通用したようじゃの)

ああ。少しでも傷を負えられたんだ。光明は見えて来た。

「すい私たゞじや傷一つ負えられなかつたの」「・・・」

「確かに・・・」

ティナ達が言つ。

(主様！氣をつける！トロフロスが腕を振り下ろしてきてくれるだー！)

不味いな。あの巨体の一撃をどう防ぐ・・・？

仕方ない。

「不可視の斬撃！」

俺の魔武器のとつておきの一撃。これなり。

「ギャオ————！」

「不可視の斬撃なら腕を切断くらいしてくれると思つたが……思つたより鱗が硬いな。切り傷レベルの傷しか与えられないか……」

だが、それでも収穫か。

今の一撃でトリフロスもキレた様だ。

「ギャオ————！」

「くつ！なんて風圧だ！吹き飛ばされそうだ

！」

それに威圧感。

後ろの一人があの威圧感に気を失いそうになつていい。

「！」のままでは……

（あの二人が死ぬの。いや、医務室送りじゃったか？死ぬのではな

いのなら、とりあえず

は捨て置いたほうがよいんじゃないかの？）

「そういう訳にもいかない。あの一人は俺に協力してくれた。得体のしれないこの俺にな。だから・・・救えるのなら・・・救いたい

・・・お嬢様を守り通すことはできなかつたが・・・あの一人くらいは救つてませたい！」

（それが主様の心か。なら僕もその望みが叶うよう尽力しよう）

頼む！サタン！

俺は怒るトリフロスに突っ込む。

トリフロスがブレスを俺に向けて放つてくる。

「無駄だ！トリフロス！サタンと俺の魔法の防御がある限りブレスは効かない！」

白銀のブレスは深い闇に打ち消された。

ダーク・ナイトが展開されている今、ブレスは怖くない。

「ブレスは封じたこれで……」

倒せるか?二の龍を?

トリフロスはブレスが効かないと分かったのか……

その巨躯を活かし暴れ始めた。

「何!無理やり暴れ始めた!これは……」

(ブレスよりも厄介じゃのう。攻撃範囲が広すぎるしの)

これでは一人も巻き込まれるー!

不味い!

無理やりにでも止めてやる!

(正気か！主様！あんな状態のトリフロスに突っ込んだら、ひとりもないぞ！)

でも、俺が行くしかないんだよ！

この二人を助けるためには・・・

だから・・・

行つてやる！

俺は再びトリフロスに向かつて走りだす。無数の衝撃波に歓迎される。

「ぐつー！」

(主様！)

俺は氣仙花を乱舞させる。

「少しでも・・・あの二人を傷つけさせないために・・・」

(つー主様！もうよい！主様だけならまだこの攻撃から抜けられる
！一人は置いていくの
じゃ！)

それは・・・出来ない！

俺を少しでも信じてくれた二人を俺は見捨てられない！

絶対に助けてみせる！

今、守りたい人を守れないでいつ守るんだ！

だが俺はトリフロスに押され始めていた。

「ちくしょおおおーお嬢様に続いてこの二人
も守れないのかよーくそーーー！」

くそ！

くそ！

時折、不可視の斬撃も繰り出しつづけるところに・・・

トリフロスは止まらない。

俺の全身が打撲だらけになる。

元々、傷だらけだった俺にはかなりの痛手だ。

俺は吹き飛ばされてしまう。

「しまった！」

そして、龍に攻撃は容赦なく一人を襲つた一

そうして一人は消えた。どうやら医務室送りになつた様だ。

こんな呆気なく・・・

もしこれが実戦だつたら一人は死んでいた。

お嬢様にしてもそうだ。

戦場で気絶したまま放置なんてありえない。

「また、守れなかつたのか？俺は。俺の側にいた二人すら傷つけさせてしまつたのか？それじや何のために強くなつたんだ？俺は、俺はー」

(主様！自分を責めるな！)

「くそ・・・・くそ・・・・俺は・・・・」

(主様！しつかりするのじや！主様！)

一人を吹き飛ばしたトリフロスは俺に眼を向ける。

「そういえば、何でトリフロスの攻撃を深く受けた俺が医務室送りになつていしないんだ？」

（それは儂が今まで主様に魔力の供給を利用して主様に薄く魔力防御をしていたからじゃ）

「ああ・・・魔力の供給か・・・俺の防御のために使つていたのか・・・」

「そんなもの俺にはいらないのに。」

「ならサタン。頼みがある。今まで俺の防御に使つていた魔力を全て攻撃に回してくれ！」

（それは無茶じゃ！主様に攻撃するために魔力を与えようとも思つたが、主様は傷だらけだった。だから防御に魔力を回したというのに。攻撃に魔力を回したら、主様に負荷がかかり過ぎる。駄目じゃ。あの荒技は今はためせん）

「俺は負けれないと誓つたから。だから勝たなきやいけないんだ。守りたいから。まあ、今の俺は大事な仲間を守り損ねた力

スだけどな

でもな・・・

守れなかつたからこそな・・・

お嬢様。ティナ。セリア。それに・・・ケイル。

この龍に傷だらけにされた四人のためにも・・・

俺は・・・

この龍に負けられない！

その瞬間、ロイから多大な魔力が溢れる。

(なつ！儂が許可していないのに！魔力よ止まれ！・・・止まらな
いじやと！何故じゃ！儂の魔力が主様に無理やり・・・これでは主
様が・・・)

俺はサタンから無理やり魔力を奪つ。

悪いがお前の魔力を無理やり使わせてもらひだれ！サタン！

（辞めるのじやー主様ー今の主様の傷では儂の魔力に耐えられんー）

それでも構わない。

この龍を倒せるのな。

（なんという勝利への意思・・・主様から主様の氣力が溢れておる・

・・この勝利への貪欲さが儂の魔力を奪つた原因かの？主様のボテンシャルが未知数すぎるの・・・だが、だからこそこの愛しい人を失う訳には・・・！）

俺はサタンに制止を聞かず、トリフロスに挑む。

といふか、サタンの声がもう聞こえてない。

もつ俺の体が限界を訴えている。

「こべやー・トロフロスへ。さあまでの俺と戻つなよ。」

だが、強がつてやる。

「ギャオ———！」

トロフロスが腕を振り下ろす。ロイは魔法による身体強化でそれを躱す。

身体強化か・・・案外上手くいったな。

始めてやるんだが。

「お前の攻撃はこの程度か?なら今度はこいつから行かせてもらひやうぞ」

また強がる。責めて態度くらいい傲慢じゃないとな。

俺は弱いから・・・

そう言つて俺はトリフロスに両手を突き出す。

「俺はもうキレてんだ。トリフロス。悪いがこちらも死ぬ氣で魔法を使わせて貰う。いくぞ！」

そして、ロイの両手から魔力の奔流が出る。莫大な魔力がトリフロスに襲いかかる。

「自分でやつておいて思うが、サタンの魔力が多すぎる・・・この魔力を支えきれるのか・・・？」

俺はただ魔力の激流を出しているだけ。反射の反射カウンター・カウンターと同じ原理だ。

「ギャオ――――！」

「悪いな。トリフロス。これは魔法でもなんでもない。ただサタンの莫大な魔力を使って放つ魔力の塊だ。だがこの圧倒的な魔力の激流。お前には耐えられるか？」

これが、俺の全力の攻撃。

サタンが協力的ではないから、俺が思いついた攻撃はこれだけ。

まあ、言い訳染めているが。

そうして、トリフロスは一

俺の魔力に吹き飛ばされー

倒れ、動かなくなつた。

「倒したか？」

ボロボロの俺はただ一人呟く。

「魔物を倒したのに時計のポイントに加算がない？まさか、トリフロスがまだーいや確かに死んでいるな。ということは、やはり一学園側が把握していない魔物という事か」

ふう。しかしある限界だ。

いや、もう限界といつもとつての昔に俺の限界は超えていた。

これ以上は何も考えられない。

「俺も未熟だなあ・・・」

あまりにも未熟だ。

そうだ魔力をサタンに返すか。

サタン？

（死ななかつたから良かつたものを・・・主様の馬鹿者！）

ああ。無理やり魔力を使わせてもらつたからな。何故お前の魔力が
使えたのかはわからないが・・・

すまなかつたな。サタン。どうしてもあの龍に勝ちたかつ・・・う
つ！

（主様！大丈夫か！主様よ！）

また心配をかけてしまった。サタン。俺は大丈夫だ。ただ意識が不十分なだけで・・・

(それは大丈夫じゃないじゃろー何故こんなにも主様は傷ついているのに医務室に送られないのじゃ！)

無駄に頑丈だから・・・な・・・

それに・・・まだ・・・

まだお嬢様を保護していない。

お嬢様をお迎えに行かなければ・・・

大切な目的がある限り俺は歩き続けるんだよ。

第一十八話 無理やり借りるやその魔力（後書き）

誤字脱字半端なかつたので修正しました。

第一十九話 神から教わる反逆の魔法（前書き）

この話、私が後から読んで見たら所謂俺ＴＵＥＥＥＥＥの要素が入つていました。このような表現は不快ですかね？皆様の反応が見たいところです。うーん・・・不安です。

第一十九話 神から教わる反逆の魔法

お嬢様のもとへ・・・早く・・・

そう思い走ろうとするが、俺の足はなかなか思い通りに動いてくれそうにない。

ティナとセリアを守れなかつた分せめてお嬢様だけは・・・

そう思うのは一人に失礼だろうか？

あの二人は今頃、俺を恨んでいるだろうな。

無力な俺をきつと恨んでいる。

「ははっ」

まあ、仕方ない。そのくらいの評価が俺にはふさわしい。あの二人を守れなかつたのは事実なのだから。

だが・・・願わくば・・・

少しでもいいから・・・俺が全力で君たちを助けようとした事を覚

えていてほしいな。

ほんの少しでいいから。やつ思つのは、我儘か。

お嬢様がいる、森の奥までが遠い。

お嬢様を森の奥に隠した時はたいした距離に感じなかつたんだが・・・

(それは主様の体が悲鳴をあげてゐるからじやうづ。それにトリフォロスとの戦闘中は儂の声も聞こえて無かつたよじりやしの)

今も大分聞こえ辛いな。念話で話すことすら億劫だ。

(儂はしばらく静かにするかの。儂を呼びたくなつたらまた念話しての。主様)

ああ・・・

サタンとの念話を終えた俺は歩く。途中、森の木々に邪魔されながらも歩く。

本当に俺の体は情けないな。歩くのが精一杯なんて。

無力な証だ。また体を鍛え直す必要があるな。

まだ着かないのか・・・お嬢様は大丈夫だろつか?・・・

他のチームや魔物にやられてなければいいが……

もつ少しでお嬢様のところまで着く。

お嬢様どつか、無事でいてください……！

弱い俺は神に祈ることくらいしか出来ない。結局、神頼みか……
神か。サタンにでも祈るとするか……

でも、あんな金髪の美女に併んでも「利益はなぞうだ……

はあ……自嘲気味の考えしか浮かんでこない。どうでもいいな……

今はそんなことより、お嬢様の元へ――

* * * * *

森の奥――

やつと、森の奥に着いた。お嬢様の隠した場所。

俺はお嬢様を隠した場所へ一刻も早く向かおつとする。

そして、お嬢様の氣絶している姿を見つけ安堵するが……

「どうやら、お嬢様の他にも人がいる様だ。

無数の人影がお嬢様をとり囲んでいた。俺は森の木々に身を潜める。

不味いな・・・きっと敵チームだ。しかもここまで生き残っているということはかなり強いチームだろう。

しかも五人全員生き残っている・・・

男三人に女二人。

この後、あいつ等はどう動く・・・?

「ねえ。この人、アメリカさんよね? どうしてこんなところで気絶を・・・?」

敵チームの女子が話す。

「知らないな。しかし、あのアメリカさんが氣絶なんて・・・それほどの敵が?」

「大方、あの落ちこぼれが足を引っ張たんじゃないのか?」

「ああ、先日あのケイルに勝つたとかいう奴か?・・・しかしケイルに勝ったんだからそれなりの実力を持っているんじゃないかな?」

「どうだかな。ケイルも最近じゃよく分からないし・・・それにアメリカさんがここで一人気絶しているということは、アメリカさんのチームはアメリカさん以外全滅したんだろう? なら、ケイルもたいしたことは無いんじゃないかな?」

「やうかもな・・・それよりこゝは、危ない。早く立ち去るが」

「何故です？」

「アメリカさんを倒した奴がまだこゝの辺にいるかもしれないからだよ」

「なるほど。確かに危ないです・・・」

頼む。こゝのまま立ち去ってくれ・・・

「なら、アメリカさんはどうある?」

敵チームの一人がチームのリーダーらしき男に尋ねる。

「アメリカさんの仲間もいない様ですし・・・少し卑劣ですが・・・私たちのポイントのために・・・」

辞めろ・・・辞めてくれ!

「彼女には済えてもういいまじょう・・・」

「ああ、分かった。みんなもそれでいいか?」

「「「はい(うん)」「」」

チームの一人がお嬢様に初級魔法を放とうとしている。

その光景をみて思わず俺は・・・

「ふざけるな・・・ふざけるな！」

俺は一人、敵チームに飛び込んだ。

「敵！？誰！？」

「貴方は確か・・・ロイ君？」

「ロイ？あの落ちこぼれのことか？」

「アメリカさんがボロボロのも貴方にせいなんでしょうな・・・
彼女も可哀想に・・・貴方なんかと同じチームになつたせいで私たちに倒されるんですから」

「辞めろ！辞めてくれ！」

俺は叫ぶ。

「おいおい。平民。貴族には敬語を使えよ？殺すぞ？」

「俺の頭なら何度も下げる。だから・・・お嬢様だけは見逃してくれ・・・！」

俺は敵チームに向かつて低頭する。

「敬語を使えって言つてんだよー落ちこぼれー！」

「かはつー」

俺は敵チームの一人に蹴られた。

「やつわざじやないか？」

「落ちつけぼれにはあれくらいでいいんだよ。実力もなによいじやーの世界じゃやつていけないからな」

「わづかもしれませんね」

「じゃあ悪いがアメリカさん。悪いが、医務室へ送らせてもらひつよ？」

「お前たちはびっくりそんなんに酷こいつが出来るー死絶しているお嬢様を無理やり「それ
はこの世界の仕組みさ」何？」

「この世界はどうでも実力主義なんだ。弱肉強食なんだよ。だから成績のためなら非人道的なことも出来る。それにサバイバルなんだよ?仕方ないだろ?」

「Jリーグの学生は割り切っているのよ?落ちつけぼれさん

「お前等・・・」

腐ってる・・・Jリーグの学生はみんなこんな考え方なのか?

「少し邪魔されたが・・・アメリカさんを倒すとするか・・・」

「そんな」とはやせるか!」

「おや? 落ちこぼれ君? 反抗するのか? まあ、君も医務室送りにせんでもいいつよ」

そういうて、一時的に敵チーム全員が俺へと武器を向ける。

「一応、君はあのケイルを倒したと聞いたからね。チーム全員であたらせてもらひ」

「お前等みたいな奴らが集まつたところで負ける気はしないな」

「! なんだと?」

「お前等を貴族とはもう思っていない！他の貴族の学生は知らないが・・・とにかくお前等を貴族とは俺は認めない！成績の為にこんなに傷ついている人をさらに傷つけるなんてそんなことをするやつはただの下衆だ！」

「いつてくれたな・・・。」の落ちこぼれが！

敵チームが俺へと攻撃準備を始める。

五人か・・・だが勝つしかない！

まずは・・・神頼みで悪いが・・・

サタン！

（主様！）

さつきまでの話は聞いていたな？

（あの下種たちを倒せばいいのじゃろ？それより主様の体は大丈夫かの？そこが心配じや）

正直やばいが・・・こいつ等にだけは負けられない！

どんな方法を使ってもセンターハートの縁者に傷をつけようとしたことを後悔させてやる！

「未だ俺が貴族と認めたのは、一人のみ。俺はその人達のための矛となり盾となるつ

俺は自分を奮い立たす。

「いくら強がつてもボロボロのお前じや俺たちの魔法は防げないだろ？ほら喰らえ！」

「 「 「 ファイヤー・アロー！」」

「 「 ウィンド・カッター！」」

風と火の魔法が飛んでくる。回避は出来そうにもない・・・

なら、俺がする事はまずは防御。この魔法を防ぎきれる防御を。

(ならあれがベストじゃろ？主様)

多分考えてる」とは同じだな。サタン。

「ダーク・ナイト！」

そうして、俺は「夜」の名を持つ魔法を行使する。

その瞬間、この森一帯に闇が広がる。

「何だこの魔法は！？」

「空間を支配しているのー?」

「まさか落ちこぼれが・・・やつたのか?」

「分かりませんが・・・とにかく今はロイ君を倒しま・・・え?」

「どうしたー?」

「あ・・・あれ見て」

「ん?な・・・何?」

貴族様たちが見ていたのは俺が飛んできた全ての魔法を闇で防御した瞬間だった。

「俺たちの魔法が・・・何で・・・」

「そういえば・・・聞いたことがあります・・・模擬戦の時間一人の少年が闇を操って敵の魔法を次々防御していたという噂を・・・」

「それが・・・あいつ・・・？」

「臆するなみんな！相手はあの落ちこぼれだ！」この魔法だってあいつに魔法をうち続けければいつかは解ける筈だ！」

「そ・・・そりですね！」

「なら僕のとつておきの魔法を・・・アイス・フローズン！」

「それは中級魔法！？凄いですね！？」

「ああ。流石だ。あれならあの闇も防げないだらつ。俺等も続くぞ！」

「「ファイヤ・アロー！」」

「「ウインド・カッター！」」

「これで終わつたな」

「そうですね。中級魔法に初級魔法の包囲網。防げる術はない筈で

す・・・

「それはどうかな？」

俺は笑いながら言つ。

そして闇と氷と風と火がぶつかる。だが全てが闇に吸い込まれるようになってしまった。

「何・・・」

「僕の中級魔法まで・・・」

「無駄なんだよ。お前らのような奴に突破される魔法じゃないんだよ。俺がもつとも信頼する奴が教えてくれた守るために魔法だからな」

「いいから先お前らの魔法は俺には通用しない」

俺は言つ。

「だがまだ魔武器や使い魔が・・・」

「俺がそんな事を許す筈がないだろ?」

「一。」

敵チームは魔法を俺に防がれ俺にたいしてはまだいる。背景も夜だから怖さが増すんじやないか?

だから「…………」少しのハッタリを込めて言わせてもらひ。

「お嬢様を傷つけようとした奴を俺がそんなに生かしておへ必要はないよな?」

俺はあこづらに近づく。闇を纏つてこるからか俺からは異形な雰囲気が出でてる。

「おおー落ちぼれー俺たちに近寄るなー」

(愉快じゃのう。主様。あつら主様に恐怖してくるみたいじゃぞ
?自分の理解を超えた事が起きて混乱していくようぢ)

「自分の理解を超えた事が怖いか？これから何が起こるか分からないのが怖いか？だがいくら恐怖していても、俺はお前等を許す気はない。これからお前等には自分の範疇を超えた魔法を喰らつてもらう

う

「何・・・」

徐々に声が小さくなる敵。

サタン。こいつ等を吹き飛ばせる魔法を教えてくれないか？

(いまの主様に魔力を貸せるか？それならば出来る魔法なんじやが・・・)

俺の事は構うな。今はこいつ等に地獄を見せたい。

自分の無力さと、この永遠の地獄を。

(うむ。わかったの。今から儂が教える魔法の名は——「ダーク・リベリオン」)

闇の反逆？

（うむ。ダーク・ナイトとは真逆の魔法での。相手の魔力を吸い取りながら大きくなる魔法なんじや。魔法ビリの戦いではほぼ無敗の魔法じや）

だがそれじゃあいつ等に与えるダメージは少くないか？

（安心せい。ダーク・リベリオンは相手の体内魔力ですら吸い取ろうとする。つまりは相手の体から無理やり魔法を吸い取ろうとするのじや）

それはー

（そしてどんどん闇が大きくなるとこつ魔法じや）

ひどいな。

（だがやるんじやひつ・）

ああ。ここ等には味わつてもうつ。敗北の苦痛を。

「サタン・・・俺に魔力を」

(うむー)

「お、落ちこぼれから魔力のオーラがー」

「何を・・・何をする気だー!」

「俺の最強の魔法を放つだけだ」

俺は両手を構える。手掌で放つ魔法だから、杖よりは安定性がない
な。

まあ、いいか。

「くそー!みんな惚けるなー!俺等も迎えうつぞー!」

反抗するのか?まあいいが。だがダーク・リベリオンとはお前等が
魔力をこの魔法にぶつける度にパワーを増すんだぞ?

無知とは恐ろしいな。

「アイス・フローズン！」

「「ファイヤ・アローーーー！」」

「「ウイング・カッターーーー！」」

そして、こちらは、ただ唱える。反逆の名を持つ闇の魔法を。

「お前等には負けてもらひーーーいくぞーーー！ダーク・リベリオンーーー！」

しばらく時間がたつた。この森の奥にいるのは俺とお嬢様にだけになっていた。

まだ、ダーク・リベリオンの闇の斬新が残っている。

やり過ぎたか・・・

サタンから魔力をかりて大分辛い。もう無理だ。何もかもが。

だが、俺はお嬢様の側までのそりと近づく。

そして、サバイバル演習終了時間まで、お嬢様のそばでただ、佇む。

その姿は姫を守る騎士の様であった。

ロイはサバイバル演習終了に鐘とともに気絶した。

第一十九話 神から教わる反逆の魔法（後書き）

誤字脱字がやばいこの「こふ。大事な部分での誤字脱字は避けたいです。もし皆様が読んでいて不快な誤字脱字がありましたら私に報告してください。全力で直します。ある一人の友人のおかげで誤字に気づきました。ありがとうございます。

第三十話 近づいたら殺す（前書き）

ティナやセリアに心情描写が少ないのは私の独断です。だって急に落ちこぼれが強かつたという事実をみて、普通なら困惑しちゃうんですよね。ついでにこの話はトリフロス戦での話です。

第三十話 近づいたら殺す

「何だ？」

白いカーテン。白いベッド。白だらけの部屋。清潔感が溢れている。

・・・俺は前にもここにきた事がある。

医務室か。

確か敵チームにキレた俺は敬語も忘れて・・・

不敬罪か？あの時は俺も冷静に頭が回らなかつたからな・・・

ヤバイか？

いや、サバイバル演習なんだ。死ぬ氣でやらなきゃいけない演習の
等。実戦では立場など
関係ない。

生きるか死ぬかだ。

そんなサバイバル演習に参加しているのなら、敬語を使わないくらいの些細なことでは咎められないか？

まあ、分からぬ。

どう転ぶかな・・・センター・ハート家に迷惑がかからなければいいんだが・・・

俺は医務室を見渡してみる。医務室全体を見渡しても、お嬢様やケイルは居ない。

いや、人もあまり居ない。居るのは先生のみ。医務室の先生だろう。

「先生。俺は・・・」

「あら、やつと？俺はどの位気絶していたのですか？」

「やつと？俺はどの位気絶していたのですか？」

「三口ね」

「三日一々。」

俺は三日も寝ていたのか？サバイバル演習からも三日が経過しているのか・・・

「今日は学園長が貴方を呼んでいるなんて事はないし、すぐ帰つてもいいわよ」

「わかりました。先生」

俺はそう答えると医務室を出ようとする。

「もういいえ・・・先生。今は何時になりますか？」

「もう夜近いわね」

「ありがとうございます」

今から授業だつたら、流石に嫌だ。取り合えずすぐ帰つてもいいって事か。

俺は医務室を出た。

学園の廊下

今、俺は学園を歩いている。まあ、ただ帰るために玄関に向かっているだけだが。

それにしても、学園に残っている生徒が俺をちらほらと見てくるのは気のせいかな？

(いや、気のせいじゃないじゃろうな。儂も視線を感じる。好奇の目線・・・探りの目線・・・様々な目線を感じるのう)

何故、俺を見ているんだこいつ等は？

(おそらく、主様が倒したあの敵チームの五人が主様の事を吹聴したんじゃないのか？)

まじか・・・俺が寝ている間に・・・

(まあ、推測じゃがの)

そうか。まあ、サバイバル演習でケイルやお嬢様を差し置いて生き残つたのが俺なんだ。注目はされるだろ? う。

まあ、お嬢様は生き残つたが。

ほほ、氣絶させてしまつたからな・・・

思いだすのも嫌になる・・・センターハート家の者を傷つけさせることなんて・・・

(主様にとつてセンターハート家とやらは大きな存在なんじやの?)

当たり前だ。センター・ハート家は俺の全てを変えてくれた。俺に人並みの生活を送れる環境を与えてくれ、ましてやお嬢様の従者としてとはいって、学園にも通えるんだぞ? 感謝してもしたりないな。

とにかく、恩義があるんだよ・・・

(忠誠とやらの?)

そつかもな・・・俺はセンター・ハート家のためだつたり何でも出来る・・・

命だつて差し出してみせよ。

(「冗談かの?」)

本気に決まつてるだろ。

(まあ、セントーハート家とやらが主様に命を差し出してくれなんていう巫山戯た命令を出すなら儂がどんな手段を使ってもセンターハート家を壊滅させるがの)

〔冗談だろ?〕

(本気に決まつてるじゃろ。つまり儂は主様にそれ程主様を大切に思つているのじゃよ。主様の為なら命だつて差し出してみせるのじや)

忠誠か?

(かもの。主様とはそんな堅苦しい関係になりたくないんじゃが。
・
・)

ありがとな。サタン。でも俺はお前に命を差し出せなんて言わない
よ。

俺はお前も守りたいからな。

(ふふっ。主様は相変わらず面白いのう。長い人生の中で守るなん
て言われたのは初めてじゃよ。儂は・・・強かつたからの)

そうか・・・俺はお前より弱いかもしない・・・だが必ず守つて
やる。

お前はもう俺の中ではかなり重要な存在なんだぜ?サタン。

(あ・・・ありがとつの・・・主様・・・儂も主様を守りつ。だか
ら、早速忠告をさせて貰つて。さつきから不愉快な視線が主様を見て
おひ・・・注意するのじや・・・)

不愉快な視線?

嫌な予感がするな・・・

早く帰るに限る・・・

俺はそう思い、屋敷へと直ぐ帰った。

一方、学園長室ー

私は今、学園に入ったイレギュラーについての報告を見ている。

その名もトリフォロス・・・

王国軍の一個師団でもかなり辛い闘いになるだらう、このトリフォロスが学園に侵入してしまった。

しかも一年生のサバイバル演習に。

完全に学園長たる私の落ち度だ・・・

その報告を聞いた時は一年生全員に全滅を覚悟したが……

次の報告にはもつと驚いた。トリフロスが倒されたというのだ。

報告によれば倒したのはあのロイ君らしい……彼は何者なのだろうか？

私でもトリフロスとは激戦になるところ……

彼はもうギルドや軍の即戦力になれるんじゃないでしょうか……

まあ、その事は置いときましょ。

今、私がしている事は一つ。まずはトリフロスが学園にどうやって入ったのかといつ事の調査。

後はロイ君の調査。

今は手軽?なロイ君の調査をしています。

ロイ君の調査に当たつて感知魔法が得意なファインス先生に協力を

仰いでいます。

「では、ここからロイ・カーレス君の調査をお願いします。ファインネス先生」

「わかりました。学園長」

本当は生徒を探つたり裏切るような真似はしたくないのですが・・・
ロイ君・・・貴方は未知数すぎる・・・

私はファインネス先生の感知魔法を見ていた。相変わらず見事だ。彼にかかるれば人物の調査など直ぐ終わる。

私は期待しながら調査の結果を待っていたが――
ファインネス先生に異変が起つた。

「なつ！何だこれは！」

「どうしたんですか？ファインネス先生？」

「暗い・・・闇・・・美しい悪魔・・・近づくな・・・殺す・・・」

「大丈夫ですか！ファイネス先生！」

ファイネス先生の様子がおかしい。それにファイネス先生の感知魔法が黒く染まっている。

まさかファイネス先生の感知魔法が逆探知されているのですか！？

「辞めろ・・・辞めてくれ・・・俺をそんな目で見るな・・・辞めろおー悪魔があ！」

ファイネス先生がまさに発狂している。何が起こっている？

ファイネス先生が何故こんな事に？

いや、まずはファイネス先生を助けなければ！

ファイネス先生の感知魔法を私の魔力でぶち壊す。

「ぐわつー」

無理やりだがこれで取り合えずは相手とのリンクは切れた筈……

「ファインス先生大丈夫ですか？」

「あ……あ……ええ……大丈夫です……」

「何が起きたのか教えてくれませんか?」

「わ……わかりました。ロイ・カーレスの調査をしようと思い、ロイ・カーレスを感じしようとしたり……邪魔されたのです……」

「邪魔?誰にですか?」

「誰に?あれは人なのか?金髪の悪魔……とにかく、悪魔が私に言って……きたのです」

「何とですか?」

「主様に手を出すのなら、滅ぼすと、」

「悪魔ですか……とても信じられませんね……ロイ君はその悪魔と繋がりが？」

「それは……わかりませんが……俺としてはもうロイ・カーレスには関わりたくないですね。すみません。学園長。私はもうこの調査降りさせていただきます」

「貴方にそこまで言わせますか……」

「ええ……こちらも命は惜しいので。それにもしロイ・カーレスがあの悪魔と繋がりがあるのなら、ますますロイ・カーレスとは関わりたくないですね」

「どういつ事ですか？」

「あの悪魔と対等に話せる人間がまともな訳ないじゃないでしょ？。
それほど……あの悪魔は……」

「わ……わかりました……」協力ありがとうございました。ファイネス先生

「では、学園長。私から最後の忠告をさせていただきます。ロイ・

カーレスには関わるな。これが最善です。では「

そう言つてファイネス先生は学園長室から出た・・・

ロイ君・・・か・・・

私は彼をどう扱えば・・・

彼には悪魔でも憑いているのでしょうか？

調査をしてますます彼が分からなく・・・

取り合えず、ファイネス先生の言つとおり様子を見ましょ、か。
幸い、彼は人格は温厚な様ですし。

彼は何者何でしょうか？はあ・・・

第三十話 近づいたら殺す（後書き）

不憫な学園長。ただそれだけです。しかし、学園長にも再びロイへの疑念が・・・

第三十一話 プライド（前書き）

前の話でサタンの忠義を書いていれば……いいな。あと誤字脱字報告よろしくお願ひします。よければ……感想も……調子乗りました。すいません。

第三十一話 プライド

(一仕事終わったの。虫けら排除完了アージャ)

一仕事?何かしてたのか?サタン?

(何でもないの。ふふふ)

なんか機嫌がいいな。まあ、「仕事」とやらがお前の為になつたんなら俺も嬉しいよ。

(今考えると仕事という表現は間違いじゃの。儂はただ忠義と主様のために……)

なんか言つたか?サタン。

(な、何でもないぞ)

どうか。

(今はただこの方をお守りしなければ……の方に危険が近づ

かないよつて……（）

そう誓うサタンだった。

センター・ハート家、屋敷一

サタンと話をしているうちに屋敷に着いた。お嬢様とはサバイバル演習から会っていない。学園にお嬢様は居なかつたから屋敷にいると思うが、サバイバル演習の傷は完治しているだろうか？

ご無事を願う。まあ、三日もあれば学園の最先端医療のおかげで大抵の傷や病気は治るんだが。

ついでに俺は、傷はすぐ治つたんだが、疲労がなかなか抜けず三日間眠りっぱなしにならしく。

ともかく、俺は一回お嬢様の無事を確認したかった。

俺は屋敷じゅうを歩き回る。

そして見つけた。

センター・ハート家の書庫で。

黒髪の似合つ、俺が生涯守ると誓つた女性を。

お嬢様を。

ひとまず良かつた。何か声をかけたいが、向こうもこきなり話しかけられたら困るだろ？

お嬢様が無事ならそれでいいか。

そう思い俺は書庫から出ようとするがー

「…・・・荷物持ちー！」

なんとお嬢様から声を掛けられた。本でも運んで欲しいのだろうか？

「何でじょつか？お嬢様」

俺はひとまずお嬢様に向き合つ。相変わらず美しい人だ。夜に特徴的な黒髪がなびく。

「あなたに伝えたい」とあるの」

伝えたいこと？何だろうか？

「私はね。荷物持ち。今まで人に守られた事なんて無かつた。努力だけで全てをこなせると思っていたの」

お嬢様の独白が書庫に響く。

「それが私なりのプライドだった。だから私は努力し続けたし、それに比例して学園での成績も上がつていったの」

俺は無言で聞き入る。

「だから私は自分の事を誇らしく思っていた。今思えば、自意識の過剰ーまあ、それは置いとくとして、とにかく私は、私はね。自分を強いと思っていたのよ。そして、サバイバル演習の時、私はティナさんの制止も聞かずあの龍に挑んでしまった」

お嬢様・・・

「そのせいで……私はあなたや他のみんなまで傷つけて……そのくせ自分は生き残つて……いや、それはあなたが守ってくれたからか……とにかく、私はあなたに伝えたいの……本当に『めんなさい』。」

お嬢様が俺に謝罪している……今まで誰にも引く事を知らなかつたお嬢様が俺に頭を下げてこる。

そんな事はどうでもいいのに……

お嬢様が無事でいられるなら、俺は地獄に送られてもいいの。

俺を傷つけたくらいで謝ることはないのに……

「お嬢様。顔をお上げください。」

俺はお嬢様に優しくなるべく優しく声をかける。

「本当に『めんなさい』……本当に『めんなさい』『お嬢様』『え?』

俺はお嬢様の言葉を遮る。明日はお嬢様の言葉を遮つてしまつた罰

として中庭百週だな。

「謝らなくていいんです。俺はお嬢様の従者何ですから。俺にまで、その様子という事は他のみんなにももう謝つたのでしょう。だからいいんです。他の人はともかく、俺はいいんです。俺はお嬢様を守れたのならそれでーそれでいいんですから」

うわあ。氣障すぎるな。なんだか恥ずかしい。

「荷物持ち・・・」

お嬢様が俺を見る。

「だから、お嬢様。失礼を承知ですが、従者としては『ごめんなさい』という言葉より・・・『ありがとうございます』という言葉を聞きたいのです」

「ごめんなさい」という言葉はいらない。俺は自分の体がどうなるかと知ったことではないから。だが、感謝の気持ちは違う。それを聞くだけで前に進める。

「ありがとうございます・・・」

お嬢様が咳く。

「だから、お嬢様。もし俺に何か言いたいことがあるのなら・・・
『めんなさい』ではな『ありがとう』『え?』

「だから、ありがと!・・・助けてくれて、ありがと!・・・」

お嬢様が初めて俺に・・・感謝を・・・

「はあはあ。これでいいのかしら?」

「はい。その言葉が何より俺を前に進ませてくれます」

俺は笑顔でお嬢様に言つ。

「ひー。その笑顔は・・・少し反則ね・・・こんな状況で・・・」

「何ですか?お嬢様?」

「なつ何でもないわ!-とりあえず伝えたいことは終わり!あんたには本当に感謝しているわ。セリアさんとティナさんもあんたに感謝していたし

「お一人が……感謝……？」

「ええ。あの龍から守ってくれたってね」

守つてなどいないのに……そんな不当な評価……

でも、嬉しい。

「そう、ですか……」

「そうよ。それにしてもあんた、私が傷ついてる間に妙な魔法で敵チームを屠つたっ本当?」

敵チーム……お嬢様を守るために戦つたあれだろつか。妙な魔法・
・・ああ。ダーク・リベリオンか。

「はい、事実だと思いますが……」

「あんた、この二回間凄い噂だったわよ」

「はい？」

「あんたが倒したチームがあんたのことを「死神」とか「破壊神」とか・・・」

「まさか俺があいつらを倒したこと?」

「ええ・・・だから、あんたは今学園のみんなからセンター・ハートの死神とか、とにかくいろいろ悪田立ちしてるわね。トリフロスの死体が残っていたのもそれに拍車をかけているわ。あんたがトリフロスを倒したとかホラをふくやつもいるし・・・」

「俺がトリフロスを倒したんだが・・・まあ、悪田立ちする必要もない。黙つておくか。」

「まあ、主人として言わせてもらつなら、注意してね」

「わかりました」

「サバイバル演習では、悪田立ちしそぎたか・・・

まあ、お嬢様を守るためにだつたんだ仕方ない。」

「あつ…やうだあとまつーつあなたに伝えたい」ことがあつたわ！」

何だろうか？

「実はセントラル城で王様主催のパーティーがあるんだけど来ない？私と一緒に」

パーティー？いつもはセンターハート家の統括執事リコードさんが一緒に行っていた筈では？

もしかしてお嬢様なりのお礼なのだろうか？

「べ、別にあんたが来たくないんなら……いつも通りリコードを連れて行くんだけど……」

パーティーか。貴族だらけの場所か……まあ、お嬢様が誘つているんだし行くか。

「わかりました。自分には不釣り合いですが、行かせていただきます」

その瞬間お嬢様の顔が輝く。

「そつそつーなら明日の夜ようしけねー荷物持つー。」

「わかりました」

お嬢様・・・俺をパーティーなんかに誘つていい事でもあるのだろうか？なぜそんなに嬉しそうなんだ？

まあ、お嬢様が笑顔なのはいい事か。

そうして、俺たちは書庫から出て、互いに自室に向かった。

会話の後、アメリカの自室へ

「う～誘つつもりなんかなかつたのに～」

何で私は彼をパーティーに誘つたのだろうか？

咄嗟に言つてしまつた・・・

「父様になんて言つて、コードさんを行かせないよつするか・・・」

どうしましょうか？

私は彼を思わずパーティーに誘つた。

何故かはわからない。

だが、何故だか誘つた理由がわかる氣もある。

「まあ、明日は彼と共にパーティーに行きましょうか。父様や貴族が集まるパーティーに。明日はよろしくね、『ロイ』

アメリカが深層意識でロイに好感を持っているのは言つまでもない。

第三十一話 プライド（後書き）

この作品をよろしくお願ひします。私は必死です。必死で書きます。
あと前の話の悪魔つてサタンだつてみなさんわかりました？分から
なかつたのなら、私の文才のせいです。すいません。

第三十一話 パーティー（前書き）

アメリカ（お嬢様）からのパーティーのお話。あとロバがマジで十万越えしててビックリしました。皆さんありがとうございます！！そして、これからも誤字脱字報告と感想をお待ちしております。皆さんの閲覧記録が私の執筆意欲のつながります。これからもこの作品をよろしくお願いします。

第三十一話 パーティー

今は夜。

昨日、お嬢様から誘われたパーティーへ行く日の夜。

俺は今、使用人なのに貴族のパーティーの正装？のタキシードを着せられていた。

執事用のモーニングコートなら着たことはあるが・・・タキシードとはな。

俺には似合わないと思つ。

だが、お嬢様曰く

「私の横に立つならそのくらいの格好はしなさいね。」

らしい。

しかし、従者としてパーティーに行くのになぜこんな格好に・・・

いつもお嬢様のパーティーの付き添いは普通の従者服で行くのに・・

まあ、いいや。

俺はセンター・ハート家の玄関から外へ出る。

どうやら、お嬢様とラザイン様がパーティーへ向かうための馬車を手配している様だ。

俺が馬を捌くのかな？

そんな思考をしていたら、ラザイン様に苦笑された。

「ははっ。ロイ君。君はどうやら相当アメリカに気に入られたようだね」

「はい？意味が良くわからないのですが・・・

「その顔は私の言っていることが良くわからぬって顔だね。まあ、セントラル城のパーティーに着いたらわかるさ」

「そう・・・ですか」

そんな会話をしづらくなっていたら、馬車が着いたようだ。

馬車の運転手がいたので、馬車の運転を俺がしなくてもいいみたい
だが・・・

だったら俺はパーティーで何をすればいいんですか？お嬢様？

給仕の仕方なんて知りませんよ？

はあ・・・

不安だ・・・

俺は馬車の中にラザイン様とお嬢様と一緒にに入る。

馬車の中はとても広い。それに暖かかった。

馬車はいいな。俺が歩かなくても進んでくれる。

田まぐるしくかわる景色の中で俺はある事を考えていた。

それにしても、随分遠い所まできたなあ。

最初はラザイン様に拾われて。従者としての作法をマスターして。

平民としての差別を受けて。

学園へ行き。

貴族を模擬戦で倒し。

白銀の龍と戦い。

そして今はパーティー。

一年前の俺からは考えられないような毎日だ。

少なくとも、目の前にいるお二人とこんな馬車に乗る未来を一年前の俺からは想像できない。

それほどの身分の差があるので。

何だか・・・何て言えばいいのか・・・

ここまで、来るのに色々あつたが、今お二人が過ぐしているような平和な時間を俺はお一人のために作っていきたい。

俺がここにいるのはこのお二人のおかげなんだから・・・

本当に遠くまでき・・・た・・・

あ・・・れ・・・?

思考が深くなりすぎて・・・眠く・・・

そんな・・・お二人の前なのに・・・

居眠りは・・・

ああ。

もう馬車特有の揺れの前に耐えれそうにない。

はあ・・・意識が・・・

「ちょっとー荷物持ち！起きなさいー着いたわよー。」

「ん？声が聞こえる。

「は・・・い？」

「しつかりするー。」

「はいー。」

どつやからセントラル城まで着いたみたいだな。

それについてもセントラル城・・・さすがの大きさか。

莊厳な佇まいである。

平民の俺が入れる場所では無いのだが・・・

貴族のトップに近いラザイン様の付き添いの俺は特に咎められる事なく、城に入る事ができた。

ラザイン様は顔パスだ。

お嬢様もな。

城・二階ホール（パーティー会場）

はあ。どうやら、パーティー会場に着いた様だ。

俺は何をすればいいんだ？

「ラザイン様、俺は何をすればいいのですか？」

「それは・・・アメリカに聞くといい

「はあ。では」

俺はお嬢様に近づく。

ついでにラザイン様は貴族仲間と優雅に話している。

「お嬢様。お嬢様に言われた通り正装までしてパーティーに来たのですが、俺は何をすれば・・・」

俺は何をすればいいんだ？

「それは・・・パーティーの最後にわかるわ！-とりあえずパーティーをプラプラしてなさい。その格好なら貴族だと思われるから怪しまれないわ」

はあ・・・プラプラ・・・ですか。従者としての仕事もせずには

貴族と同じように過ごせると？

「わかりまし・・・た」

「よし！私は少し用事があるから、またね！」

「お、お嬢様！」

「大丈夫よ。あんたに来てもらつたのにむちやんと理由があるから」

「そう言いながら、俺から去つて行くお嬢様。

困つた。

パーティーでやることが全くわからん。

サタン知つてる？

（世俗には疎いのじゃ・・・）

さいですか。

タキシード姿で言つことではないが、俺つて場違いじゃね？

こいつなつたら、お嬢様の用事まで隅の方で過ごすか。

俺はこのとき、気づいていなかつた。俺の事を興味深そうに見ているある一人の視線に・・・

(「この視線は・・・まあ、敵意は無いようじゃし、どうやらかっこいい」と心配かの。まあ、捨て置いていてもいいかの)

そんな事を思うサタンであった。

第三十一話 パーティー（後書き）

次回、視点変更あるかも（ないかも）。予定では・・・未定です・・・あと、今回短いですね。すみません。時間が最近とれず・・・では、また次回に会いましょう。

第三十二話 セントラルの王女（前書き）

この話のですね・・・データが吹き飛びまして・・・最悪でした。書き直しなので記憶が曖昧に。表現が稚拙になつていいたら教えてください。元々、稚拙ですけど・・・

第三十二話 セントラルの王女

私の名前はエニア・シャンドル・セントラル。この国の第一王女だ。今日は父に言われてパーティーに参加していた。ついでに第一王女である姉は仕事である。

セントラルの魔法学園の生徒である私とは大違ひの大変さだそうだ。姉の話を聞いていると私はこんなパーティーに出ていいのかと思ってしまう。

なんだか、気乗りがしなかつた。

しかし、今日は一年に何回がある、王主催の大規模なパーティー。姉はともかく、私は強制的に父に参加しろと言っていた。

私は王女という複雑な立場であったので、あまり学園に友達はないかった。

パーティーでは貴族の子供は友達同士で楽しんでいることが多い。

だから、私はパーティーで孤立していた。

たまに男の人が私を話に誘おうとするが、私の顔をよく見て王女とわかると、離れて行く。

王女も寂しいものだ。会話もままならない。別に気がねしないでい

いといつのに。まあ、私が話の輪にいたり話すからこのだらう。

だから、私はなるべく一人になるよつとしている。

早く父がパーティーを切り上げてくれればいいのだけど。

会場の隅の方でじつとしているよつかな。いろいろ社交辞令やおべつかは言われたくないし。

私が会場の隅へ行くとそこには先客がいた。

彫りの深い精悍な顔つきに鋭い眼つき。全身黒づくめのタキシード。どうやら貴族の子供の様だ。

私は第二王女で学園の生徒でもある。ほとんどの学園の貴族の子供とは一応知り合いなのだが・・・

こんな人いましたっけ？私と同年代くらいの年齢に見えるのだけど・・・

こんなに目立つ外見なら絶対に私は忘れない
し・・・

少し彼に興味が出て来た。しかし、王女とばれたら、敬遠されるかな？まあ、そしたらそれまでだ。

私は普段から社交的ではないのだが、この時ばかりは何故か彼に話しかけてしまっていた。

* * * * *

「少し私とお話しませんか？」

ん？ 声の主を見ようと振り返るとそこにはえらく美しい少女がいた。

てこうか銀髪つて。王様と一緒にだな。珍しいな。

ていうか何で俺と話したいんだろ？ あ、まさか！ 何か粗相をしてしまったのか・・・？ まずいな。こんな貴族達が集まる場所でお嬢様に迷惑はかけられない。それに平民とばれたら厄介事になりそудだし。貴族のマナー？ が分からぬ。

丁重にお帰りくださいといいたいが・・・

まあ、ここの貴族らしく接して早々に話を切り上げるか。

サタン。貴族つてどんな風に演じればいいと思ひ？

（悪この主様よ。儂は俗世間には疎いのじゃ）

そういえば。そつだつたな。仕方ない。自分で考えるか。

そういえば、名前を聞かれていたな。

「俺はロハイと言つます。貴方のお名前は？」

いつ答えた。「俺」ではなく「私」や「僕」の方がいいのか？

もう遅いが。

そつ見知らぬ少女に言葉を返すと、少女がばれてない。よかつたです。と小さくいいながら喜んでいた。何がばれていらないんだ？

「あつ。私の名前はエニアアです。宜しくお願ひしますね。ロイ様」

俺に様付けなど要りないのにな。まあ、貴族モードの俺は訂正できないが。

それにもしてもエニアア……どこかで……？

「ハーハーハ、宜しくお願ひしますね。エニアア様」

そう俺は笑顔で言つてみる。作り笑いだ。しかし、エニアアといつ少女は恥ずかしそうにうつむいてしまう。

くそっ！失敗した。うつむかれてしまつほど見るにたえない顔だったか……

「それでロイ様に聞きたい事があるのですが……よろしくですか？」

聞きたいこと？何だろうか？

「ええ。いいですよ」

どうでもいいが貴族と従者って言葉遣い変わんないな。ビッチも敬語でいいし。

「失礼ですが、貴方は何処の家系なんですか？みたところ、私に近

い年齢ですし・・・し

かし、私は貴方の事を今まで見たことがありませんし

俺の顔から血の気が消える。な・・・なんて答えればいいんだ・・・

「どうしたんですか？ロイ様？」

やばい。ここでただの平民と答えてもいいのだろうか？いや・・・何かまずい気がする・・・

ん？でも連れて来てくれたのはラザイン様だし・・・規則的にはいいのか？

しかし、平民と答えて一悶着あるのは避けたい。

「は・・・

「俺の家系ですか・・・それは・・・」

「それは？何ですか？」

「秘密です」

俺は気障っぽく笑顔でそう答える。

ダメかな？」こっちは本氣で秘密にしたいんだけど・・・

「もううつ。ロイ様！私が子供っぽいからつてからかっているんですか！？」

いえいえ、こちらは本氣で秘密にしたいんです……！

「いやいや……違いますよ……あははは……」

俺たちはしばりへ問答を続けていた。

「おー。あれの隅の方で話しておられるのは姫様じゃないか？」

学園の1・A所属のカインがそう言つ。

「ああ、確かに。大陸一の美姫と名が高いの方っぽいな

確か……ヒーラ様といつお名前だ。あまり表舞台には立たない方
だが……な。

「それでよあのヒーラ様の横にいる男、あいつじやねえか？」

「あいつ？」

「最近、死神と名が高いあいつだよ

なつ！そんな訳が……平民がパーティに紛れ込むなんて前例がないぞ！？

「な？だろ？」

「本當だ……」

カインのこう通りエニア様と話しているお方は・・・落ちこぼれと言っていたロイだ。

これは・・・

「王様に報告した方がいいかな?」

「アメリカさんが連れて来たんじゃないのか?」

「だとしても、平民が貴族のましてや王女と話すなんて問題だろ?」

「せうだな・・・」

俺たちは父達に事情を説明し、王様に報告する様に頼んだ。

それを横で聞いていたアメリカは・・・

「荷物持ちが!・・・まずいわ・・・やつぱりパーティーに連れて行くのは迂闊だつたのかしら・・・しかし、国の定めには違反しないから・・・うーん、どうなのかしら・・・」

アメリカは悩んでいた。

* * * *

何か・・・寒気がしたんだが・・・気のせいかな?

「いいかげん答えて下さこよ~ロイ様~」

「すいません。本当に答えられないんです」

「何ですか・・・せめてその理由だけでも・・・」

いや、センター・ハート家に迷惑がかかる可能性は一つでも遺すべきだからな。

話す訳にはいかないんだ・・・すまないな。エニアさん。しかしエニアってやっぱりどこかで――

その瞬間――

「儂の大事なエニアに平民が平民がとりついておる――引き剥がせ――!! 国軍王直属部隊よ――!!」

「――はっ――仰せのまま――」

パーティー会場にセントラルの王の大きな怒号が響いた。

ああ。思い出した。エニアって・・・

王・女・様じやん。

はあ。

サタン。俺、不敬罪で死んだかな?

(わからんの。しかし、主様。儂が全力で守るから安心せい――)

またセンター・ハート家に迷惑が・・・

ぢりひらかなこよ・・・本邦に。

第三十二話 セントラルの王女（後書き）

はあ・・・書き直しなのであんまり・・・書き上げても達成感が・・・

第三十四話 強わ「」が「」の世界の全て（前書き）

この王様は有能な王様です。しかし、少し力への拘りが……まあ、詳しいことは本編でわかります。

第三十四話 強姫がこの世界の全て

俺はパーティー会場のど真ん中で衛兵達に包囲されていた。

いや、王様の直属部隊とか言つてたな・・・衛兵ではないのか。どちらにしてもまずいな。王女と平民が話すのはまずいと俺でも思うし。いや、それ以前にパーティーに参加して良かつたのか？

あの玉座の人の怒り様・・・どうやら王様を怒らせてしまった様だ。

弁明するしかない・・・

そう俺が必死に言い訳を考えようとしていると威圧的な声が響く。

「ヒーラの横にいる平民よーーー！」

「！－！何て氣迫だ！－！あの氣迫は・・・王様か！

「お前は平民でありながら王族であるヒーラと会話した。その意味がわかるか？」

老練な雰囲気を纏う王が俺に問いかける。ぐわー王の雰囲気に呑まれて思考が鈍る・・・

「意味ですか・・・？」

質問に質問で返してしまつた！まずい！最悪だ！上の立場の人と会話するときの最悪の悪手だ！

「ほひ。やはり理解できておらぬ様だ。ならば教えてやひ。王族とは即ち、国の礎。かつて国を切り開いた絶対的強者。おまえはそんな存在に声をかけたのだ。ただの平民が！！」

なんて・・・なんて威圧だ・・・足が竦む・・・立っているステージが違いすぎる・・・

「本当にすいま「謝ればすむことではないのだ。平民」

やはり・・・何か罰則があるのか？

「私が主催する貴族の親睦を深めるパーティーを阻害しただけでなく、立場を弁えない愚かな行動。前代未聞の事ばかりだぞ？平民。特に王族と話した罪は大きい。よつて平民。

お前は死罪とする」

・・・死ねってことか？ただ、少し王族と話しただけで・・・？ありえない・・・だろ？なんで貴族の奴らは何も王に反論してくれないんだ？俺の周りに集まっているのに。

おい・・・本当にか？死罪・・・？俺の視界が暗くなる。「冗談みたいな展開に乾いた笑いすら出ない。こんな一瞬で人の命の裁量が終わるのか。

「待つて下さい父上！話が性急過ぎます！それにロイ様に話しかけたのはわた」

エニアが王に声をかける。

「エニア！」

「ひや！」

「お前は王族としての自覚がないのか？王族とは常に絶対的な存在でなくてはならん。それを平民に踏みにじられたのだ・・・この処置は妥当なのだ」

「そんな・・・ロイ様が平民・・・それに死罪・・・」

エニアの顔から気力が抜ける・・・

「私が話しかけなければ……私のせい……また私の……」

「その平民を城の闘技場へ連れていけ！そこで処刑する！！」

卷之三

王様の直属部隊が俺を拘束しにかかる。俺はまだショックから抜け出せていなかつた。

(主様……逃げるのじや……)のままでは……)

「お待ちください……！陛下……！」

そんな中、俺はある貴族の声により覚醒する。この声は・・・ラザイン様・・・

「貴様は・・・！ラザインか！」

「はつ！たいへんお久しう」

「ああ。久しいな。確かレーナが死んだふりか・・・お前が部隊をやめた時は我が半身が無くなつたよ」だつたぞ」

「恐悦至極でござります」

「今から、その平民を連行してからまた話すとしよう。積もる話もあるからな」

「陛下！その事でお話が――！」

「なんだラザイン。お前ともあらう者が声を荒げてどうしたのだ？」

「その平民。ロイ・カーレスをパーティーに連れてきたのは私です。ここは私に免じてこの場は穏便に済ませてくれませんか？センター・ハートからも賠償金は払いますので・・・責めて死罪は・・・」

センター・ハートから賠償金！？そんなのダメだ！..そんなことになるなら死罪を選ぶ！..

「俺は兵士に拘束されているので話せないがラザイン様に必死に目でメッセージを伝える。

「ふうむ。重宝しておる平民なのか？しかし替えはいくらいでもいるだろつ？」

「お願ひします――」

「つむ・・・・

ラザイン様は深く王に頼み込む。王は何かを検討しているようだ・
・
くそつ！俺はなんて無力なんだ！―目の前の死を恐れて震えてるだけじゃないか！

* * * * *

なんですか？荷物持ちが死罪？馬鹿な。王族とはいえ、極論過ぎる。この国の平民はそんなに立場が低いの？

私が父上に荷物持ちをパーティーに連れていくと言ったから・
ただ、「ありがとう」の気持ちを荷物持ちに伝えたかっただけなのに・
・

なんでこんなことになるのよ！―

目の前では私の父があの暴王に頭を垂れながら必死に荷物持ちを助ける妥協案を模索している。

そのおかげか知らないが・・・・暴王が何かをひらめいた様だ。

* * * * *

「仕方あるまい。お前ほどの男の頼みだ。死罪は取り消そう

「あつがとうござりますー！」

今までの王とラザイン様のやり取りを見ていた貴族達がざわざわと騒いでいる。

王の右側に立つ男が何やら王に耳打ちしている。

俺の死罪はどうなる?何にしてもセントーハート家にまた……

俺はいつまで甘えてこるんだ……

そして王がある一撃を言ふ放つ。

「しかし、その代わり古べからずの罪の有無を決める方法を取り入れよ!」

「まさか陛下……あれをやらせるつもりで……まだロイ君は子供何ですぞ!……」

「死罪よつはましだらうへ・ラザイン?」

ラザイン様が声を荒げた。罪の有無を決める……?

そして、王が芝居がかつた仕草で会場内によく通る渋い声を轟かせる。

「即ち決闘だ!……」

そして、周りの貴族から歓声が挙がる。

何だこの異様な空間は……この国の貴族は俺が思つてた以上におかしいのか?

決闘・・・どうこう決闘をすればいいんだ？

一度は死を覚悟したんだ。決闘へいらっしゃつてやる・・・

「陛下それはあまりにも酷過ぎ・・・」

「それ以上の譲歩はできないぞ？ラザイン」

ラザイン様が苦虫を噛み潰したような顔をして弓馬トガる。

「では、そこの平民よ。お前には今から私が指名した相手と決闘をしてもらひ。その相手を戦闘不能にしたらお前を無罪としよう。だがお前が戦闘不能になつた場合・・・お前は死罪だ」

結局、勝たなきや死か。

「生きたければこの私に強さを見せつけるがいい！－平民－！強ければ何もかもが許される－－！」はそういう世界だ－－

やつてやる・－－！生きてみせる。そして笑つて明日を迎えてやる。

「私が指名する騎士は騎士序列第八位のジュイスだ。せいぜい足搔け。平民」

そうして、俺は結局、闘技場へ連行される。

強くあればそれが法という訳か・・・

第三十四話 強い人がいる世界の全て（後書き）

次回は決闘かな？しかし、お気に入りが百五十件なんて感謝の極みです。ありがとうございます。これからもこの作品をよろしくお願ひします。ああ、お気に入りを増やしたいですね。切実な思いです。

第三十五話 勝たなきや死ぬから（前書き）

早いもので三十五話。一話、一話の文章量が少ないせいかな?とにかく、三日連続更新です。頑張りました。よろしければ、見てください。

第三十五話 勝たなきや死ぬか

俺は王の部隊に城の闘技場へ無理やり連れてこられた。

実際に闘技場へ来ると気分が悪くなる・・・

きっかけは、些細なことだつた。パーティーに来た。王族と話した。それだけだ。だがその些細なことのせいでの俺は今から、王国軍の騎士序列八位のジュイスさんと戦わなければならぬ。

王国軍騎士序列八位って・・・國軍の中でも八番目に強いつことだよな?あまり死罪と変わらない気がする・・・

死罪と違い足搔くことはできるが。ここで、負けるわけにはいかないな・・・

まだ俺は俺の人生で何も目的を成し遂げていない。ここで死ぬわけにはいかない・・・

ん?パーティーに来て何で俺は死にかけてるんだよ・・・

やっぱり俺には浮ついたものは似合わないってことか。まあ、俺らしいな。パーティーなんて柄じゃないしな・・・

決闘くらいの理不尽さが一度いいのかも、な。自嘲的過ぎる気持ちするがな。

王が闘技場の観客席に登る。

わざわざ平民一人の為にこゝ苦労様だな。王様さん。

どうしても捻くれた考え方になつてしまつ。

「ふむ。では古来からの罪の有無や対立の解決に使われてきた、決闘を開始する、と私から宣言させてもうつ。私からの推薦者、ジュイス・レンティア・イサラーシャは闘技場へ入場せよ」

「はつ」

そんなやりとりの後、俺が今いる闘技場のコロシアムに一人の青髪の女性が向かつて来る。

この女性がジュイスか・・・しかし、纏う霸気は男のそれを凌駕するものを感じる。

油断できない。いや、こちらは格下だ。油断などしている暇はない。全力で挑まなければ・・・瞬殺されるだらつ。

それほどの氣を田の前の女性からは感じる。超えてきた死線の数が違うのだろう。俺みたいな学生が勝てる道理もない。だが・・・やるしかない。なら、やつてやる・・・

勝つぞ。生きるにはそれしか道がないのだから・・・

「では、両者構えよ!」

王ではない、誰かの凛とした声が響く。

「王国軍王直属部隊のジュイスだ。一応、騎士序列は八位などと言

われている。貴様には悪いが、私も仕事だ。学生とはいえ、手加減はしない」

ああ・・・ジュイスさんとやらは思つたより、眞面目な騎士だったな・・・良かつた・・・脳みそが腐りきつた奴とは戦いたくは無かつたからな。これなら、公平な勝負が出来そうだ。

「ええ。こちらこそ全力で挑ませて貰います」

そして、観客席から声が響く。

「決闘を開始せよーー！」

そして、俺の命を賭けた戦いが始まる・・・

* * * * *

「荷物持ち・・・」

私は父さんと闘技場に来ていた。他にも王の他に物好きな貴族は何人か闘技場に来ている。わざわざ一旦パーティーを抜け出して。

そんなに戦いに飢えているのかしら・・・いや、荷物持ちがやられるのを見たいだけかしら。平民の公開処刑みたいなものだものね。私の父も嘆いていたもの・・・

「アメリカ。私が進言したのにもかかわらず、こんな結果になつてしまつてすまない」

「父さん・・・」

「決闘なんて・・・ロイくんはまだ学生だといつに・・・残酷すぎる・・・いや、いつだって貴族は平民のことを虐げてきたか・・・」

「

父が語る。確かにこの国の貴族は平民に冷たい・・・

「ジュイスは全盛期の私でも苦戦する相手・・・ロイ君・・・くそ！私がいながらー！」

父が悔しそうに拳を握りながら話している。

「でも・・・父さん・・・私は信じてる。荷物持ちが勝つ未来を・・・」

・

「アメリカ・・・そこまで彼の事を信じて・・・わかった。私も信じよう。彼が彼女に勝つ未来を・・・」

・

私たちには祈る。荷物持ちが勝つ未来を・・・

まだ私の用事は住んでないのよ・・・荷物持ち・・・だから・・・

戻ってきて・・・早く・・・

* * * * *

私、エニア・シャンドル・セントラルもそのころ闘技場で祈っていた。

思えば、彼は不思議な人だつた。何もかもを見透かすような目。冷徹な雰囲気。そして、滲み出でている強い心。

最初は単なる興味から彼に話しかけた。だけど、彼と話す内に何故か満たされている自分がいて……

私は本来、男のひとを気にするような性格じやないのに……

今はその話は関係ない。とにかく、私は彼に……勝つてほしい……

「私の……私のせいだから……いつも王女なんて立場のせいで私は他人を不幸にする……」

ロイ様のことだって、私のせい。久しぶりに他人に興味を持つたらこれだ……

神様お願いします……彼は……彼だけは不幸から逃げさせてあげて……

お願い……！

* * * * *

俺は決闘開始の声とともにジュイスから距離を取る。

距離は約10メートル程。この距離では……心もとないが……やつてみるか。

「来い！氣仙花！」

俺は青く刀身の美しい剣を呼び出す。

「ほつ。平民なのに魔武器を所有しているのか・・・」

ああ。そうだよ。そして今から俺がやろうとしているのは・・・

「つー何だこの氣力は！まさかあの剣に！」

大げさなリアクションありがとう。序列八位さん。驚かすことが出来て光榮さ。不意打ち気味で悪いが、一撃で決めさせてもらうぞ！

「いくぞ！不可視の斬撃！」

闘技場のコロシアム中に俺の氣力のオーラと魔力のオーラが充満される。

そのオーラは形を変え、見えない斬撃に変わる。

見えない空氣の膜のようなものがジュイスに向かう・・・

激しい爆音と共にジュイスの体が斬撃に巻き込まれた――

第三十五話 勝たなきや死ぬから（後書き）

微妙な終わり方ですね。しかし、一九二〇年で一旦切らせて貰います。後、感想ありがとうございました。嬉しかったです。

第三十六話 未開拓魔法（前書き）

今日、投稿する気は無かったのですが・・・ある事情で投稿する」とにしました。この事情のせいでの迷惑した方々には深い謝罪を。

第三十六話 未開拓魔法

「はあ・・・はあ・・・当たつたか・・・」

俺は魔武器の能力である遠隔攻撃を行い、肩で息をしていた。気力を大分消費しないと放てないからな・・・大分疲れた・・・

(いきなり全力じゃつたの。主様)

ああ。相手は、間違いなくこちらより格上。手段など選んではいるまい・・・

不可視の斬撃の威力は普段の修行で確認済みだ。これでジュイスさんが倒されてくれれば・・・

俺はジュイスさんがいたあたりの空間を見据える。コロシアムの砂煙のせいでジュイスさんの状況が分からぬ。

頼む・・・！俺はまだ死ぬ訳にはいかない！
倒れていてくれ・・・！

(残念じゃが主様。そもそもいかぬ様じゃ。流石は人間の上位種といつたところかの。人間にしては中々じゃ)

まさか――

「今のは効いたぞ？平民？」

やつぱり一撃で仕留めること叶わず、か。いや、それ以前にジュイ

スさん自信に傷さえ付

けられていな様だ。何故だ？

「不思議そつな顔をしているな？おおかた、私が無傷だつた事を疑問にでも思つてゐるのだろう？確かにさつきの攻撃は中々に苛烈だつたが——幾度の戦いを乗り越えてきた私には少々生温い」

ぞくりとした。底冷えするような声。本能が叫んでゐる。この女とはまだ戦つてはいけないと。

「ふふ。学生でこれほどの攻撃か……軍に入れたら相当の使い手になつていただろう。殺すには、惜しいが……立場が違つたな……・残念だ」

まずい！あいつが何か仕掛けてくる！俺の全細胞、全神経が警鐘を鳴らす。

「さつきの一撃のお返しに私の魔武器を披露してやるつ

そうじつて目の前の女が出したのは青の槍。
よく……貫けそうだ……

「これが私の魔武器。ブリュセルスだ。槍の魔武器とは珍しいだろ？もちろん能力は教えん。では、魔武器の紹介も終わつた。心置きなく、命を散らすがいい！！」

槍に魔力が充填されていく！？まずい！何だかわからないがおそらく向ひかの攻撃をされる！

“どうすればいい？どうすれば——

(主様！落ち着くのじゃ！あれば恐らしく魔力系の攻撃……なら、あの魔法を試してみればどうかの？)

そうか！済まない。あの人の威圧にあてられて正常な思考が出来ていなかつた。ありがとう。サタン。

(礼は後でいいのじゃ！来るぞ！主様！)

「学生にこれを放つ日がくるとは……思つてもみなかつたよ……少々、酷だが……一瞬で死なせてやる」

殺氣に惑わされるな！自分を信じろ！俺はあの攻撃を防いでみせる！

「今から放つのは貫通力の高い、魔力を利用した槍による遠隔攻撃……これは防げまい……わらばだ……哀れな平民！」

俺は哀れなんかじやない！センターへートに拾われてからは毎日が充実してるんだ！俺はまだの方たちにまだ何もしていない！何も出来てない！恩を返せてない！まだここで、こんなところで死んでたまるかあ————！

「夜を！俺を守る夜を！俺は望む！守りの夜を！」

頼む……生きたいんだ。

ジュイスが攻撃を放つ。

「はあっ！」

青く美しい細い鋭利な光の攻撃がロイを貫こうとしていた。

「頼む！俺の命を守ってくれ！ダーク・ナイ
ト！！」

対するに俺が放つは闇の中級魔法に分類される魔法。中級でありながらあらゆる可能性を持つ魔法。

「これは……空間支配……？これでは第一位と同じ……」

夜の上に夜が上書きされる。ロイを守る闇とジュイスの光がバーストしてぶつかり合つ。

何十秒かの拮抗が続く。だが……

「闇が突破される！？」

ロイの闇が若干押されていた。

「私は第八位。学生が防げるような生温い奥義を出した覚えはない。数十秒拮抗したのは驚きだが……」

「そー闇が破られる！

(主様！)

「貫け！ブリュセルス！」

ジュイスの声が響くとともに俺は闇を突破され光に包まれた。

「かはつー」

体に凄まじい衝撃が加わる。俺は「ロシアムの端まで吹き飛ばされる。激しく吐血しながら。

「！」ほつー。「！」ほつー

どこかの内臓でもやられたのか？「！」ほつー

(主様よ・・・主様！)

「驚きだな。今をくらつて死なないとは・・・あの闇はこけおどしではないらしいな・・・だが、少し死が遠いただけだぞ？平民？

はあ・・・はあ・・・まだ・・・戦れる・・
・はあああ！――

俺は全力でジュイスの懷へ切り込もうとする。

「動きが直線的だ。入りが甘すぎるだー。」

だが・・・ジュイスの槍に切り込む前に吹き飛ばされる・・・

「まだまだー俺は！」

(主様！接近戦では・・・)

俺は負けられない！あの人に誓ったんだ。もつ負けないって。

今度は、初級魔法で牽制しながらジュイスの様子を伺う。

「魔法で牽制か・・・さつきよつはマシだが・・・ほんことをわ
れたらどうする?」

「一。」

何とジュイスは魔法に構うことなく、俺に突っ込んできた。

「所詮は初級魔法。当たったところでたいしたこともない」

魔法を放つことに夢中だった俺は氣仙花の刀身で防御する「ひと」でも
きず・・・再びジュイスの魔武器に貫かれる。

「うあ・・・」

ジュイスに蹴られ吹き飛ばされる。

(主様! 主様! 主様あああ! ! !)

これは・・・やばいな・・・もつ目が虚だ・・・

俺はあの人に・・・経験も知力も体力も力も技巧も俊敏さも・・・
覚悟すら勝ててない・・・

俺は負けられないのに・・・ここで死ぬしかないのか?だとしたら・
・・無念だ・・・

だが、こんな敵に殺られるのならいいかなと少し自嘲的になる。

血だらけの俺の目から涙がでる・・・すまない・・・サタン・・・
俺は、ここまでかもしれない・・・

負けられないのに・・・諦めたくないのに・
・生きたいのこつ！

(主様は・・・儂が死なせない・・・)

なんだ・・・サタン？

(主様は・・・儂が死なせない！)

なつ！変な物が頭の中に！

何かしたのか？サタン！

(主様の性格からしてこれだけは絶対にしたくは無かつたのじゃが・
・・そんなことを言つておる場合ではない・・・悪いが無断で主
観意識の転換を行わせてもらひた・・・)

頭が割れるように痛いっ！主觀意識？何を言つておるんだ・・・！

(これはいわば禁じ手。未開拓魔法に位置する、人間が未だたどり
着くことの無い魔法じや。主觀意識の転換。それすなわち、儂と主
様の一時的な精神の交換・・・！)

何・・・！

(主様にはまだこの敵は早かつた。ただそれ
だけじや。今は儂の中で眠つておれ。目が覚
めた時には全てを終わらせよっ・・・)

サタン・・・・・サタン・・・・・

（もうこれしか手がなくての。すまぬな・・・では、行使するとじようか・・・）

くそ・・・俺が弱いから・・・

（未開拓魔法「チエンジ・ザ・マインド」「アイン」）

ぐわああ！－意識が・・・！

「どうした？平民？苦しそうだな？すぐ樂にしてやるわ」

ジュイスが再びロイに向けて槍を構える。

「いや、その必要はないの」

ロイが立ち上がる。その黒い瞳の中に少し子供っぽい金色の光を灯しながら答える。

「－」

何だこの違和感は・・・まるで悪魔とでも対面しているの雰囲気・
・不気味だ・・・早く終わらせなければ・・・

ジュイスが再び魔武器に光を充填させる。

「貫け！ブリュセルス！」

その声に呼応するかのように光がロイに向かって飛んで行く。

ロイに当たるかと思った直前。ロイがただ手を光に向かつて出す。

光がロイの手に当たり・・・消えた・・・

「は? 何故・・・だ? ブリュセルスの光が・・・

「それだけかの? 人間?」

ぞくり。

何だ・・・何なんだ・・・わざまでの平民とは何もかもが・・・違つ。

本当に何もかもが。それに似ているのだ。今の平民は・・・第一位に。

「何じゃ。つまりこのつ。やはり儂を楽しませてくれるのはあの方だけだの」

「何だ・・・? 何の話を・・・?」

「さて、狩の時間といふかの」

ロイが悪魔のような笑みを浮かべそう言つた。本当にその顔は悪魔の様であった。

第三十六話 未開拓魔法（後書き）

次回はロイ（サタン）の戦いです。お楽しみに。更新連投は疲れました。

第三十七話 騎士versus平民（前書き）

サタンの強さを書きたかった。これがないと後の展開にかなり支障がでますから・・・

第三十七話 騎士VS平民

「さて、行くとするかの・・・人間」

ロイがジュイスに冷たく告げる。ロイの瞳を見ていたジュイスは萎縮していた。

それは自分の技が手のひらで返されたからであるつか、否か。

「ブリュセルスの魔法光を防いだだけで調子に乗るなよ平民。私が序列八位まで登りつめることができたのは、大技ばかりのおかげではない！私が真に得意なのは搅乱奇襲だ！」

そう言つてジュイスはスピードでロイを搅乱しようとする。

「！」の傷だけの主様の体で長い時間戦闘はできんし、早く終わらせたいが・・・また面倒な・・・」

「どうした平民！私の動きについてこれないのか？」

ジュイスは髪で青い軌跡を描きながらロイの周りを走り回る。まるで獲物を狙う冷徹なハイエナのように・・・

「儂がお主の動きについてこれんと思つのか？」

ロイが走り出し、黒影が舞う。そして、ジュイスとの距離を一気に詰める。

「傷だらけのその身でよく動くな平民！」

皮肉げにジュイスが叫ぶ。

「流石主様の体……よく鍛えられておる……」

ロイがジュイスを捉える。

「このスピード……何故!」

ジュイスが苦々しくじぼす。ロイに聞命にほいられたことを危険に思つてか、大きく後退しようとしたが……

「やはり人間は甘いのつ。後退している間は、隙だらけじゃといふのこ・・・」

ロイは手に持つてゐる氣仙花を構える。

「儂は本来の持ち手ではないのじやが・・・応えてくれんかのう。主様の魔武器よ」

その声に呼応するかのように氣仙花は青く輝く。

「ほっ。儂でも使わせてくれるのかの?浮気性な魔武器じや。でも氣に入つたぞ!」

ロイが大きく後退してゐるジュイスに向かつて氣仙花を振り抜く。

「儂は主様ほど氣力はないのじやが・・・まあ良い。不可視の斬撃!

!」

ロイはジュイスに向かい、自身の切り札を放つ。そしてジュイスの目の前に空気の膜が迫る！

「これは、最初の一ー」

ジュイスはブリュセルスの槍で防ごうとするが、コロシアムの隅までえなく吹き飛ばされる。大きなクレーターを作りながら。

「主様の一撃よりもすこし強かつたかの？」

「かはっ！馬鹿な！ろくに教育を受けていない平民に私が遅れをとるなど・・・」

「しかしこの技。思ったより反動がきついの・・・主様の精神にも傷がつきそうじゃ」

ロイが頭を押さえながらジュイスに近づく。

「さて、主様にこれ以上の負担を与える訳にはいかん。悪いが次で決める・・・」

「平民が強がりを・・・なら私も受けたとう！」

お互い血だらけの二人は自身の魔力を高め合ひ。

莫大な一人の魔力にコロシアム内部の大気が震える。

「私は平民の認識を改めなければいけないかもな・・・」

「ほう。何故じゃ？」

「貴様のような平民を見ていると平民にも凄まじい可能性がある気がするからな・・・」

「可能性を持つてるのは、貴族だけと思っていたのかの？虫睡が走る！」

「そう思ひのなら、私に勝つてみろ平民！軍の序列八位は伊達じや無いぞー！」

お互い魔力・気力を練る。

（うーむ。氣力がうまく練れん。儂の精神じゃないからのう・・・しかたあるまい。いつものように魔力で！）

先にジュイスが何かの準備を終える。

「見せてやろうー！平民！私の奥の手を！」

ジュイスは魔力を手のひらに集中させる。

「私は騎士でありながら魔法を最大の攻撃と思つてゐる。私の最強の魔法を受けてみろ！」

この魔力の質からして、最上級魔法かの？全く騎士様は、学生なんて物をぶつけよつとするのじゃ・・・

「私の全てをかける！ディガ・メニアルア・ディニアース！」

ジュイスの手から巨大な雷が顯現する。それに対してもロイはただ手を前に出しているだ。

「お前はよく戦つた……やうばだ。平民……」

ジュイスが寂しげに呟いた瞬間、凄まじい魔力がロイを包んだ。

* * * * *

私、アメリカ・アイラス・センター・ハートは戦いを息もつかずに見ていた。

・・・なんて戦いをしているのだらう。もうすでに、荷物持ちは私の何歩先へ行つてしまつたのであるうか。

あの強さまで上り詰めたい。こんなことを思つのは、私の従者に対して失礼だろうか。

それでも、そう思つてしまつ。実際に父ですら、驚いていた。

「ロイ君……君は一体……」

私の父が動じるなんて滅多にない。それほど驚いているのだ。田の前の光景を。

・・・平民の学生と騎士が互角に戦つてゐることを。

周りの貴族達も驚いていた。荷物持ちがじゅらの予想を裏切る動きをする度に貴族達はただ固まる。

とにかく凄まじい攻防の繰り返し。気になるのは時に荷物持ちから違つ雰囲気を感じるくらいだろ？

その時――

私は感じた。以前、屋敷の中庭で感じた魔力を。莫大な魔力を。

「！」の感じ、前にも何処かで――

私は魔力の中心地である荷物持ちを見つめていた。

* * * * *

ロイはただ冷静に目の前の雷を見据える。

「行くぞ人間・・・これが神に近いところまで上り詰めた者が放つ
魔法じや」

「顕現せよ・・・ダーク・リベリオン！」

ロイの手から巨大な黒炎が顕現する。

「これは中級魔法に位置しながら儂が最も信頼する魔力を喰う魔法
じや・・・」

終わりじや。人間。

* * * * *

私が行使した魔法が闇に飲まれていく・・・

「私の魔法があんな簡単に・・・？それに黒炎は止まるどころか勢いを増して・・・？そんな・・・私は届かないのか？学生ごときには――」

その瞬間、ジュイスは闇に飲まれた。

実質、決闘は王の目の前でロイの勝利に終わったのである。

第三十七話 騎士versus平民（後編）

次回はセントラル王の反応などを見ていつかと。それにより・・・どうなるか・・・そしてロイは決闘を終えて何を思つのか・・・

第三十八話 決闘の後で（前書き）

今更気づきましたが、セントラル王の名前決めていなかつたです。
物語に支障はないですが。

第三十八話 決闘の後で

「私は何を見ておるのだ？クロフォード」

セントラル王は闘技場を見据え呟く。その瞳には少しの驚きが込められていた。

「決闘を見て・・・いました・・・陛下」

「そうであるつな。わが騎士クロフォードよ。だがな・・・貴族である騎士が平民に負けるとはゞひこひことだー」

セントラル王は激昂する。クロフォードと言っていた青年は困り顔をしていた。

周りの貴族達も王の尋常じやない様子をみてそそくさと闘技場を出る。

「これほど私の身が捻れるような思ひはこつぶりであるつか・・・明日から貴族が平民に

負けたという事実を隠蔽しなければいかないしな・・・クックク

王は嗤つ。自分の同胞があつさつ負けたといひに、楽しそうにロイを見て嗤つ。

「わが騎士クロフォードよ。お前のあの平民に対する意見が聞きたい。私の右腕としての立場ではなく、騎士序列一位の立場としてな」

「はっ！あの平民・・・前半はそれほど特別評価するものは無かつたのですが・・・決闘の後半、手でジュイスのブリュセルスの光を防いだのが印象的でした。あんなことは私でもできません。あとは・・・おぞましい殺氣

を常に感じました。空間支配魔法も気になるところです。何にせよ・・・彼は第一位に似ています・・・」

「お前もそう思うか！クロフォード！実は私もそう感じたのだ。これは・・・少し興味がでてきたな。ただの平民には惜しい人材かもしけん」

「あの平民に興味がお有りで？陛下」

「あの年にして序列八位に勝つ。そしてあの強烈な雰囲気。おもしろい人材ではないか？将来的には我が国の戦争・紛争で多大な功績をあげてくれるかもしれない。天才とよばれたお前も形無しじゃないか？クロフォードよ」

「それは私が陛下の警護を専門と・・・」

クロフォードが苦々しく言つ。

そう基本的に王の直属部隊というのは王の身辺警護くらいしか仕事がない。

序列が十位位内で王の直属なのは、ジュイスとクロフォードしかいないのだ。

他の優秀な騎士は他国との紛争や諍いに駆り出されている場合が多い。

「ん？陛下そういえば、ジュイスが今、医療魔法をかけられていますが、医者によるとしばらく戦線に復帰はできないうようです。陛下の直属部隊の戦力が大分落ちるのでは——」

「かといって他国の侵略を防いでいる部隊の兵を簡単に借り出すわけにもいかん。このままの体制でいくしかあるまい。頭を抱える問題ではあるが、今日は気分がいい。久しぶりに私の気分を高揚させてくれる戦士に出会えた気がするぞ」

「確かにそうですね……彼は強いと思いますよ。私のレベルから見ても……」

「クツクツク！笑いが止まらんぞ！あいつは絶対にギルドには渡さん！将来的に軍にはいってもらおう！」

「陛下そこまで……それでは彼を戦争の道具にでも？」

確かにあの力……魅力的ではある。

「クロフォードおちおちしてたらお前もどうなるかわからんぞ？」

「……」

その瞬間、脳裏によぎったのは第一位である私が平民に負ける姿。

そして第一位を剥奪され地に落ちる自分。

「私を焚きつけよつとでも？」

「いい刺激にはなつたみたいだな？クロフォード君」

「せうかもしれませんね・・・」

本当に油断できないお方だ。だから君は自分は「Jの方を守ると思えたのだが。

「それではクロフォードよ。ジュイスの第八位剥奪と直属部隊の解任令を出すぞ」

やはつか・・・陛下は敗者に厳しい。

「せうおつしゃると思い手配済みです」

「流石わが騎士だ。さて、そろそろパーティも終わりだ。クロフォードよ。ニアを頼むぞ」

「はつー。」

王が子供がおもちゃをもらつたよつた顔をして闘技場から去る。

「ああいつ顔をした陛下には近づきたくないですな・・・それにしてもあの平民・・・ジュイスを・・・」

あまり親しくはないとはいえ、同胞がやられたのだ。あまりいい気分ではない。

それにジュイスに憧れて騎士にならうとする少年・少女も多い。こ

これからは・・・その票に期待できそうにはないが。

「さて、私はあの平民がジュイスに勝つたことを隠蔽し、尚且つジュイスを部隊から追放しないといけないわけだが・・・骨が折れる」

貴族が平民に勝つたなどと口外されたらたまたものではない。貴族の権威が地に落ちる。まあ、口外するのはそういう事を計算できない馬鹿な貴族だが。

まあ、ジュイスに関しての処理はほぼ終わつたからいいが・・・口封じは面倒だ・・・

「なにせ私が直接でないといけないですからね!」

今日は口封じに何をしなければいけないだらつか・・・

本当に王の右腕は疲れる・・・

とりあえずはエニア様を私室まで運ぶとしよう。

第二位は今日も大忙しつと。

* * * * *

「はあ。はあ。ソシまで疲弊が激しいとは、やはり安易に禁じ手を開放する訳にはいかんのう。

ロイは頭を抱える。

「そろそろ儂の顯現時間も限界じゃ。主様の体を安全なところまで運びたいが……いかんせんこれ以上儂が動けば主様の精神も危ないしのう」

そんな事を思つていたら、後ろから声をかけられた。

「荷物持ち！」

あれは確か……主様の大事な人じやつたか？なら、あれに主様の体を預けるか。ん？主様の口調が分からん。まあ、いいの。思えばこいつの名前……儂知らんの。どうやって話すか……

「荷物持ち！大丈夫なの！？」

アメリカが口音に心配そうに声をかける。向こうから話しかけてくれたのじや。良かつた。良かつた。

「すまんの……お嬢様。すこしひれましたのじや」

「あんた口調……」

「悪いが怪我もしておるから、この体を頼みますのじや。儂は……俺はしばし氣絶する……します」

儂は何か間違つた気がしたがそんなことも言つてられん。もうこれは主様の体が危ない。儂はお嬢様？に体を預け倒れこむ。

「ちよつーちよつと！荷物持ちー！」

うるさいのう。第八位とやらを倒したところにまだ用があるのか

の？もう知らんの。わざとこのお方を保護してくれなのじや。妙にかっこいい壮年の男も後ろにあるし・・・面倒くさそうじやのつ。

そして僕はゆっくりと扉を開じ、意識の安寧に身を任せた。

第三十八話 決闘の後で（後書き）

王様がロイに目をつけ始めました。ロイが危ないかな？

第三十九話 やつと目が覚めたんだ（前書き）

私の頭の中はもう完全に第一章にいく気満々なんですが・・・どういう流れにしましょうか。

第三十九話 やつと目が覚めたんだ

「 じこは・・・？」

俺は目を覚ました。じこはセンター・ハート家の自室だ。

従者ごときがなぜ主人の家に自室を、と思つかもしれないがそれは俺が特別だからだ。

いや、全世界の従者さんに自室する気は無いんだが、実際に俺の経歴は特別すぎるからな。まあ、ラザイン様の計らいで部屋をもらつたということだ。

いや、今はそんなことはどうでもいいんだ。

何故決闘の後、俺は・・・

！

そうか・・・俺は負けたんだった。あの青髪の騎士に・・・槍を持った強烈なイメージを植え付けられた女に。見事に完敗だつた。勝てる要素が何も無かつたしな。運すら負けている自信が俺にはある。

「 そりが、負けたのか・・・」

今まで命の保証がされた戦いばかりをしていた。あのトリフロスとの戦いですら俺は危険でありながら安全だった。

そして、昨日。初めて身近に死を感じた。初めての戦い。いや、「実戦」だった。

そして負けた・・・レーナ様と約束していたのにな・・・

レーナ様に会わせる顔が俺にはない。俺が貴族と認めた最初の人を裏切るなんて・・・

何もやる気が起きない。普段の俺なら時間の合間に修行でもするのにな・・・

ただ俺は強くありたかっただけなんだ。幼い頃、約束したから・・・センターハート家の奥方だったレーナ様と・・・

幼い頃を思い出す。何にも知らなかつた頃の俺。

「俺はもうだれにも負けません！これは誓いです！だから、レーナ様！俺は最強になります！そしてセンターハート家に恩返ししてみせます！」

この頃、俺は五歳。舌足らずな声で必死にレーナ様と約束した誓い。

「ふふっ。ロイ君。強くなりたいのはいいのだけど、ちやんと従者修行もしてね？」

「従者修行は・・・」

「ちやんとしてね？」

「はいっ！ レーナ様！」

そして、優しげに笑いながらも俺に従者修行を俺に薦めるレーナ様。このころ俺は従者修行を薦めるレーナ様が少し嫌いだった。従者修行が嫌だつたからな。

拾われた分際で何をつて思うだろ？ 俺もそう思つ。

でもこのこり俺は拾われたばかりの無知な子供だった。何も知らなかつたんだ。貴族が平民の子供を拾つて育ててくれるなんて例外にもほどがあつたしな。

レーナ様は俺が剣の修行をしようとすると複雑な顔をしていた。今思えば、俺が強くなるための修行をしようとする度に無理やり従

者修行を入れられてた氣がする。おかげで拾われてから十年間の間ほとんど何にも修行出来なかつた。従者スキルがマックスになつたくらいだろうか。

ある日、こいつそり俺は無礼にもレーナ様に聞いたんだ。なぜ、俺に剣や魔法の修行をさせてくれないんですかってな。

平民だからできないんだつて言われれば、それまでの事だったのにレーナ様は俺に真摯に向き合つて言つてくれたんだ。

「ロイ君がどこか遠いところに行つてしまつ気がして・・・」

憂いの表情を浮かべながらレーナ様がこいつ言つたんだ。

幼い俺には意味がよく分からなかつた。でも今ならこの言葉の意味が少しわかる気がする。

おそらく、昨日の俺にも理解出来なかつただろう。

負けを理解した今日だからこそわかつた事。

思えばレーナ様はこの感情を俺に分からせない為に俺を戦いから遠ざけていたのかもしれない。

そつ、俺がわかつた事は絶望という感情。どう足搔いても何にも出来なかつたという暗くどいまでも悲しい感情。そして何よりも俺に絶望を『えたのは・・・誓いを破つた事だ！

俺は嗚咽を自分のベットの上で漏らす。誓いは俺の支えだった。それが崩された。

もう何も出来ない。そんな暗い感情が心の大半を占める。

レーナ様やセンター・ハート家の方々の笑顔を思い浮かべる。それでもう彼らを俺は守れる気がしない。

でも諦めたくない・・・あの笑顔を守れるなら何だって・・・

ああ・・・レーナ様のおかげで今まで気づかなかつた事に気づいた。

俺は戦わなくてはいけなかつたんだ。何よりも先に・・・自分と。

この無力感と・・・

今日初めて。生まれて初めて。俺は自分といつものを感じた。

センターハート家は関係無かつたんだ。何よりもまず俺ははただ・・・

負けたく無かつたんだ・・・！

今日、初めて俺は「目が覚めた」気がした。

第三十九話 やつと目が覚めたんだ（後書き）

ロイの葛藤のみ…やってしまった（汗）でも次の展開に必要なんですよ！許してくださいね。誤字脱字報告よろしくお願ひします。

第四十話 進むしかない（前書き）

早く第一章にいきたい！！

第四十話 進むしかない

俺はどうすれば
・・・・・

俺が今しなければいけない事は、なんだ?

何も分からぬ。今まで漠然と強くなる事ばかり考えてきた。**子供**
っぽく最強になるだのなんだのほざいてきた。

たとえ、力をつけたとしても何をする？俺はそれすら説明できない。

まだ自分のしたいことすら分かっていない。力があるても、その力に振り回されるようでは、お話しにならない。

い。
力だけを求めて何になる。俺は前提から間違っていたのかもしけな

俺には「経験」が足りない。自分で何をしたいのかすら分かっていない。

センターへ入る？どうせいつて？

俺はそんな質問にすら答えられないだろう

センターハートを守ると漠然と考えていいだけでは、俺は前に進めない気がする。

少なくともあの青髪の騎士ジュイスはそんな迷いは一つも抱いてはいなかつた。

セントラル王への忠義が確かにあった。あの騎士は自分の力を扱っていた。

それに比べて俺は・・・サタンの力に振り回され、終いには自分の魔武器の能力ですらまだ完全に扱いきれてないときている。

そして何よりもまず「覚悟」がない。決闘でジュイスの殺氣に怯えていた俺はそこらへんの盗賊と変わらないほどの屑だった。

あの騎士ジュイスには「経験」と「覚悟」その両方が十分に備わっていた。

俺はもうただ漠然と強くなる、と考えているだけでは駄目な時期にきているのかもしれない。

駄目だ・・・考える事が多すぎて思考がむちゃくちゃになってきている。

気分転換にでも中庭でも歩くか。幸い今日は学園もなければ、従者としての仕事も従者長からの呼びかけがないからいいみたいだしな。

* * * * *

俺は真昼間の太陽の光が輝く、屋敷の中庭に来ていた。

「中庭の花壇はいつ見ても、キレイだよなあ。サタンはビックり思つ?」

俺は心の中の会話ではなく、直接声に出してサタンに呼びかけていた。

今、中庭を他人が通りがかつたら俺は一人で話している変質者にでも思われるだろ？。

黒猫としてのサタンを召喚してもいいが、それはそれでなあ……

動物に話しかけるやつも変質者とたいして変わらない氣もする。

使い魔に話しかけるのは不自然じゃないんだが……猫の使い魔なんていないしなあ。

(この屋敷の庭の花達は儂の目から見ても、キレイじゃと思つぜ。主様よ。儂の年齢が三桁くらいの時に見たモンピクスの閃花よりキレイと言つても、過言ではないの)

「サタン。お前は世間に関心が無かつたんじゃ無かつたのか？モンピクスの閃花なんてよく知つてゐな」

俺はセントラル以外の国の事は一切分からない。羨ましい限りだ。

(儂も若かった頃は世界中を見て回つておつたからね。いつしか悪魔と呼ばれる様になつてしまい自分の精神世界に逃げ込んだがの)精神世界を作りだす魔法か……きっと俺なんかよりお前はずつと強いんだろうな……

(主様？どうしたのじゃ？)

「俺はお前が決闘の最後に何かを俺に施したこと覚えてるんだよ。サタン。サタン一体、俺に何をした？」

いや、そんな」とまどいでもいいんだ。サタンが施した「何か」がどう働いていようと興味はない。俺が今、無様に生き長らえているのもその「何か」のお陰かもしけないが……

今は関係ない。俺が今サタンと言葉で語りついているのは、今からサタンと大事な話をするためなのだから……

「サタン。すまない。さつきから念話と会話で支離滅裂な言葉しかお前に届いていないよな。要するに俺はお前に相談があるんだ。

(主様が儂に……相談とな?嬉しいのう。儂も随分、主様に頼られておるのかのう)

ああ、お前にはいつも救われてるよ。言葉では決して言えないが。

念話でしか伝えられないことがある。

(わづこつのは面と向かって言つて欲しこのう。嬉しいがの。)

悪い。わづこつキザつぽい台詞は俺は苦手なんだ。

とにかく俺はお前と話したいことがあるんだ。

大事な話なんだ。一人きりになれる場所はないか? サタン?

(二人で――――づむ。了解したのじゃ! それづ!)

こうして、俺は数分の時間の後、サタンの黒い魔力に包まれた。

* * * * *

「 」

薄暗い場所。前にも「 」に来た気がする。

ペタペタ。

可愛らしい足音が薄暗い空間に響く。俺の前方から悪魔を連想させるような美しい女が歩いてきた。

「 」の姿では久しぶりじやのう。主様よ

「まだ一ヶ月も経つてないだろ?」

俺は微笑みながらサタンに話しかける。

「主様と儂の心が繋がっている今だからこそ主様を儂の精神世界に引きずり込んだのじゃが、相談場所は 」

上田遣いでサタンが俺に聞いてくる。

「ああ。申し分ないよ。いや、 」ほど相談場所にうつをつけの場所はないさ

「それは良かつたのじゃ。して、話しどは? 儂はあまり世間に詳しくないのじゃが . . . 」

「別に世界の常識についての相談なんてしないから大丈夫だ。俺は

お前に「力」について聞きたい

「力とな？」

「そう力だ。精神力、魔力、権力、戦闘力。このすべての力が俺には足りない。俺は思い知ったんだ。この世界。タランティルスで平民が生き残り尚且つ夢を果たすためには、至高の力が必要だと。決闘で思い知った——！！貴族の理不尽を！圧倒的な忠義と覚悟を！俺はお前に聞きたいんだ……どうやつたらこの世界の力の因縁から逃れられるのか……」

「うむ……主様よ……このタランティルスという世界に生きている限り力の因果から逃れることは出来んよ。そう、逃げることは出来ないのじや。だつたら、力を求めて進むしかあるまい。唯一の例外は最強の存在。自由奔放に振る舞えるのは最強のみ。なら儂から言わせれば、逃げるのではなく、更なる力を求めるべきじや。儂もこの世界で足搔いたのじやが……結局は化け物扱いされて終わるじやつたよ」

「力を求める、と？お前はそう思うのか？」

「そうじや。タランティルスという世界は強者が法、ルールじや。なら、どう言い繕つても強さを求めるしかあるまい。そこに身分は関係ないはずじや」

その言葉を聞いて俺の何かが変わった気がした。

「平民だとしても強くなれると？」

「うむ」

「貴族の側に生涯いても、許されると？」

「強ければの」

「どんな外敵からも大切な人を守り切れると？」

「最強なら守りきれる」

なら俺が・・・俺の進む道はやはり一つだ。力の扱いなんて力を手に入れてから考える。まずは、強くなるんだ。結局、目的は変わらないんだな。

「主様はその真理に気づいておったはずじゃが、ビリしたのじや？」

真理か。そうだな。タランティルスでは強ければどんなことでも・・・

「少し、心境の変化があつたんだよ。サタン。でもお前の話を聞いてやつぱり俺が目指すのは結局――「そこ」だつたんだ」

俺は・・・俺は・・・

「サタン。俺は強くなりたい。今だからこそちゃんと力と向き合いながら言える。俺は強くなりたいんだ。俺は更なる高みへと進みたい。あの騎士と同じように。だから・・・手を貸してくれないか？ サタン？」

「当然じゃ。儂は主様を未来永劫支え続けよう。主様を初めて見たときに感じたから、の」

「何を感じたんだ？」

「それは秘密じゃよ

サタンが妖しく笑いながらはぐらかす。

「そりゃあ……でもありがとな。サタン。お前のお陰でやつと前に進める気がするよ」

「儂も主様の役に立てたようだ、良かったのじゃ

俺はサタンとのリンクを切り、引き上げられるような感覚を感じながら、現実世界へと戻っていった。

最後にサタンが優しく俺に微笑んでくれた気がした。

第四十話 進むしかない（後書き）

ロイの気持ちの整理です。もうすぐ物語を動かしたいところ。そして、三点リーダを変えました。・・・と・・・・・どっちがいいんでしょうか？悩みます。

魔法についての追記です（本編ではありません）

この世界の魔法の概念について本編ではあまり触れられていないようを感じたので追記です。特にロイとサタンの主觀を切り替えた魔法は世界観説明をみていない人はポカーンとなつた筈。

まずタランティルスの魔法は詠唱がありません。ノーモーションで魔法を放てます。なら大規模な魔法を使わなければいいのかと言えばそうでもないのです。大規模な魔法ほどその魔力も大きい。つまりはそれ相応のリスクがあるということです。

ついでに未開拓魔法とは人類が未だその魔法の領域に踏み込む事が出来ていないことから畏怖を込めて未開拓魔法と呼ばれるようになりました。

決闘でサタンが行使したのは未開拓魔法ですね。

魔法についてはこのくらいです。作者の文才がない為にこのくだらない話を入れることをお許しを。

第四十一話 いきなり（前書き）

三点リーダを後々 に変えるかもしれません。 . . .
・より の方が見やすいと思うのです。近いうちに大
規模な改稿をするかもしれません。ご容赦を。

第四十一話 いきなり

俺は屋敷の中庭で一人佇む。サタンの精神世界から帰ってきたばかりで、なんだか魔力に酔っている気がする。

サタンという膨大な魔力の側にいたからかもしれない。俺はサタン曰く、膨大な魔力を持つているらしいが、魔力は魔力と比べてまだ不明な点が多い。サタンは俺の魔力を羨ましそうに見ていたが、俺からしたらサタンの魔力の方がよっぽど羨ましい。

魔法か . . .

魔法の練習に魔力のコントロール。強くなるための課題はまだたくさん残っている。前はジュイスという騎士にいいように威圧され、魔力が乱れてしまった。

もうあんなへマはしたくない。最悪の醜態だ。俺はあの決闘をお嬢様に見られてしまつただろうか？平民の決闘など見る価値もないと突っぱねられただろうか？出来れば後者であつて欲しい。

自分が負ける姿なんて見てほしくない。

特にそれが守りたい人相手なら。

こんな情けない心配をしないように俺は強くなろう。今、改めて誓うんだ。

負けない、だとか。不敗、だとか。そんなのは普通の人間には無理だ。

俺はかつて負けないと誓つたがやはりその誓いは崩れた。

普通の人間である限り敗北の定めというのは必ず付いて回つてくる。

俺も例外ではない。やはり負ける時は負ける。どんなに足搔いても、それだけでは乗り越えられない壁はあるものだ。

だから俺はまた誓う。負けないといふのは無理かもしれない。それでも、勝つことを諦めないようにするんだ。

「勝つことを諦めない」

これなら俺にでも出来る。常に敵に抗おうとする俺をイメージする。

あの決闘。初めての戦いで俺は心が折れかかっていた。半ば勝負を諦めていた。

だから負けたんだ。気持ちからしてなつてなかつた。負けないと言つてただ自分を美化しようとしても駄目だった。

だから無理な幻想は抱かない。俺はただ自分の最善を尽くすだけ。勝てないのなら足搔く。理想だけでは勝てないから、どんな手段を使つても勝つ。

俺はまた中庭で誓おう。以前は、レーナ様が隣にいたこの場所で。

前は大声で俺は負けないと中庭で叫んだものだが、そんな非常識なことは今の俺には出来そうにない。

心の中でひつそり誓おつ。

(お？主様。朗報じや。主様の氣力が前とは比べ物にならないくらい精鍊されておるぞつ。)

ん？本当かー？それは嬉しいな。心の変化があつたからかな？

(主様の心は今、とても穏やかで鋭い。とてもよいコンディションじや。あの傲慢な王のような力への執着も氣からは感じん。最高の状態じやの)

ははっ。久しぶりに俺に嬉しい知らせが届いたよ。

(そんな寂しそうに笑うではないのじや。主様よ。決闘の後からずつと思い詰めた表情じやぞ？)

そう・・・かな。

(使い魔といふのは主人の表情をよく見るものじや。主様がそんな顔をしていては儂もなんだか元気が出ん。笑う時はしつかり笑うのじや)

ああ。そうだな。今はまだうまく笑える気がしないけどいつか、笑つて見せるぞ。心から。

(うむ。それがよいのじや。それと主様。大事な事を伝えねばならん)

大事なこと？

(「む。 セうじや。 主様の氣力がパワーアップしたのは自分でも何だか実感出来るじゃろ? ）

ああ。確かに暖かい充足感が俺を中心広がっていくような気がする。前とは違う感じだ。

(そのパワーアップに伴い、気づかれるのじゃよ)

気づく?

(よほど主様にじ執心のよひじや。 何回も妨害をしておるのじやが . . .)

ん?

(主様の莫大な氣力に興味を持った輩かのう)

どうにつけとだ?

(膨大な氣といつのは、どんなに普段隠してこても、わかるやつには察知されてしまうものじや。 つまり、いつにつけじや———)

俺の右側面からこきなり巨大な炎が飛んでくる。

何つ！ 魔法！？

俺の身体は咄嗟に回避しようとするとが間に合わない。

(「ふう不足の事態にこそ儂があるのじや。 魔法の防御障壁を主

様に（

黒いような青いような魔力がロイを覆つ。巨大な炎はその魔力に飲み込まれ消えた——

「へえー。今のは防いじゃうんだ。ますます興味が出てきたわ。ロイ・カーレス君」

「誰だ！？」

俺は上を見上げる。視線のさきには好戦的な瞳を持った赤髪の女が浮かんでいた。

飛んでいる！？

（魔法じやよ）

凄いな……年は俺とそんなに変わらないくらいなのに、こんな魔法を扱えるなんて。

「学園のレベルが今、どのくらいか測るためにトリフロスを送つたんだけど、あなたにあっさり倒されちゃった。それで今日まで、ロイ・カーレス。あなたを追跡していたんだけど、どうやらビンゴだったようね」

「ビンゴ？何がだ？」

「それは秘密。でも貴方には消えて貰わなくちゃ。私たちの障害になりそうなものは、ね。平民を手にかけるのは心が痛むのだけれど……あんな気力を白毎堂々見せられちゃ黙つてられないわつ

！」

好戦的な瞳をした少女は手から炎を飛ばす。

「ちっ！何故俺を！」

ロイは大きく炎を回避する。屋敷の花壇に少し火が飛び火する。

とてつもない魔法だ……当たつたら……考えるのはよそ
う。

「私は爆炎のヒータ。脅威は排除しなきやいけない。貴方みたい
な人がどうしてトリフロスを倒せたかが謎なんだけど……ま
あ、油断せず殺させてもらひわ」

なんだよ……最近、実戦だらけだ……

ただが殺られる気はない。

「そつちがその気なら俺も全力だ。本氣でいかせてもらひ」

「ヒュー。かつこいいじゃん。落ちじぼれのレッテルをはられた男
とは思えないわね」

ヒータとやらが茶化す。

そういうえば、戦う前に俺も赤髪の女に言いたいことがある。

「戦いの場所を変更しないか？」

「場所？私には関係ないわ！」

容赦なく手から炎を出すヒータさん。

はあ。今までセンター・ハートの従者達が必死に整備してきた中庭が
むちやくぢやに荒らされる

「お前だけは絶対に許さない！」

「いい感じになってきたわね。なら戦いましょう。ロイ・カーレス
！」

センター・ハート家の皆様を巻き込むわけにはいかない。だが幸いラ
ザイン様は外出の様だ。（玄関を見た時ラザインの愛用の靴がなか
つた）

お嬢様に気取られないようにしなければ

王との決闘騒動に今回はこの騒動。今度こそセンター・ハートに捨て
られてしまつかもしれない。

病み上がりのように身体は重いが、静かに勝つしかない！

第四十一話 こわなつ（後書き）

かつと圧せました。ヒータれど。

第四十一話 「爆炎」との邂逅

(主様。氣をつけるのじや。純粹な氣力とこうのは今回の事のよう
に強者を惹きつけやすい。自分の氣力を隠す事を覚えなければ、い
つか死ぬのじや)

このヒータとこう少女が強者だとこうことか?サタン?

(うむ。油断ならん相手じや。油断したら、死ぬかもしれん。主様
は儂が確實に守るがの)

サタンにそこまで言わせるか

年は俺とそう変わらないのに見えるのに 僕より先に到
達してゐる奴なんてたくさんいるつてことか。

何にせよだ。本氣でいく。立ち止まつたら、死だ。

「私の爆炎の名を聞いても何の反応もしてくれないのね

少し傷つくわ」

笑いながらヒータが火を飛ばす。

「侵入者が何をつー少しも傷ついてないだろー」

俺は屋敷の中庭を侵食する炎を走つて避ける。しばらく回避行動を
とつていたら、不意に——

パチパチパチ。

赤髪の少女が出した炎から嫌な音が聞こえる。炎がメラメラと輝く。

「何をするつもりだ！」

「貴方が躲してばかりだから、つまらなくって。今度は躲せるかしら？」

ヒータが指をパチっと鳴らすその瞬間炎が分散した。複数の炎が俺に迫ってくる。

攻撃パターンを変えてきたか・・・・・流石に分散する炎を全て躰すのは無理そうだ。

なら・・・・

サタン。あの炎の弱点部分を教えてくれーお前なら分かるだろ？お前に頼るばかりで悪いが・・・・

（お安い御用じや。あの炎の弱点は中枢つまり、支点の部分。中央を狙えば良かるわ。しかし、どう捌くのじや？）

それだけ聞ければ充分だ。やつてやる。

「躰す氣もおきないのかしら？まだまだ遊びのつもりだったのだけど・・・・トリフロスを倒した実力があるから、貴方を探してたんだけどなあ。」

俺が動かない事を諦めたと勘違いしたのか、上から田線で随分なことを言つてくれる。癪に障る。

なら、今から見せてやる。俺の切り札を。俺は手に莫大な気力を込める。

俺を中心として風が舞い上がる。俺に白い神聖な何かが纏わりつく。俺は空間から自分の魔武器を抜く。氣仙花がいつも以上に過剰な光を放つ。

「これは 気力 へえ。中々ね。だからこそ惜しいわ。ここで、貴方を殺さなくてはならないなんて」

勝手にほざいてる。爆炎さん。

「いぐぞ 氣仙花。不可視の斬撃！」

なっ。これは 前よりも手応えが違う。俺の気力が変化したからか？ 斬撃の出力が上がっている。

（おそらく、主様の気力の質が上がったからじゃろう。全力の儂でもダメージくらいは負うくらいの攻撃かの。凶悪な攻撃じや。流石じやよ。主様）

俺の見えない斬撃はあつという間に複数の炎を真つ二つに切り裂きヒータへと向かう。

「こんな莫大な気を使つていいのかしら？ 自分の立場を理解して欲しいわね。貴方には。おかげさまで私もそれ相応の技を使わなくてはならないじゃない。はあ こんなことになるなら一瞬で殺ればよかつたわ。バレるけど、仕方ないわね」

ヒータに見えない斬撃が襲いかかるが……莫大な炎の壁を作り防がれてしまった。

「防いだのか！？」

「私をただの侵入者と勘違いしている時点で貴方は間違いを犯したよ。ロイ・カーレス。言つたでしょ？私は「爆炎」だつて」

「何の話だ……」

「貴方の勝ちにいくという思いは氣力から伝わったわ。素晴らしい素養よ。私は今まで貴方を探していた。妙なモノに邪魔され続けてきたけど、今日にきて貴方の気が顯著になつたわ。だからこそ、私はここにきた。貴方は貴族の従者」ときで終わる人材ではないわ。もともと貴族の思想に染まっていなければ戦うつもりは無かつた……私はね。貴方を「私達」の元へ誘いにきたのよ」

「誘いだと？俺を？」

「そう、平民の貴方を。特殊な立場の貴方を。貴族の元へ引き取られた哀れな平民の子」

ヒータが大仰に言つ。

「貴方は私達の元へ来るべきだわ。腐りきつた貴族など見限ればいい。貴方の力を私達が求めているのよ。だから……来なさい。私達の元へ。悪いようにはしない。第八位を倒した貴方なら丈夫。だから……」

「何を言つているんだ！誘い？仲間になれと？それに第八位を倒し

た？どうこう事だ！？」

「私の反応はもう城に感知されている筈。もつ時間がないわ。ロイ・カーレス。私達と来て。そうしないと私は貴方を殺さなければならぬわ。「爆炎」として」

「話が性急すぎるーそれに俺はセンター・ハートを守るという使命があるーここを離れる訳にはいかない！お前の誘いには乗れない！」

「トリフロスを倒した戦力…………しかも平民…………悔しいわ…………貴族に毒されたのね…………なら仕方ないわ。もつ時間も無いしね…………ごめんね。ロイ。貴方を殺すわ」

「謝る必要はない。俺が勝手に断つて、お前が勝手に俺を誘つただけの話だ」

「俺の全力の攻撃を簡単に防いだところを見ると、お前はかなり強いのだろう。しかし、俺はお前に勝つてみせる！ー！」

「無理よ。私は「爆炎」だもの。そう…………ただの化物だから…………」

ヒータが笑いながら言つ。人を喰つたような笑みだ。しかし、どこか真に迫るものを感じる。こんな笑いをする女に俺はなぜ仲間になれと誘われたのだろうか。わからない。だが、俺の知らないところで何かが色々と動きだしていたのかもしねり。

「爆炎だか何だか知らないがたいした自信だな。それが気に食わない！」

俺だつて強くなるために努力してんのだ！見下されたくはない！

「でも・・・・・・終わりよ。貴方を消さなければならぬと「爆炎」の一いつ名を持つ私が決めたから。消えて貰うわ。貴方が貴族だつたら・・・・・・こんなに心が痛まないのに・・・・・・さよなら。哀れな平民」

ヒータの両手に莫大な炎が集まる。ヒータが両手を地につけ炎の柱を作り出す。それはまるで樹のようだ。

「大炎の樹」

ヒータの技がロイへと向かう。

「これはっ！魔力で出来た炎じゃない！？氣力でこんな炎を！いつたい・・・・・・」

まずい。安全な場所が無い。中庭の芝も景気よく燃える。莫大な大きさの炎が俺に迫る。

「不可視の斬撃！」

氣力を込め、見えない斬撃を放つ。しかし、炎の樹はびくともしない。

まだやれる事はある筈だ。冷静になれ。不可視の斬撃では駄目だ。なら・・・・・・

「サタン。魔力を頼む」

(うむ)

「莫大な魔力で押し返すつ……はあつ……」

サタンから借りた魔力で押し返そうと、試みる。しかし、炎は僅かにしか後退しない。

(所詮、借り物の魔力の限界じゃの……いくら魔力量が多くても本物の攻撃には勝てんか……逃げるのも……また儂が出るしか……)

「死んでたまるか！」

このままでは後ろの屋敷までこの炎に飲み込まれる。それだけは避けなければならない。

結局、思いつかない。あの炎を止める手段は現時点の俺ではない。だから……特攻しかない。少しでも炎をせき止めるしかない。

(またそういう決断を！主様！仕方あるまい……また「禁じ手」を……何じゃと！主様の氣力が圧倒的過ぎて儂の魔力が及ばん！まずい！主様止まるのじゃ！)

「はあつっつっ……！」

俺は死ぬ気で炎に突っ込む。その瞬間、炎と俺の間に一つの影が乱入した。

「二の感じはやはり、君だつたか。ヒータ君。先ずはこの炎を止めねばならないか。凍結せよ。ブリザリア・フリーズ・ニア」

センター・ハート現当主。ラザインが戦闘に乱入する。

「まさか、ここってセンター・ハートだったのかしら？　はあ……ついてないわ。面倒ね」

「君とは五年ぶりかね？　ヒータ君。あの時は引き分けたが、ここにはアメリカとレーナが残してくれたロイ君がいるんだ。今は負ける訳にはいかない！」

「別に貴方には興味ないのよ。今はね。私が興味を持っているのは後ろの子」

「ロイ君か？」

「そう。もう駄目だつたけどね」

「なるほど……大体理解したよ」

ラザイン様とヒータとやらが話す。正直、何の話かさっぱりだ。

「センター・ハートに喧嘩を売つたんだ。君は戦争でも起こす氣かい？」

「いやいや。今日は王都の下見。私はまだ動く氣は無かつたのだけど……思つたより彼が強くて」

「私が鍛えたんだ。クロフォード同様にね」

「だから、強い訳ね。あーあ。多勢に無勢になっちゃった。ラザイ
ンは面倒だし、ロイ・カーレスは諦めるか。「ただそこそこいるだけ
の最強」を動かされても困るし

「なぜお前がその事を知っている? ヒータ君」

「私達を甘く見ないで欲しいわね。貴族さん。貴方は確かにまとも
な貴族だけど、腐りきつた貴族は少しお金を渡しただけで情報を一
杯喋つてくれたわ」

「賄賂か」

「ふふつ。そこまで私達の手が伸びてきているのを自覚したほうが
いいわよ? 少なくとも王都の学園にいきなり化物を送り込めるぐら
いにはね」

「アメリカが話していたトリフロスの事かしかし、い
やに饒舌だな。ヒータ君。そんなに喋つてもいいのかい?」

「まあ、いいんじゃない? 「それら」を証明する方法は無いし。そ
れに貴方だけは貴族なのに話していくてもあまり殺意が湧かないしね。
五年前にそういうの通り越したし」

「そうかもしれないな。私もそんな感じだよ」

俺の名前が話しだらばら出てくるが、話しの内容が理解出来ない。
何が起こっている? 今、この場所で。そもそもラザイン様と対等に
話すヒータという少女は何者なんだ?

「では退くとしましょうか。じゃあね。ロイ・カーレス。ラザイン。貴方達はいづれ私達の脅威になるわね……それにロイ・カーレスの中にいる「モノ」にも挨拶しておこつかしら?」

「一。」

「こいつまさか……サタンを……

(うつすらじやが気づかれたの。得体のしれん女じや。まあ、儂の得体のしれなわには敵わんがの)

「ロイ君の中だと? どういう事だ? ヒータ君?」

「さあね。それより、私とロイ・カーレスが「会つた」という事実をどうにかした方がいいんじゃない? 今、彼はかなり危険な状況にいると思つけど?」

「む……」

ラザイン様が黙る。俺は危険な状況にいるのか?

俺らを一瞥してヒータは炎を纏い消え去る。

そして、ラザイン様が俺にある事を告げた。

「ロイ君。話したい事がある。アメリカも一緒だ。とても大事な話だ」

「わかりました」

あの、女についてかな？くそっ。今、俺がどういう状況に立たされているかがわからない。

俺はどうしようもなく不安だった。

第四十一話 「爆炎」との邂逅（後書き）

伏線ばかりでした。

第四十二話 排除命令（前書き）

今日はクリスマス・イヴ。この作品でもいつかクリスマスに関する出来事での話をやりたいですね。タランティルスという世界にクリスマスという概念があるかは謎ですが。今日は連投させていただきます。一応、私の中でこの作品の方向性は定まりました。学園ハーレムでアメリカとキャッキャウフフを想像していた方は申し訳ありませんが、暫くアメリカは出ないかもしません。少なくともストックの中にはあまりアメリカがいません。ただ一つ言わせてもらうと、この作品のヒロインはアメリカです！サタンもヒロイン？かな。

第四十二話 排除命令

「」はセントラル城。今、セントラル城での一室で話をしている人物が一人いる。

一人はセントラル王。王都セントラルを治めてきた優秀で老練な王である。

もう一人は王の専属騎士である、クロフォード。「天才」の一いつ名を持つ頭が切れる青年である。

「で、何故私をここに呼んだのだ？ 我が騎士クロフォードよ」

「実は今日 莫大な気の反応を一つ感じまして」

「ほう お前が私に忠告が必要だと判断したくらいの気力の持ち主か。だが、何故こんな部屋で話す必要がある？些か狭いであろう」

「人目を気にしなければならない話ですので」

「その気力の持ち主が原因か？」

「その通りです。陛下。その気力の持ち主とは「爆炎」です」

「爆炎が――！ それはいよいよあちらがしかけてくるということか？ クロフォードよ？」

「いえ。その可能性は低いから。「爆炎」の反応があつた場所から見てわかります」

「爆炎の反応はどう出たのだ？場合によつては私はあれを動かさなければならん」

「その心配はありません。もう「爆炎」の反応は沈静化しています。多分もう一人の莫大な氣力の持ち主とコンタクトをとつたのかと。そして、爆炎の反応が出たのはセンターハート家」

「それはまた数奇な——！五年前の再来ではないか！！！もう一人莫大な氣力をもつ人物があると言つておつたな。まさかもう一人といふのはラザインか？」

「そうではないのです。陛下。」こからが問題なのです。陛下は今日の決闘を覚えておいででしょ？」「

「もちろんんだ。ラザインの従者とジュイスが……まさか……」「爆炎」がコンタクトをとつたのはラザインでは無く……
・・・あの平民か！」

「非常にまずい状況だと思われます。陛下もお気づきだとは思いますが、もう一つの反応はロイ・カーレス。例の平民です。つい、平民なのです。早急に排除をすることを進言します」

「うむ……」

「ジュイスを排除できるほどの実力を持つ戦士が「向こう」にいつてしまつたら、我々が危ないので。そして彼はまだ若い。まだまだ強くなることでしょう。彼は危険すぎる。排除するのには惜しい

ですが、味方にならないのなら対処できる内にすべきかと。彼が「爆炎」にどう返答したのかはわかりませんが、「爆炎」と強い平民がコンタクトをとってしまった。その事実だけで危険です

クロフォードが王に訴える。

「確かにな……やはり平民か……しかし、ラザイントは反発しそうではあるな」

「その心配はありませんよ。陛下。さつきセンター・ハートにロイ・カーレスの排除の協力要請を出しました。もし、反発するのなら反逆罪で罪を被せるだけです」

「手が早いな。クロフォードよ。しかし……惜しい。あれは軍にいれるつもりだったが……」

「確かにあの力は魅力的でしたが、仕方ありません。彼が敵にならない内に排除が一番です」

「そうであるな。しかし「爆炎」も興味を持つか……やはり、ロイ・カーレス……素養があつたのだな」

この瞬間、平民であるロイを対象に城から排除命令が出た。

その命令を聞いて急ぎ帰ったのはラザイン。そうしてラザインはまた、「爆炎」と邂逅するがそれは少し後のお話。

第四十二話 排除命令（後書き）

閑話みたいなお話。少し過去話ですね。ラザインはロイの排除命令を聞いてどう行動するんでしょうか？ヒータが何者なのかはすぐあかそつかなー、と思っています。ロイは超弩級の不幸をくらいましたね。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す（前書き）

前話短過ぎでした。反省しています。なんか王国側書きつい込んですよねえ。力を至上とする王国を書くのは難しいです。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す

俺は今、センター・ハートの屋敷の一室にお嬢様とラザインと共にいた。

「さて、ロイ君。いろいろ聞きたことがあるだろ？が、我々には時間が無い。特にロイ君には。王国が動き出すまえに君に簡潔に状況説明を行うよ？いいね？」

ラザイン様が俺に確かめるような視線を向ける。俺は少々困惑気味ではあったが、視線をラザイン様に向ける。

「わかりました。俺もあの女の詳細を聞きたいので」

あの女とは「爆炎」と名乗った少女のことだ。ラザイン様とは因縁があるようなんだが……

「話はその事だけじゃないんだ……だから、アメリカにも同席してもらっている」

「父様。荷物持ちは病み上がりなんですよ！あんな決闘騒ぎがあつたばかりだと、このに今わざわざ話なんて……」

「今は時間が無いんだ。分かってくれ。私も焦っているんだ」

「父様がそこまで言つのなら……」

「では本題に入ろう。まず、状況を分かつてもらう為に酷な事を伝えなければならない。ロイ・カーレス。君に学園から退学の通知が

来ている

「「なつー。」」

俺とお嬢様の声が重なる。

「何故ですか！？父様！？」

「今はその質問に答える時間は本当に無いんだ。次の説明に入らせてもらひつ」

ラザイン様が強引に話を進める。俺も退学の通知を聞いて驚きを隠せないが・・・退学の件よりも重要な話があるのだろうか。退学ということとは護衛権の従者の解任について・・・か？

「こ」の話は少々突拍子もない事実を淡々と話すことになる。しかし聞いて欲しい。特にロイ君には

「わかりました」

「君も今、色々戸惑つてはいるとは思うけど、この話は心に刻み込んで欲しい。では話すよ。まず、「爆炎」についてだ。アメリカは知つていてると思うが、「爆炎」は平定軍の上位に入る者の名だ」

「父様。今、そんな話が必要なんですか？爆炎がこのセントラルに入った訳でも・・・」

「いや、アメリカ。爆炎はセントラルに侵入した」

「！？」

「しかし、それはさして重要ではない。今はロイ君の問題だ。ロイ君、平定軍とは何かわかるかい？」

平定軍？知らない……な。

「平定軍ですか？」

「そこから、説明が必要なようだね。時間は惜しいが、仕方がない。一から説明しよう。ロイ君。よく聞いておくんだ。これは、君自身の運命に関わる」

「わ、分かりました」

ラザイン様の圧倒的な威圧感に俺は圧倒される。何か覚悟を決めた表情だ。

「平定軍というのはね。貴族を打倒する為に作られた戦争組織なんだ。平定軍は今、セントラルの王国に喧嘩を売つても互角と言われている。それほどの組織だ。さつきも言ったように爆炎は平定軍のなかでも上位に入る化物だ。そんな爆炎と君は邂逅してしまったんだよ。その意味は分かるかい？」

「いえ、分かり……ません」

「すまない。私もレーナが死んだ時くらいに焦ついていてね。理路整然と話すことが出来ていなかった。平定軍というのはね、貴族を打倒する為に作られた組織ということから分かるように、平民だけで作られた組織なんだ。爆炎も君を殺すのをためらっていただろう？それは君が平民だったからだ。そして、あまつさえ君を引き入れ

よつとしたよつだ

「俺を平民の軍に？」

「そうだよ。爆炎は君を仲間に引き入れようとした。それが問題なんだ。爆炎ほどの女が直接引き入れようとする男なんて、怪しいとは思わないかい？」

「それが、俺と云ふことですか？」

「ああ。残念な事にね。それに不幸は重なってしまった。君は前々から王国に目をつけられていたが、爆炎と君が邂逅した事によりついに王国は動きだしてしまった。ロイ君。今、君には排除命令が来ている」「

「え・・・」

排除？俺を？

「ああ。正式にだされた辞令だ。おそらく覆ることは無い。君は、今王都にいるべきではない。かいづまんて説明してるからわからな事も多こと思つが・・・君は今すぐ逃げるべきだ・・・！」

「父様！？性急過ぎます！それに排除って云ひう・・・」

「話してる暇は無いんだ！！！！！ロイ君を死なせる訳にはいかない！！！説明不足なのは分かつていて。ちぐはぐなのは分かつてているんだ。だが、これだけは理解して欲しいんだロイ君、君は今王都全体の敵となってしまった。いわゆる賞金首にな。おそらく平定軍に加担していると推測されたのだろう。嘘では

無いんだ。君は今すぐ逃げなくてはならない」

そう言つて、ラザイン様は俺に黒いローブを渡す。

「これで、顔を隠しながら逃げなさい。そしてこれは各関所のパスポートだ。名前も偽造してある」

パスポートの名前はロイ・レスハートになつてゐる。

「ロイ君。今の君は何も分かっていないかもしない。しかし、そんな君を放り出さなければならぬのは悔しいが、ここに続けたらいざれは衛兵が来てしまう」

「荷物持ちが爆炎と出会つて……王国に田をつけられて……！」

「アメリカ。事態は飲み込めたね？」

「はい。そして排除……荷物持ちが危ないといつ訳ですか……なさい」

「」

「やつこつ」とだよ。ロイ君そのロープで身を隠しながら逃げなさい。今すぐに。君には暫く暇を取れる。従者のことは気にせず逃げなさい」

「俺は今、あの少女と邂逅した事で王国に狙われたということですね？」

「ああ。その解釈でいい。疑問は尽きないだろ？ 今は逃げるんだ。そのパスポートがあれば、この近辺の国や村には無料で

はいれるはずだ。そして、少しばかりだがお金も渡しておくれ

「これは . . . 金貨！？」

「ひとなに貰うわけには . . .

「いいんだ。その金は君の生存にも必要だろ？だから . . . いんだ . . . 「

ラザイン様が悲しそうな瞳で俺を見据える。お嬢様も悲しそうに . . .

どうやら、俺は何時の間にか国に狙われるようにになっていたらしい。

詳しいことは理解出来なかつたが、とにかくこの王都からは逃げないとダメって事か。

「もう時間は無いんですね？」

「ああ。もう逃げなさい」

「分かりました」

俺は黒いローブで身を隠しながら、玄関に向かつ。不意に後ろから声をかけられた。

「ロイ君ー！」

「ー。」

俺は後ろを振り向く。後ろには俺が貴族と認めたお二人が立っていた。

「君は私の家族だ。無事逃げ切ることが出来たら何れまた会おう」

「荷物持ち！必ず戻つてきなさいね！これは約束！」

「分かりました！」

そうして、俺は玄関を出た。

目の前には甲冑を着た衛兵達が居た。ここはセンター・ハートの中庭だぞ？ 何をしているんだ？

「お前がロイ・カーレスだな！」

衛兵の一人が俺に声をかける。

「そうだが？ 何か？」

「やはり平民だな。言葉遣いが汚い。間違いないこいつだ。こいつが排除対象だ！」

一斉に甲冑の騎士たちが俺に襲いかかる。俺は条件反射で敵を斬り伏せた。

「何つ……貴様あ……」

ケイルの風を受け続けた俺にそんな大上段の攻撃は通用しない。俺を舐め過ぎだ。

「王國軍の兵もたいした事は無いな」

俺はすれ違いをまにそつ抜け逃げた。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す（後書き）

久しぶりの更新。何故かつて？一作目を無謀にも書き始めたからです。タランティルスも頑張つて更新したいんですけど……疎かになりがちで。本当にすいません。ストックは腐るほどあるんですけどね（笑）書く時間が . . .

王都逃亡編スタート！それにしてもラザインの説明クソですね。あえてそうしたんですが。だって焦つている様を書きたいからです。はあ。それでもアメリカをサバサバと書き過ぎた。反省。本来のプロットとは全然違う劣化番になってしまいました（泣）実はつい先日データがパンクしまして。作者がうろ覚えで書いてしまったからです。本当に申し訳ありません。さあ。サタンとの一人旅が第二章です。もう少しだ。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す（前書き）

前話短過ぎでした。反省しています。なんか王国側書きつい込んですよねえ。力を至上とする王国を書くのは難しいです。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す

俺は今、センター・ハートの屋敷の一室にお嬢様とラザインと共にいた。

「さて、ロイ君。いろいろ聞きたことがあるだろ？が、我々には時間が無い。特にロイ君には。王国が動き出すまえに君に簡潔に状況説明を行うよ？いいね？」

ラザイン様が俺に確かめるような視線を向ける。俺は少々困惑気味ではあったが、視線をラザイン様に向ける。

「わかりました。俺もあの女の詳細を聞きたいので」

あの女とは「爆炎」と名乗った少女の事だ。ラザイン様とは因縁があるようなんだが……

「話はその事だけじゃないんだ……だから、アメリカにも同席してもらっている」

「父様。荷物持ちは病み上がりなんですよ！あんな決闘騒ぎがあつたばかりだと、このに今わざわざ話なんて……」

「今は時間が無いんだ。分かってくれ。私も焦っているんだ」

「父様がそこまで言つのなら……」

「では本題に入ろう。まず、状況を分かつてもらう為に酷な事を伝えなければならない。ロイ・カーレス。君に学園から退学の通知が

来ている

「「なつー。」」

俺とお嬢様の声が重なる。

「何故ですか！？父様！？」

「今はその質問に答える時間は本当に無いんだ。次の説明に入らせてもらひつ」

ラザイン様が強引に話を進める。俺も退学の通知を聞いて驚きを隠せないが・・・退学の件よりも重要な話があるのだろうか。退学ということとは護衛権の従者の解任について・・・か？

「」の話は少々突拍子もない事実を淡々と話すことになる。しかし聞いて欲しい。特にロイ君には

「わかりました」

「君も今、色々戸惑つてはいるとは思うけど、この話は心に刻み込んで欲しい。では話すよ。まず、「爆炎」についてだ。アメリカは知つていてると思うが、「爆炎」は平定軍の上位に入る者の名だ」

「父様。今、そんな話が必要なんですか？爆炎がこのセントラルに入った訳でも・・・」

「いや、アメリカ。爆炎はセントラルに侵入した」

「！？」

「しかし、それはさして重要ではない。今はロイ君の問題だ。ロイ君、平定軍とは何かわかるかい？」

平定軍？知らない……な。

「平定軍ですか？」

「そこから、説明が必要なようだね。時間は惜しいが、仕方がない。一から説明しよう。ロイ君。よく聞いておくんだ。これは、君自身の運命に関わる」

「わ、分かりました」

ラザイン様の圧倒的な威圧感に俺は圧倒される。何か覚悟を決めた表情だ。

「平定軍というのはね。貴族を打倒する為に作られた戦争組織なんだ。平定軍は今、セントラルの王国に喧嘩を売つても互角と言われている。それほどの組織だ。さつきも言つたように爆炎は平定軍のなかでも上位に入る化物だ。そんな爆炎と君は邂逅してしまったんだよ。その意味は分かるかい？」

「いえ、分かり……ません」

「すまない。私もレーナが死んだ時くらいに焦つていてね。理路整然と話すことが出来ていなかった。平定軍というのはね、貴族を打倒する為に作られた組織ということから分かるように、平民だけで作られた組織なんだ。爆炎も君を殺すのをためらつていただろう？それは君が平民だったからだ。そして、あまつさえ君を引き入れ

よつとしたよつだ

「俺を平民の軍に？」

「そうだよ。爆炎は君を仲間に引き入れようとした。それが問題なんだ。爆炎ほどの女が直接引き入れようとする男なんて、怪しいとは思わないかい？」

「それが、俺ということですか？」

「ああ。残念な事にね。それに不幸は重なってしまった。君は前々から王国に目をつけられていたが、爆炎と君が邂逅した事によりついに王国は動きだしてしまった。ロイ君。今、君には排除命令が来ている」「

「え・・・」

排除？俺を？

「ああ。正式にだされた辞令だ。おそらく覆ることは無い。君は、今王都にいるべきではない。かいつまんて説明してるからわからな事も多こと思つが・・・君は今すぐ逃げるべきだ・・・！」

「父様！？性急過ぎます！それに排除ってどういう・・・」

「話してる暇は無いんだ！！！！！ロイ君を死なせる訳にはいかない！！！説明不足なのは分かつていて。ちぐはぐなのは分かつてているんだ。だが、これだけは理解して欲しいんだロイ君、君は今王都全体の敵となってしまった。いわゆる賞金首にな。おそらく平定軍に加担していると推測されたのだろう。嘘では

無いんだ。君は今すぐ逃げなくてはならない」

そう言つて、ラザイン様は俺に黒いローブを渡す。

「これで、顔を隠しながら逃げなさい。そしてこれは各関所のパスポートだ。名前も偽造してある」

パスポートの名前はロイ・レスハートになつてゐる。

「ロイ君。今の君は何も分かっていないかもしない。しかし、そんな君を放り出さなければならぬのは悔しいが、ここに続けたらいざれは衛兵が来てしまう」

「荷物持ちが爆炎と出会つて……王国に田をつけられて……！」

「アメリカ。事態は飲み込めたね？」

「はい。そして排除……荷物持ちが危ないといつ訳ですか……なさい」

「」

「やつこつ」とだよ。ロイ君そのロープで身を隠しながら逃げなさい。今すぐに。君には暫く暇を取れる。従者のことは気にせず逃げなさい」

「俺は今、あの少女と邂逅した事で王国に狙われたということですね？」

「ああ。その解釈でいい。疑問は尽きないだろ？ 今は逃げるんだ。そのパスポートがあれば、この近辺の国や村には無料で

はいれるはずだ。そして、少しばかりだがお金も渡しておくれ

「これは . . . 金貨！？」

「ひとなに貰うわけには . . .

「いいんだ。その金は君の生存にも必要だろ？だから . . . いんだ . . . 「

ラザイン様が悲しそうな瞳で俺を見据える。お嬢様も悲しそうに . . .

どうやら、俺は何時の間にか国に狙われるようになっていたらしい。

詳しいことは理解出来なかつたが、とにかくこの王都からは逃げないとダメって事か。

「もう時間は無いんですね？」

「ああ。もう逃げなさい」

「分かりました」

俺は黒いローブで身を隠しながら、玄関に向かつ。不意に後ろから声をかけられた。

「ロイ君ー！」

「ー。」

俺は後ろを振り向く。後ろには俺が貴族と認めたお二人が立っていた。

「君は私の家族だ。無事逃げ切ることが出来たら何れまた会おう」

「荷物持ち！必ず戻つてきなさいね！これは約束！」

「分かりました！」

そうして、俺は玄関を出た。

目の前には甲冑を着た衛兵達が居た。ここはセンター・ハートの中庭だぞ？ 何をしているんだ？

「お前がロイ・カーレスだな！」

衛兵の一人が俺に声をかける。

「そうだが？ 何か？」

「やはり平民だな。言葉遣いが汚い。間違いないこいつだ。こいつが排除対象だ！」

一斉に甲冑の騎士たちが俺に襲いかかる。俺は条件反射で敵を斬り伏せた。

「何つ……貴様あ……」

ケイルの風を受け続けた俺にそんな大上段の攻撃は通用しない。俺を舐め過ぎだ。

「王國軍の兵もたいした事は無いな」

俺はすれ違いをまにそつ抜け逃げた。

第四十四話 僕は、背を向け走り出す（後書き）

久しぶりの更新。何故かつて？一作目を無謀にも書き始めたからです。タランティルスも頑張つて更新したいんですけど……疎かになりがちで。本当にすいません。ストックは腐るほどあるんですけどね（笑）書く時間が……

王都逃亡編スタート！それにしてもラザインの説明クソですね。えてそうしたなんですが。だって焦つている様を書きたいからです。はあ。それにもアメリアをサバサバと書き過ぎた。反省。本来のプロットとは全然違う劣化番になってしまいました（泣）実はつい先日データがパンクしまして。作者がうつる覚えで書いてしまったからです。本当に申し訳ありません。

さあ。サタンとの「一人旅が第一章です。あ、サタンはもはや人外なので一人にはカウントしてません。サタンとロイと誰かが旅をします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043x/>

タランティルスの例外少年

2012年1月8日22時49分発行